

第100回 南海トラフ沿いの地震に関する評価検討会
第478回 地震防災対策強化地域判定会

気象庁資料



令和7年12月5日

本資料は、国立研究開発法人防災科学技術研究所、北海道大学、弘前大学、東北大学、東京大学、名古屋大学、京都大学、高知大学、九州大学、鹿児島大学、国立研究開発法人産業技術総合研究所、国土地理院、国立研究開発法人海洋研究開発機構、公益財団法人地震予知総合研究振興会、青森県、東京都、静岡県、神奈川県温泉地学研究所及び気象庁のデータを用いて作成しています。また、2016年熊本地震合同観測グループのオンライン臨時観測点（河原、熊野座）、2022年能登半島における合同地震観測グループによるオンライン臨時観測点（よしが浦温泉、飯田小学校）、EarthScope Consortiumの観測点（台北、玉峰、寧安橋、玉里、台東）のデータを用いて作成しています。

以下の資料は暫定であり、後日の調査で変更されることがあります。

令和7年11月1日～令和7年12月3日の主な地震活動

○南海トラフ巨大地震の想定震源域およびその周辺の地震活動：

【最大震度3以上を観測した地震もしくはM3.5以上の地震及びその他の主な地震】

月/日	時:分	震央地名	深さ (km)	M	最大 震度	発生場所
11/7	01:23	日向灘	23	4.7	3	フィリピン海プレートと陸のプレートの境界
11/7	04:25	日向灘	22	4.4	3	フィリピン海プレートと陸のプレートの境界
11/12	19:49	日向灘	36	3.7	1	フィリピン海プレート内部
11/20	01:28	四国沖	15	3.6	－	
11/25	18:01	熊本県阿蘇地方	9	5.8	5強	地殻内
11/30	23:55	愛知県西部	39	3.8	2	フィリピン海プレート内部

※震源の深さは、精度がやや劣るものは表記していない。

※太平洋プレートの沈み込みに伴う震源が深い地震は除く。

○深部低周波地震（微動）活動期間

四国	紀伊半島	東海
■四国東部 10月31日～11月3日 11月8日～10日 11月15日 11月19日～21日 11月24日～26日 12月1日～（継続中）	■紀伊半島北部 11月9日 11月11日～16日^{注1)} ・・・(2) 11月26日	11月1日 11月4日～9日 ・・・(1) 11月12日 11月30日～12月1日
■四国中部 11月4日 11月18日～25日 ・・・(3) 11月27日～12月2日	■紀伊半島中部 11月14日 11月19日 12月1日～（継続中）	
■四国西部 11月2日 11月4日～6日 11月8日～13日 11月15日～17日 11月19日 11月23日～25日 12月2日～（継続中）	■紀伊半島西部 11月3日 11月8日 11月27日 11月30日～（継続中）	

※深部低周波地震（微動）活動は、気象庁一元化震源を用い、地域ごとの一連の活動（継続日数2日以上

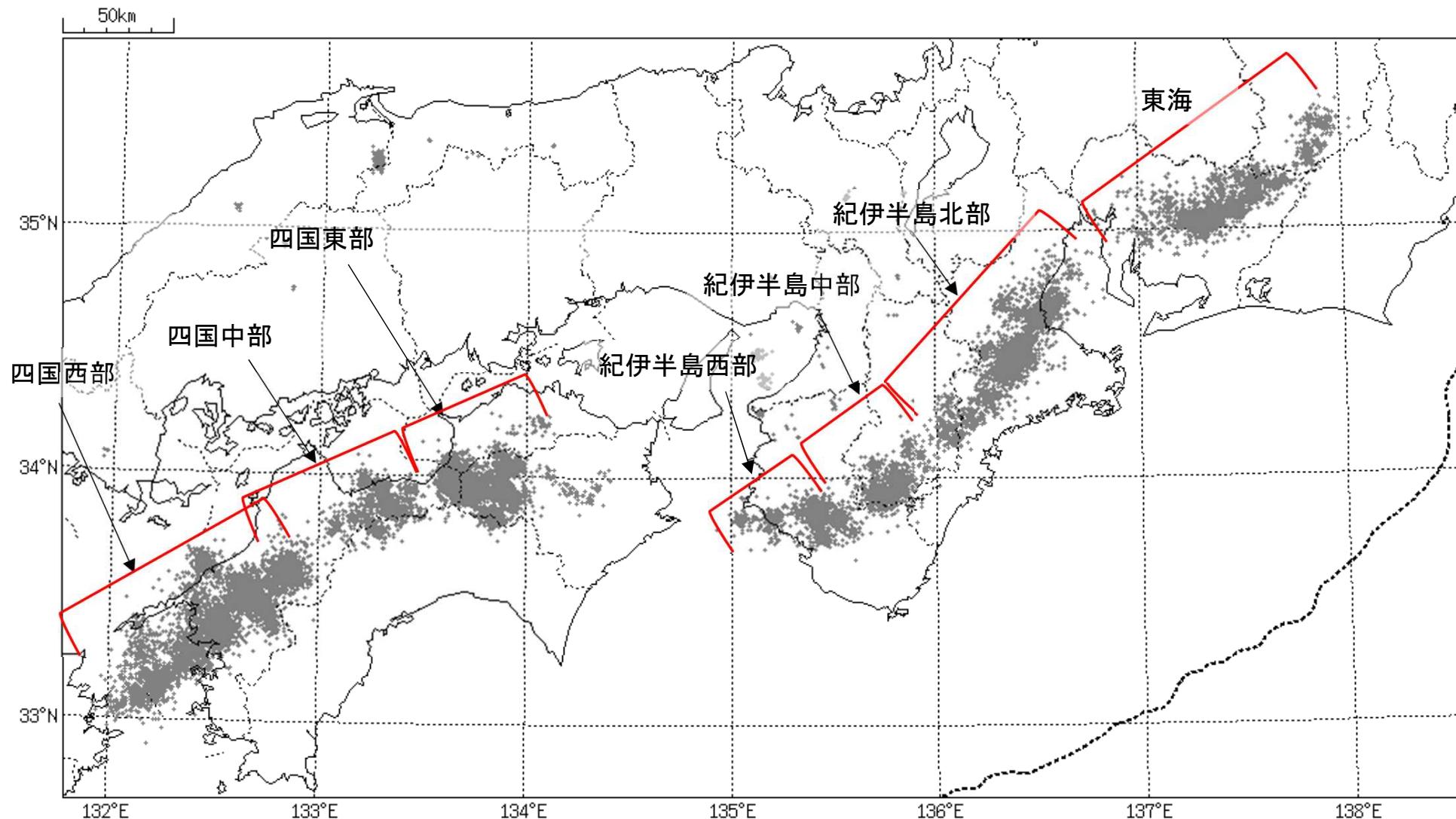
または活動日数1日の場合で複数個検知したもの）について、活動した場所ごとに記載している。

※ひずみ変化と同期して観測された深部低周波地震（微動）活動を赤字で示す。

※上の表中（1）～（3）を付した活動は、今期間、主な深部低周波地震（微動）活動として取り上げたもの。

注1) 防災科学技術研究所による解析では、11月9日頃から微動活動が見られた。

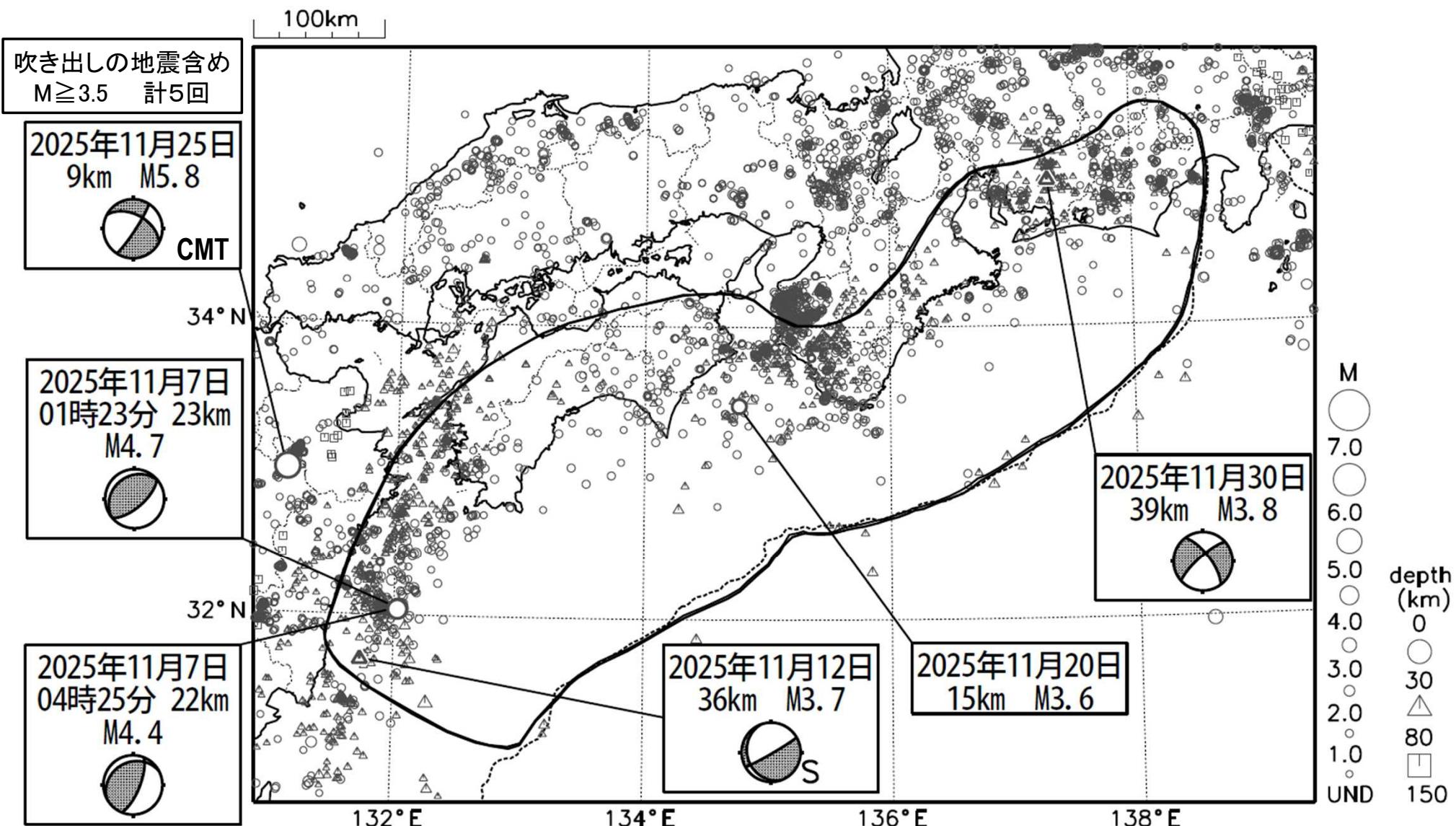
概況に記載している深部低周波地震(微動)の活動の場所



領域はObara(2010)を参考に作成。

出典 : Obara, K. (2010), Phenomenology of deep slow earthquake family in southwest Japan: Spatiotemporal characteristics and segmentation, *J. Geophys. Res.*, 115, B00A25, doi:10.1029/2008JB006048.

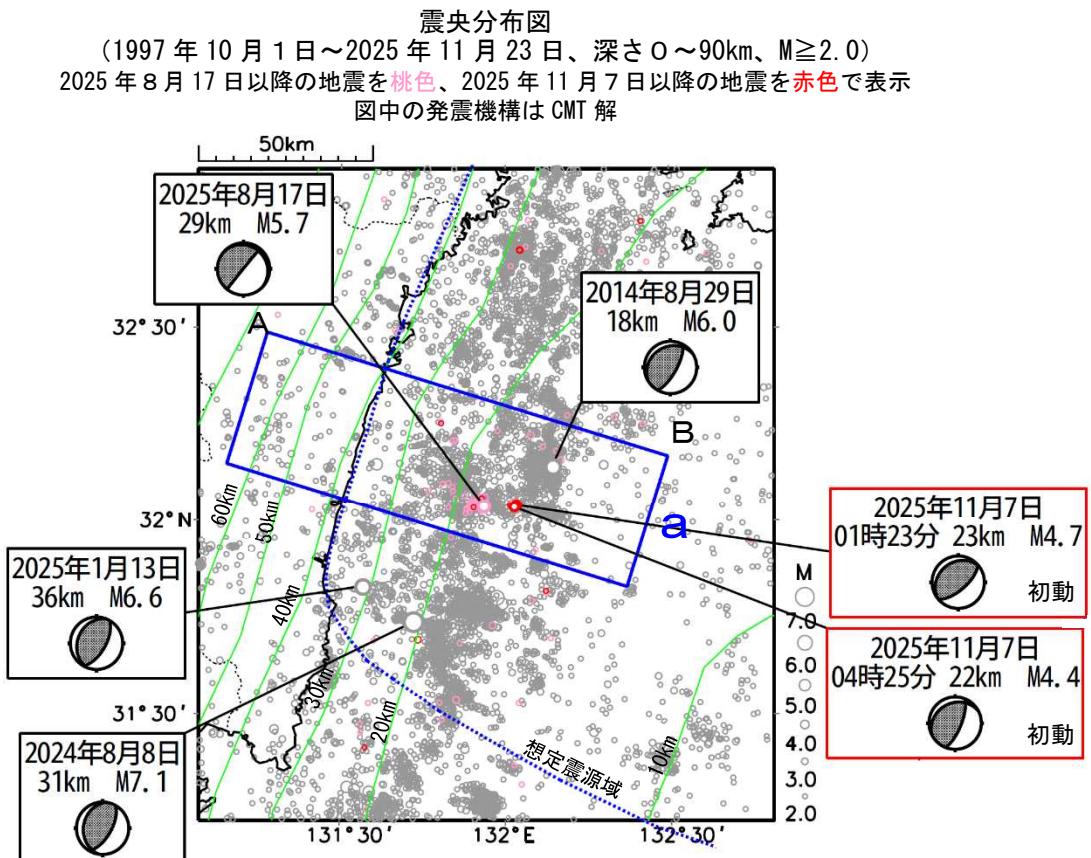
南海トラフ沿いとその周辺の広域地震活動(2025年11月1日～11月30日)



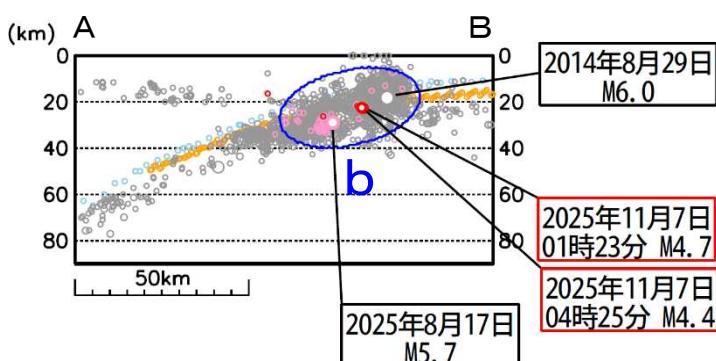
- 図中の吹き出しあは、南海トラフ巨大地震の想定震源域とその周辺で最大震度3以上を観測した地震もしくはM3.5以上の地震、それ以外の陸域M5.0以上・海域M6.0以上とその他の主な地震。
- 震源の深さは、精度がやや劣るものは表記していない。
- 発震機構解の横に「S」の表記があるものは、精度がやや劣るものである。

11月7日 日向灘の地震

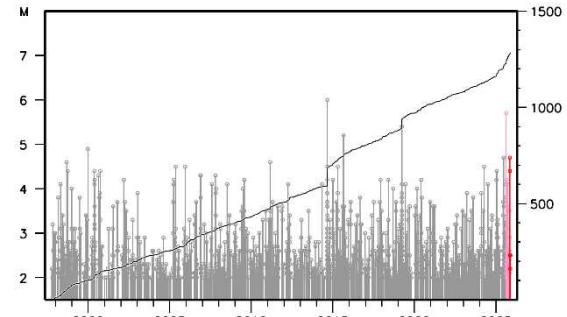
2025年11月7日01時23分に日向灘の深さ23kmでM4.7の地震（最大震度3）が発生した。この地震は、発震機構が西北西-東南東方向に圧力軸を持つ逆断層型である。また、04時25分に日向灘の深さ22kmでM4.4の地震（最大震度3）が発生した。この地震は、発震機構が北西-南東方向に圧力軸を持つ逆断層型である。いずれもフィリピン海プレートと陸のプレートの境界で発生した地震である。



領域a内の断面図（A-B投影）



領域b内のM-T図及び回数積算図



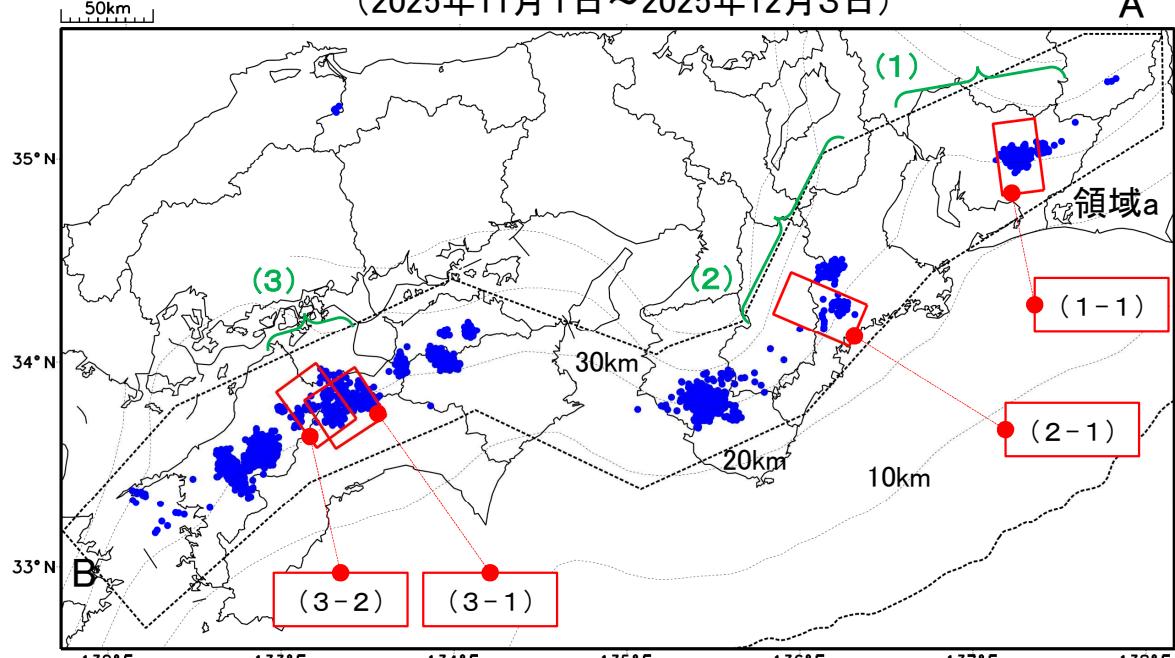
- ※ 震央分布図中の緑色実線は、Baba et al. (2002)、Hirose et al. (2008)及びNakajima and Hasegawa (2007)によるフィリピン海プレート上面のおおよその深さを示す。
- ※ 断面図中の水色の点線はBaba et al. (2002)、Hirose et al. (2008)、Nakajima and Hasegawa (2007)、橙色の点線は内閣府 (2011) によるフィリピン海プレート上面のおおよその深さを示す。

深部低周波地震(微動)活動と短期的ゆっくりすべりの全体概要

深部低周波地震(微動)の震央分布図と短期的ゆっくりすべりの断層モデル

(2025年11月1日～2025年12月3日)

A



主な深部低周波地震(微動)活動と短期的ゆっくりすべり

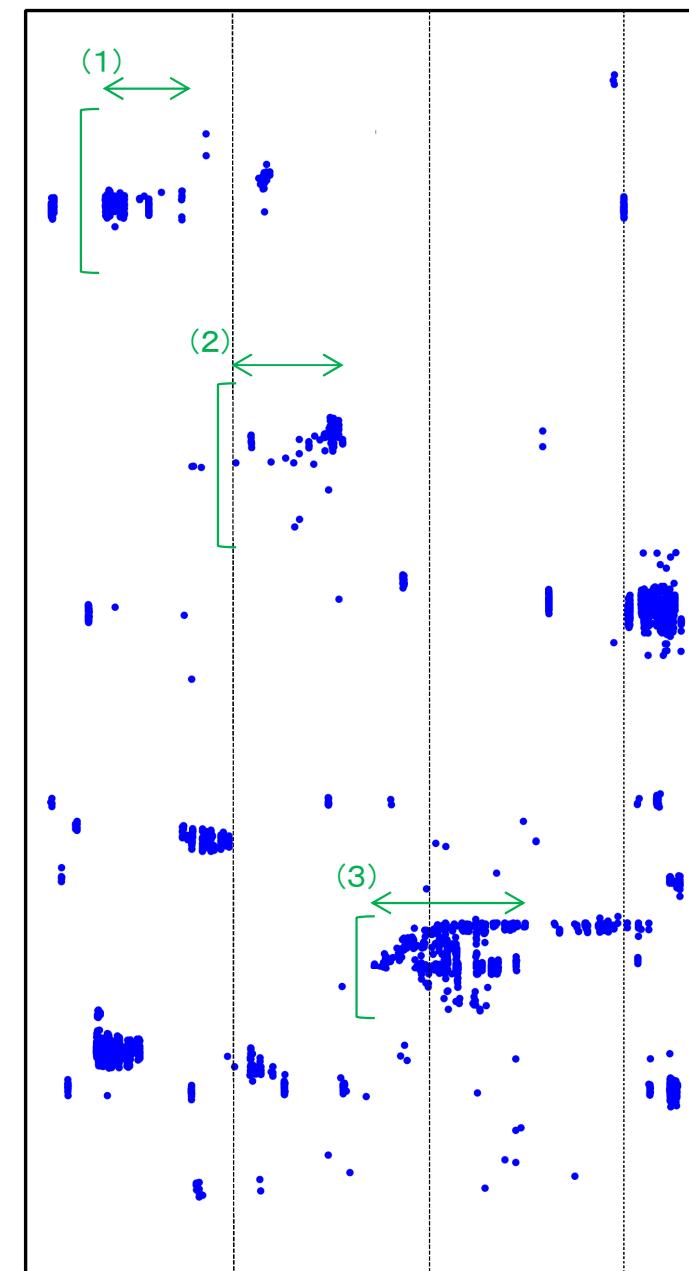
活動場所		深部低周波地震(微動) 活動の期間	短期的ゆっくりすべりの期間と規模
(1)	東海	11月4日～11月9日	(1-1) 11月4日00時～11月7日24時 : Mw5.5
(2)	紀伊半島北部	11月11日～11月16日	(2-1) 11月11日00時～11月16日24時 : Mw5.8
(3)	四国中部	11月18日～11月25日	(3-1) 11月20日00時～11月21日24時 : Mw5.6 (3-2) 11月22日00時～11月26日24時 : Mw5.6

●: 深部低周波地震(微動)の震央(気象庁の解析結果を示す)
□: 短期的ゆっくりすべりの断層モデル(気象庁の解析結果を示す)

点線は、Baba et al.(2002)、Hirose et al.(2008)、Nakajima and Hasegawa(2007)によるフィリピン海プレート上面の深さ(10kmごとの等深線)を示す。

領域a(点線矩形)内の深部低周波地震(微動)
の時空間分布図(A-B投影)

A



B

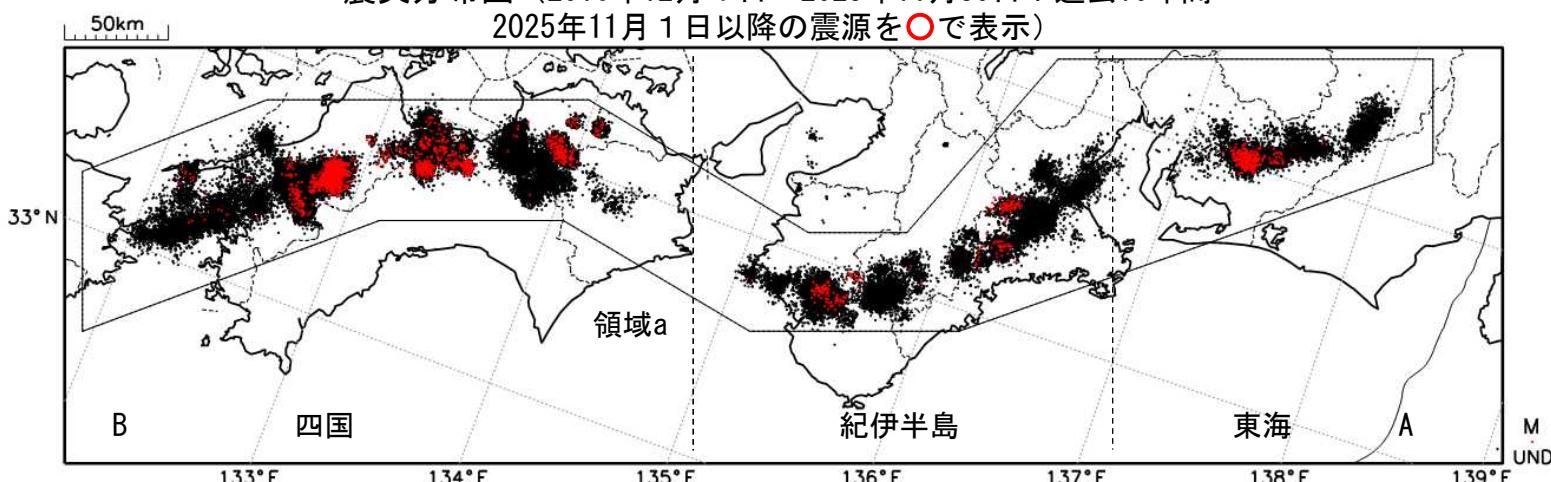
1 11 21 1 12月
気象庁作成

深部低周波地震（微動）活動（2016年12月1日～2025年11月30日）

深部低周波地震（微動）は、「短期的ゆっくりすべり」に密接に関連する現象とみられており、プレート境界の状態の変化を監視するために、その活動を監視している。

震央分布図（2016年12月1日～2025年11月30日：過去10年間）

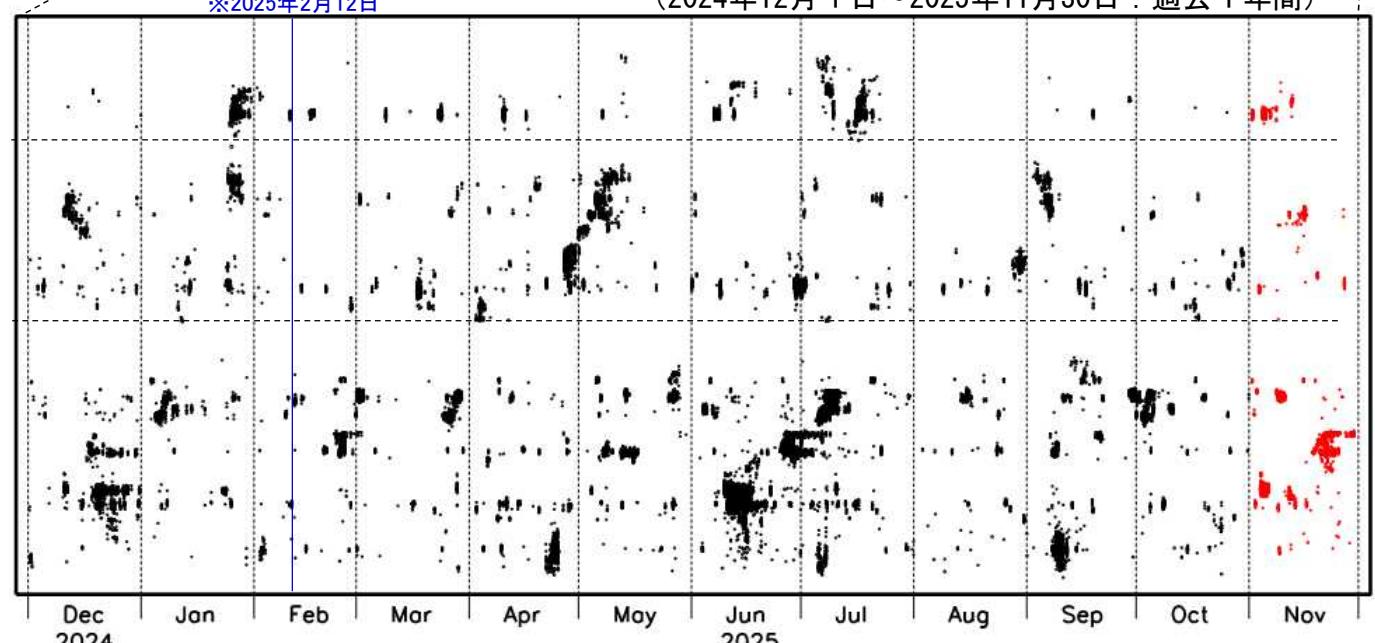
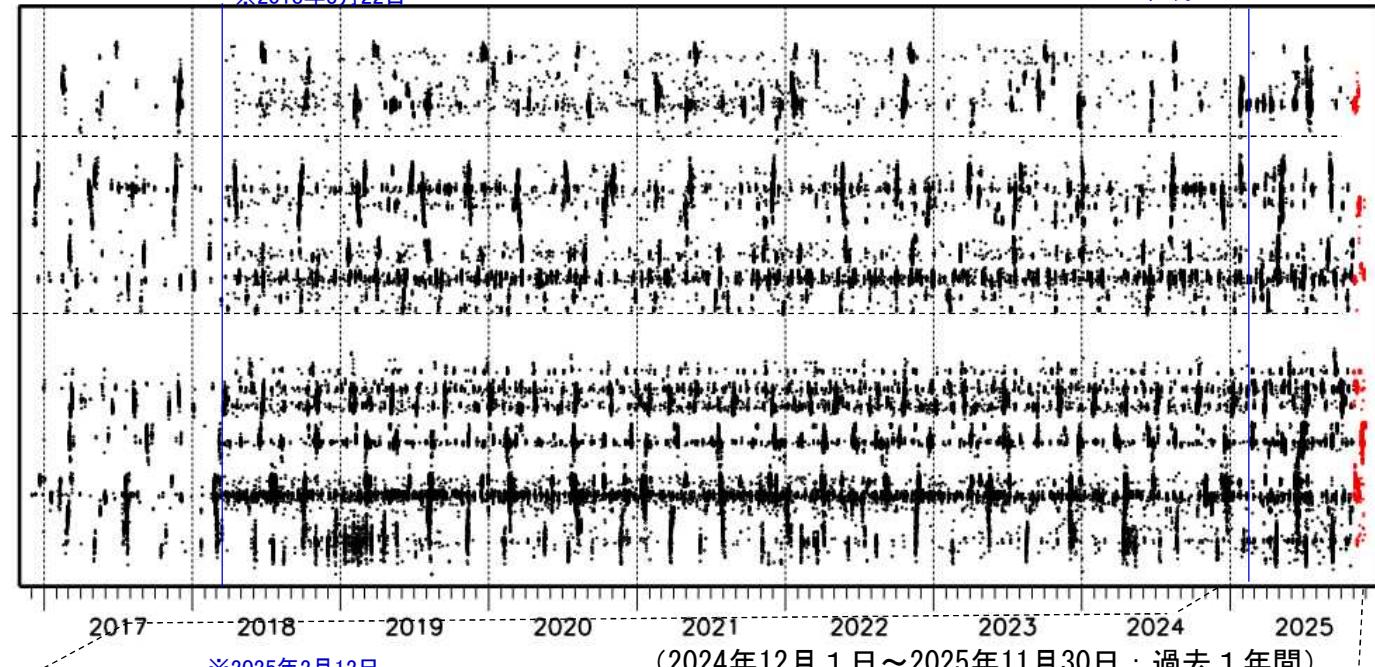
2025年11月1日以降の震源を○で表示）



上図領域a内の時空間分布図（A-B投影）

※2018年3月22日

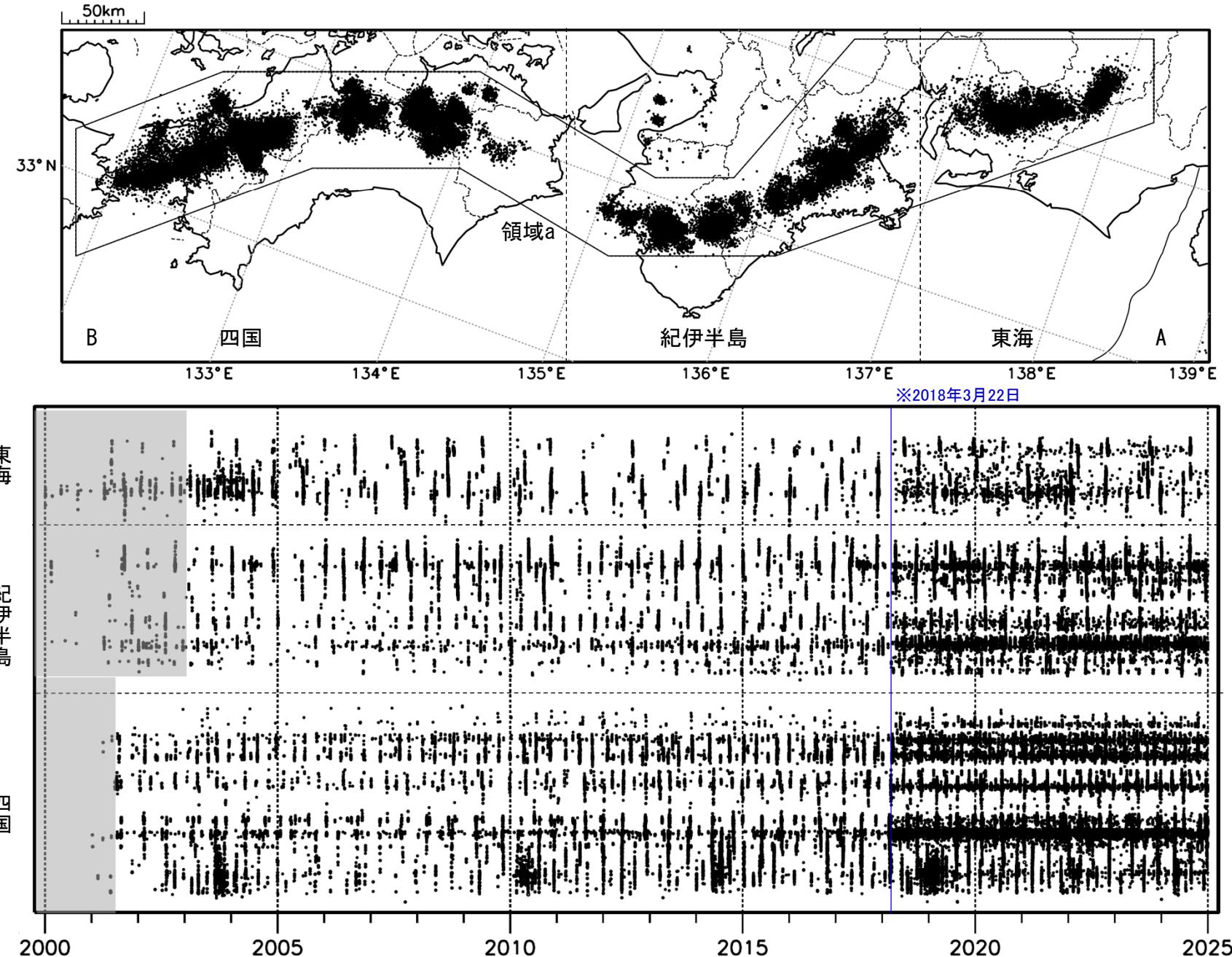
※2025年2月12日



※2018年3月22日、および、2025年2月12日から、深部低周波地震（微動）の検知手法の改善により、それ以前と比較して検知能力がそれぞれ変わっている。

深部低周波地震（微動）活動（2000年1月1日～2024年12月31日）

深部低周波地震（微動）は、「短期的ゆっくりすべり」に密接に関連する現象とみられており、プレート境界の状態の変化を監視するために、その活動を監視している。



※2018年3月22日から、深部低周波地震（微動）の処理方法の変更(Matched Filter法の導入)により、それ以前と比較して検知能力が変わっている。

※時空間分布図中、灰色の期間は、それ以降と比較して十分な検知能力がなかったことを示す。

気象庁作成

東海の深部低周波地震(微動)活動と短期的ゆっくりすべり

11月4日から9日にかけて、東海で深部低周波地震(微動)を観測した。
深部低周波地震(微動)活動とほぼ同期して、周辺に設置されている複数のひずみ計で地殻変動を観測した。これらは、短期的ゆっくりすべりに起因すると推定される。

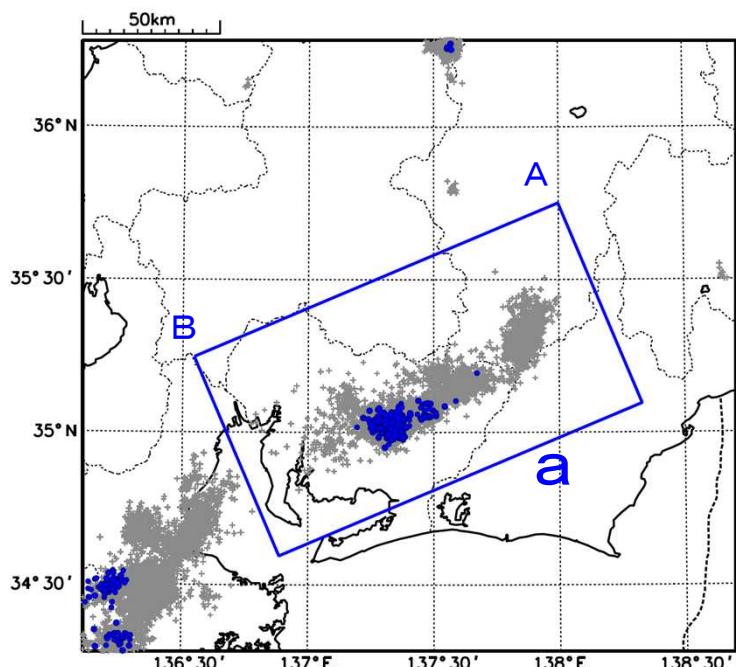
深部低周波地震(微動)活動

震央分布図(2019年11月1日～2025年11月24日、

深さ0～60km、Mすべて)

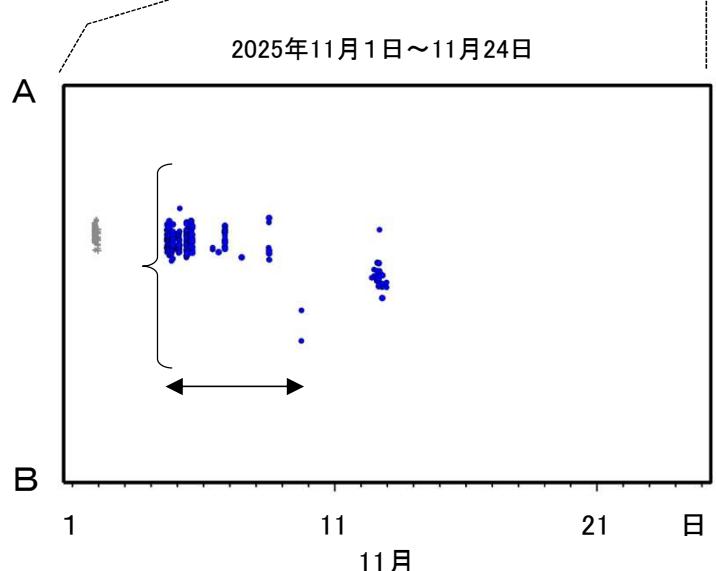
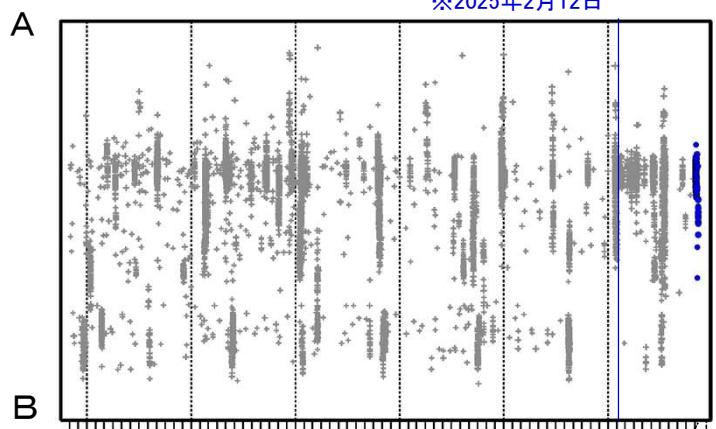
灰:2019年11月1日～2025年11月3日、

青:2025年11月4日以降



領域a内の時空間分布図(A-B投影)

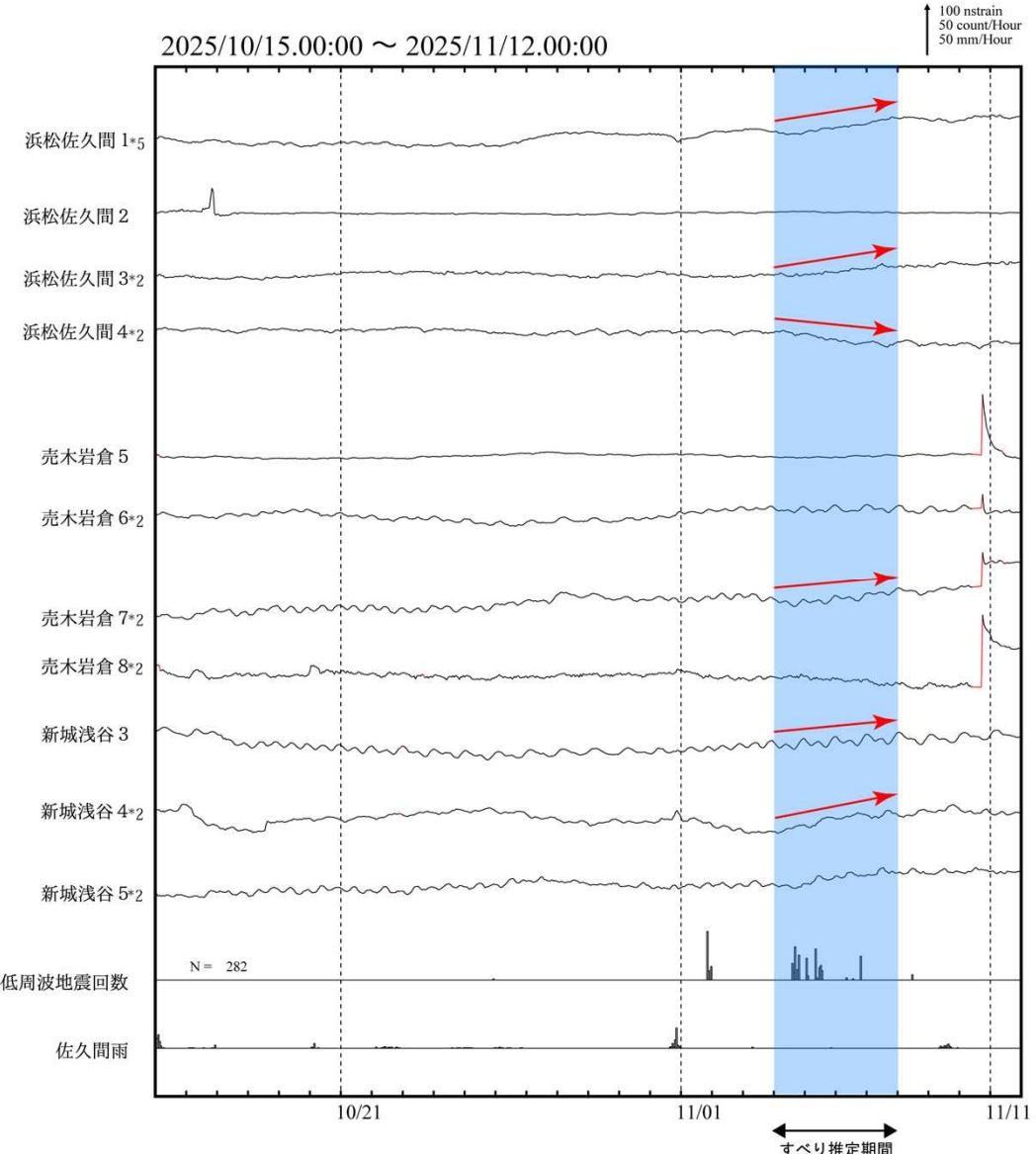
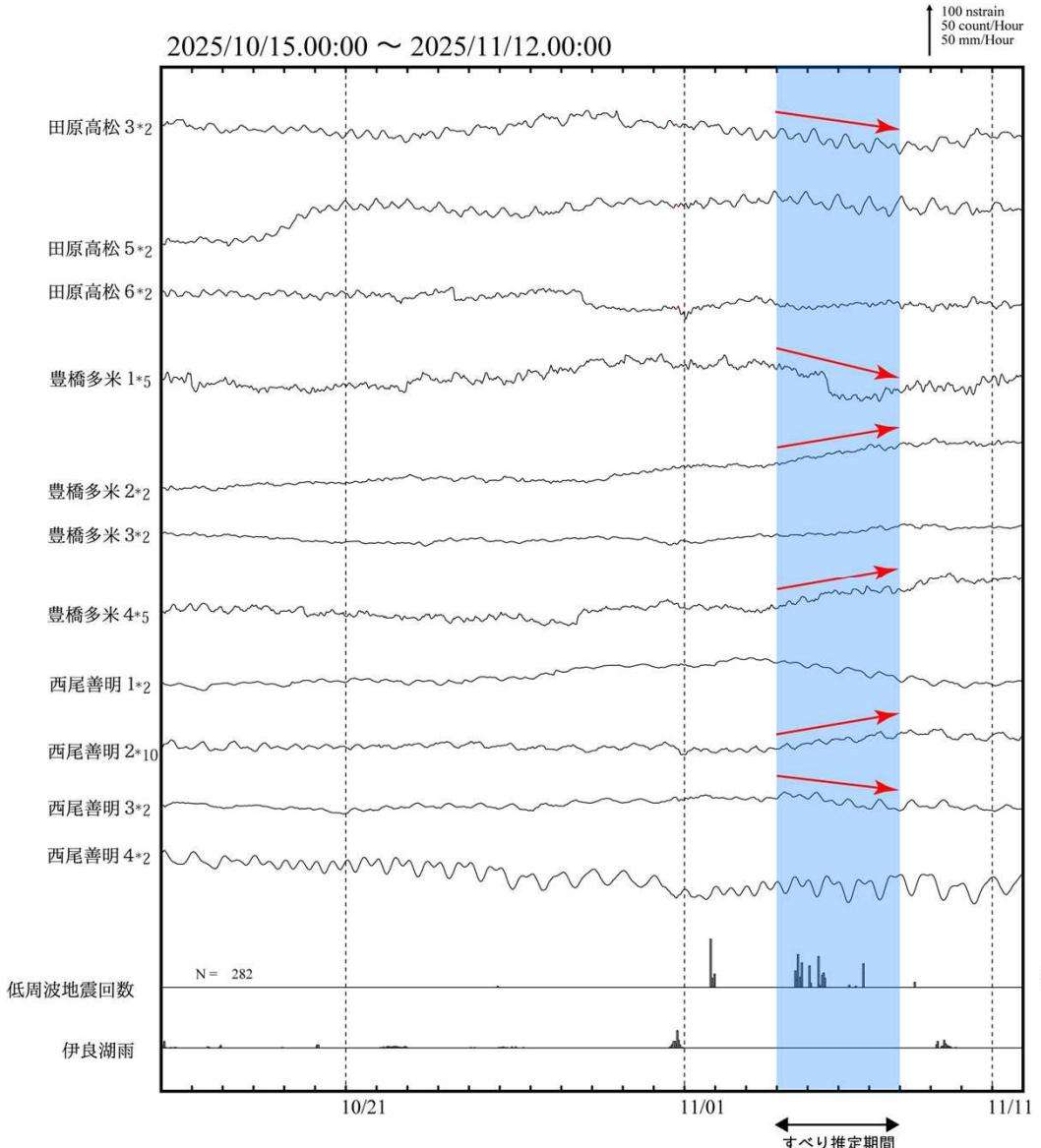
※2025年2月12日



※2025年2月12日から、深部低周波地震(微動)の検知手法の改善により、
それ以前と比較して検知能力が変わっている。

東海で観測した短期的ゆっくりすべり(11月4日～7日)

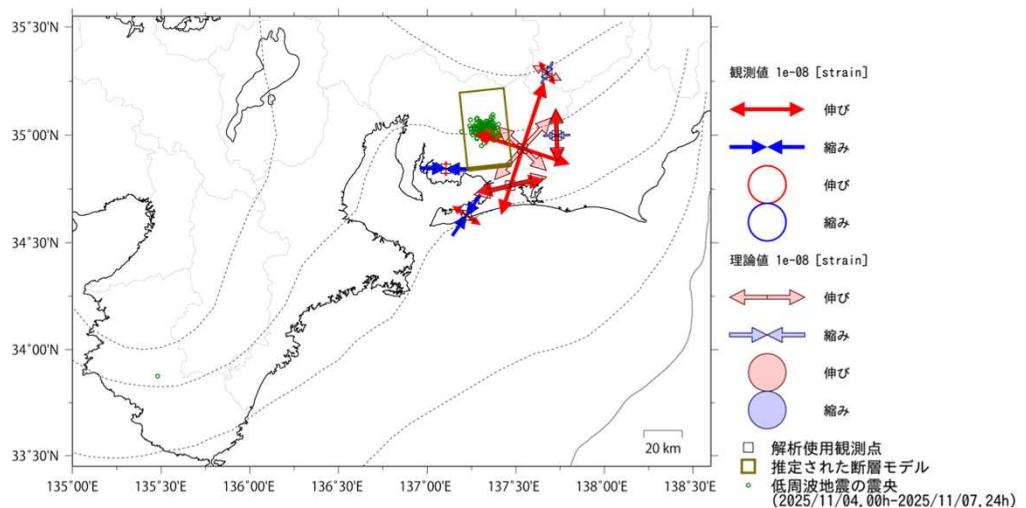
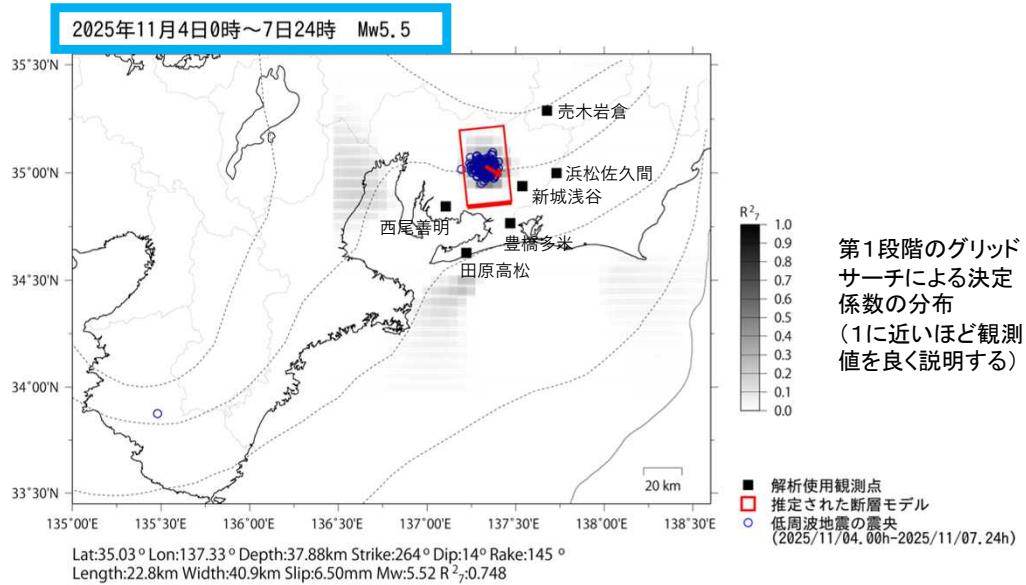
長野県から愛知県で観測されたひずみ変化



豊橋多米、及び西尾善明は産業技術総合研究所のひずみ計である。

解析に使用したチャネルについては背景色を塗り、そのうち有意な変化が見られたチャネルに赤矢印を描画している。

東海で観測した短期的ゆっくりすべり(11月4日～7日)



前頁に示す観測点での変化量をもとにすべり推定を行ったところ、図の場所にゆっくりすべりを示す断層モデルが求まった。

断層モデルの推定は、産総研の解析方法(板場ほか, 2012)を参考に以下の2段階で行う。
・断層サイズを20km × 20kmに固定し、位置を0.05度単位でグリッドサーチにより推定する。
・その位置を中心にして、他の断層パラメータの最適解を求める。

紀伊半島北部の深部低周波地震(微動)活動と短期的ゆっくりすべり

11月11日から16日にかけて、紀伊半島北部で深部低周波地震（微動）を観測した。

深部低周波地震（微動）活動とほぼ同期して、周辺に設置されている複数のひずみ計・傾斜計で地殻変動を観測した。これらは、短期的ゆっくりすべりに起因すると推定される。

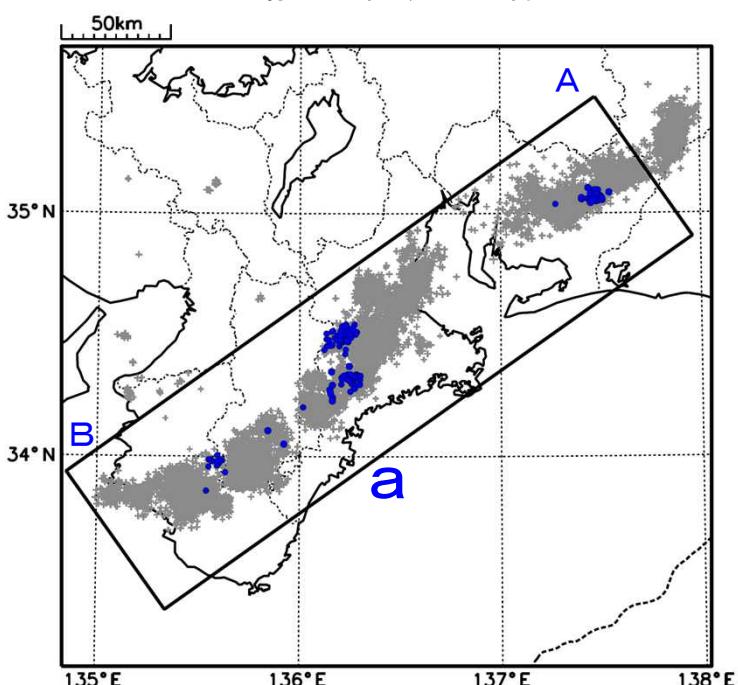
深部低周波地震(微動)活動

震央分布図(2019年11月1日～2025年11月24日、

深さ0～60km、Mすべて)

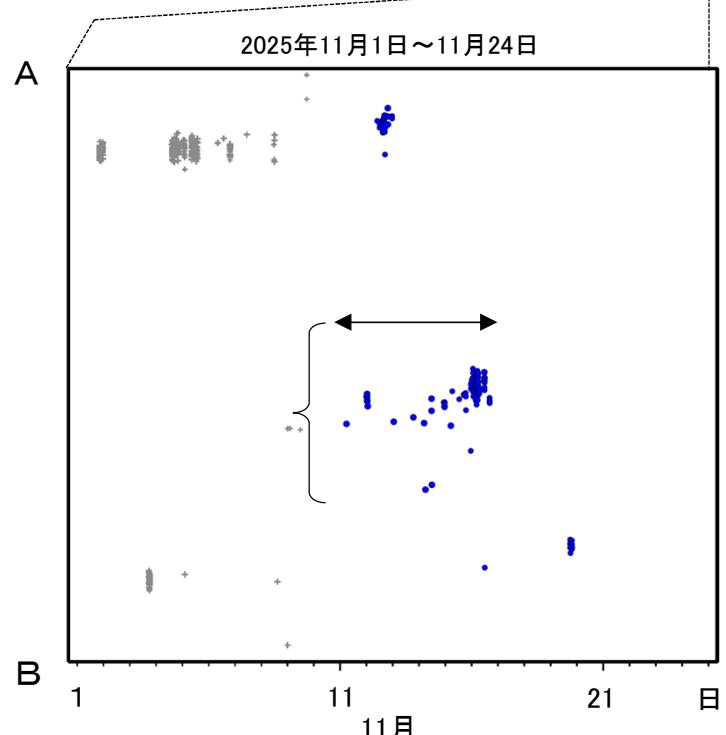
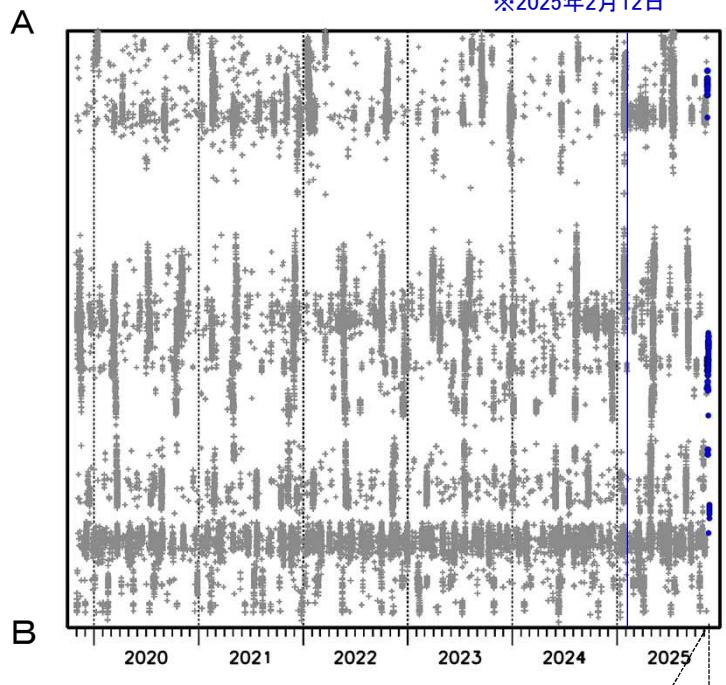
灰:2019年11月1日～2025年11月15日、

青:2025年11月16日以降



領域a内の時空間分布図(A-B投影)

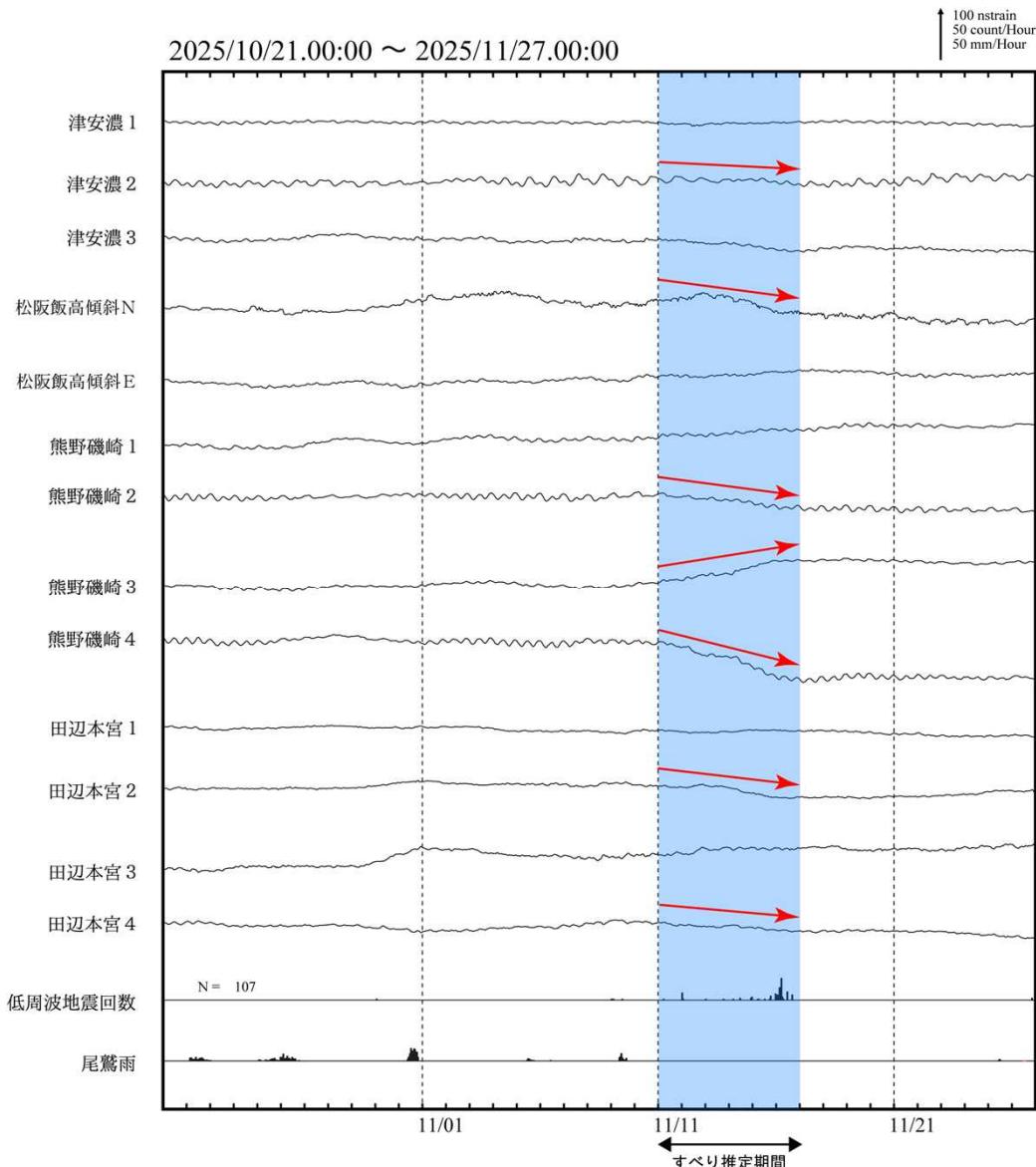
※2025年2月12日



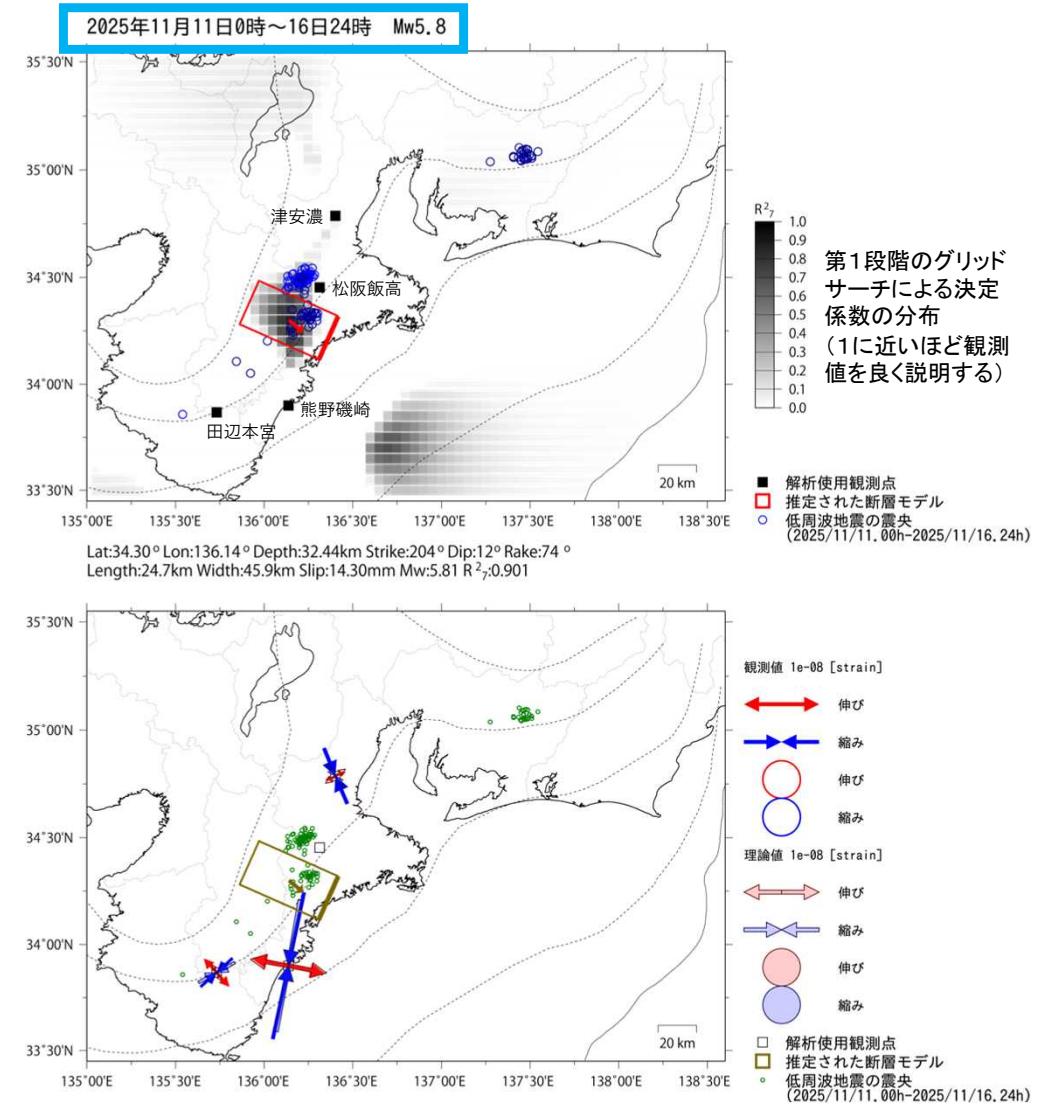
※2025年2月12日から、深部低周波地震(微動)の検知手法の改善により、
それ以前と比較して検知能力が変わっている。

紀伊半島北部で観測した短期的ゆっくりすべり(11月11日～16日)

三重県から和歌山県で観測されたひずみ・傾斜変化



津安濃、松阪飯高、熊野磯崎及び田辺本宮は産業技術総合研究所のひずみ・傾斜計である。解析に使用したチャネルについては背景色を塗り、そのうち有意な変化が見られたチャネルに赤矢印を描画している。



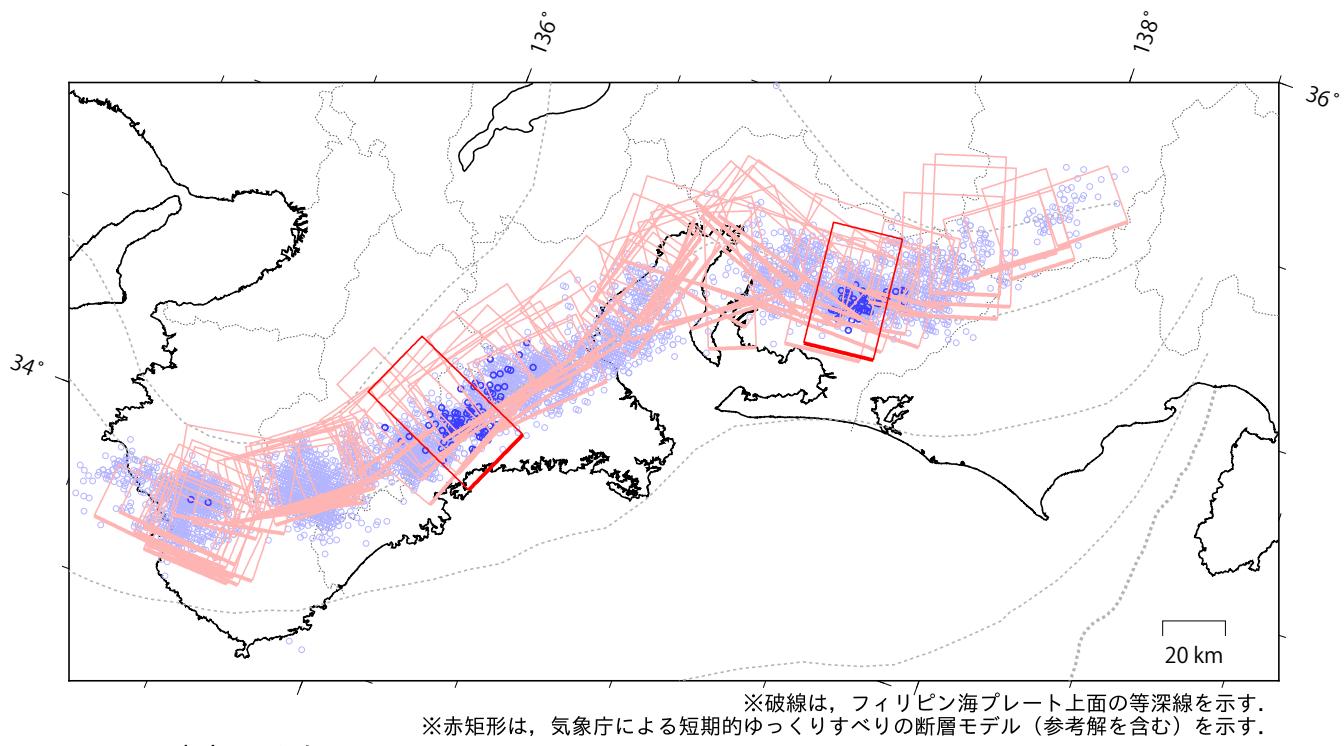
左図に示す観測点での変化量をもとにすべり推定を行ったところ、図の場所にゆっくりすべりを示す断層モデルが求まった。

断層モデルの推定は、産総研の解析方法(板場ほか, 2012)を参考に以下の2段階で行う。
・断層サイズを20km × 20kmに固定し、位置を0.05度単位でグリッドサーチにより推定する。
・その位置を中心にして、他の断層パラメータの最適解を求める。

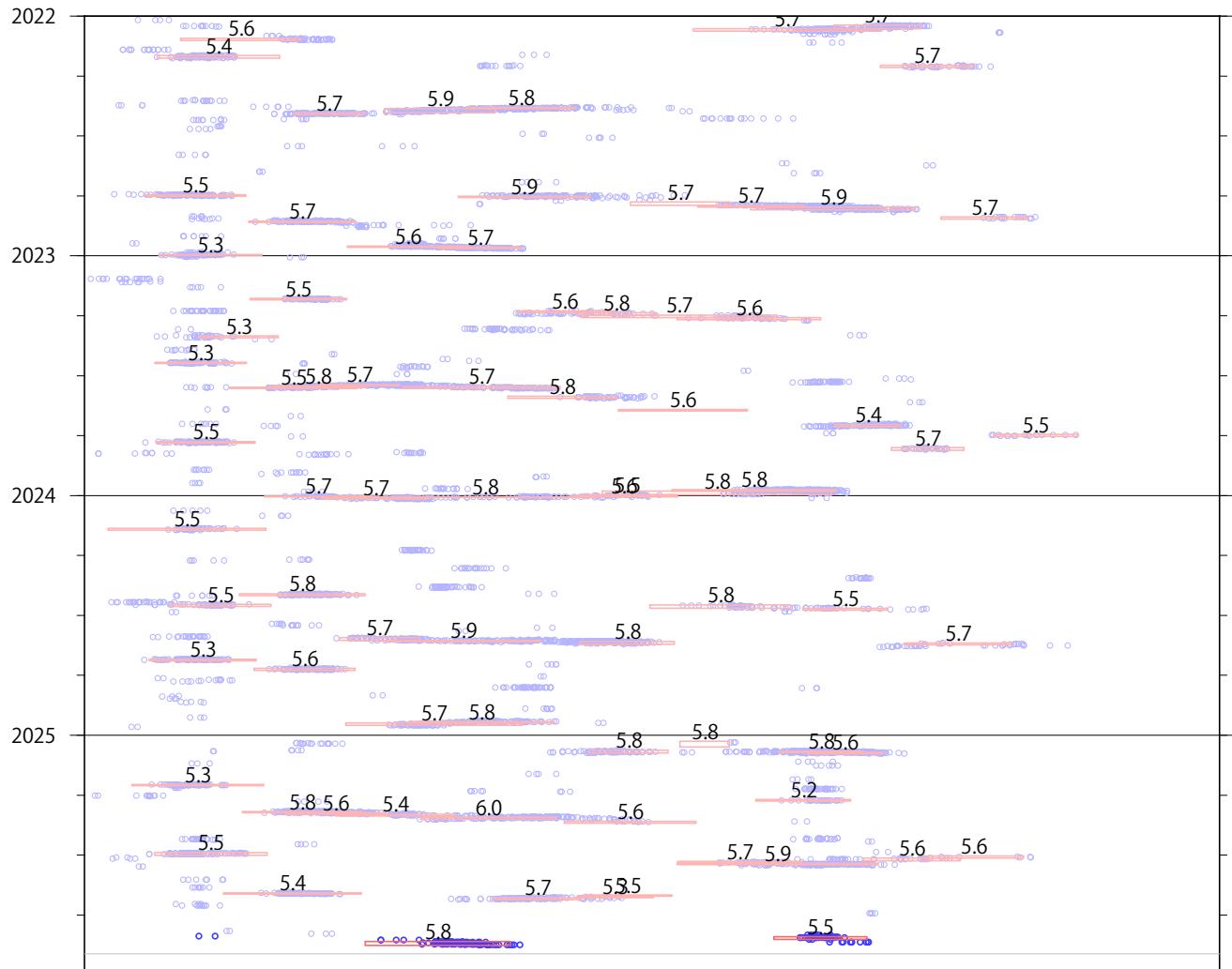
東海～紀伊半島 短期的ゆっくりすべりの活動状況

2022年1月1日～2025年11月30日

(2025年11月1日以降を濃く表示)



上図の時空間分布図



※短期的ゆっくりすべりの解析には、気象庁、産業技術総合研究所及び静岡県のデータを用いている。

※赤矩形の上に表示されている数字は解析されたMwを示す。

※青丸はエンベロープ相関法（防災科学技術研究所、東京大学地震研究所との共同研究による成果）で得られた低周波微動の震央を示す。

※時空間分布図中の灰色線は最新データ日を示す。

实时空間分布図中の灰色線は最新ノットを示す。

気象庁作成

四国中部の深部低周波地震(微動)活動と短期的ゆっくりすべり

11月18日から25日にかけて、四国中部で深部低周波地震（微動）を観測した。

深部低周波地震（微動）活動とほぼ同期して、周辺に設置されている複数のひずみ・傾斜計で地殻変動を観測した。これらは、短期的ゆっくりすべりに起因すると推定される。

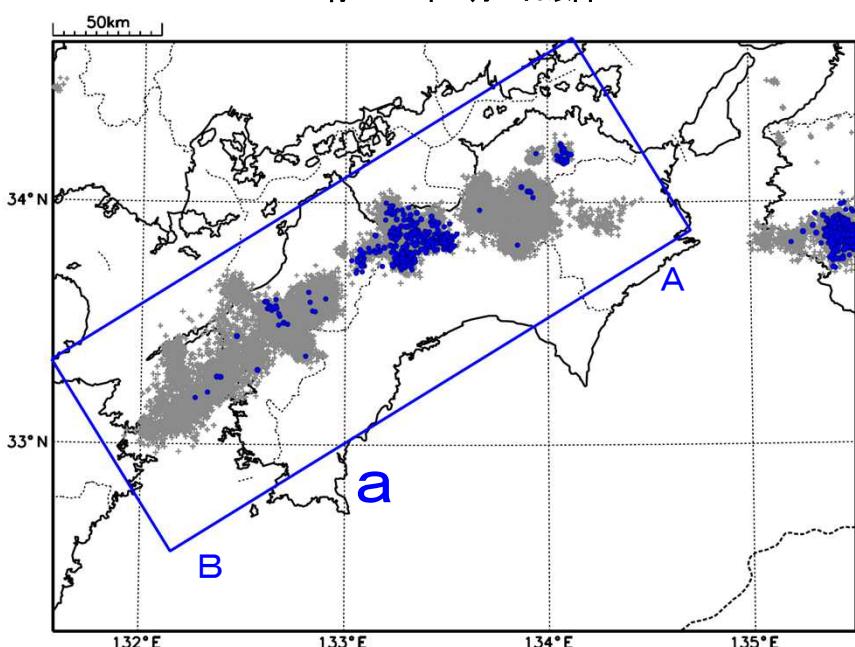
深部低周波地震(微動)活動

震央分布図(2019年11月1日～2025年12月2日、

深さ0～60km、Mすべて)

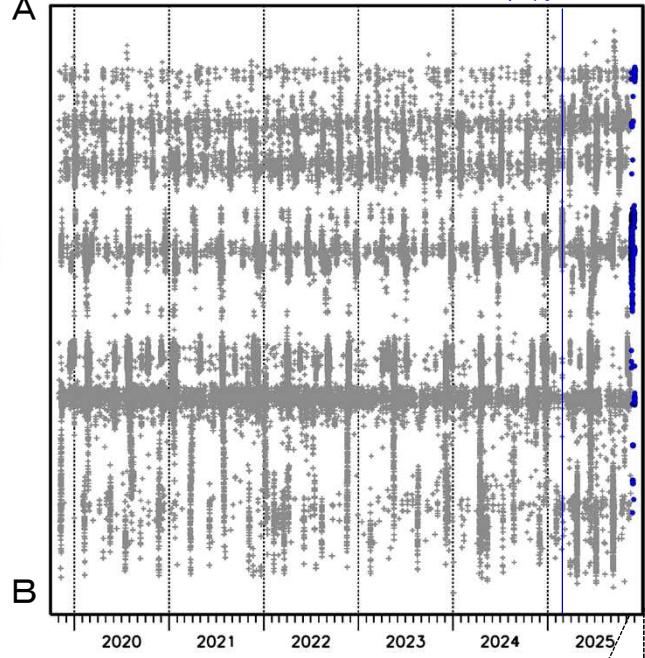
灰:2019年11月1日～2025年11月17日、

青:2025年11月18日以降

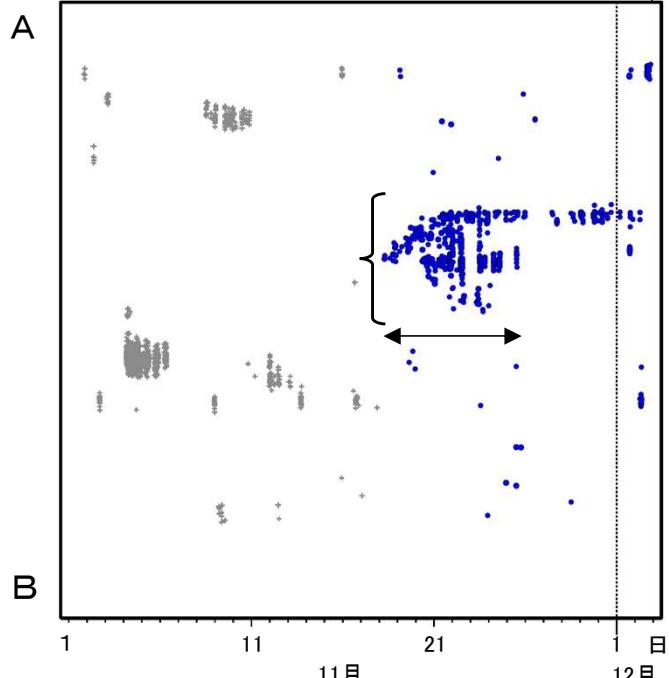


震央分布図の領域a内の時空間分布図(A-B投影)

※2025年2月12日



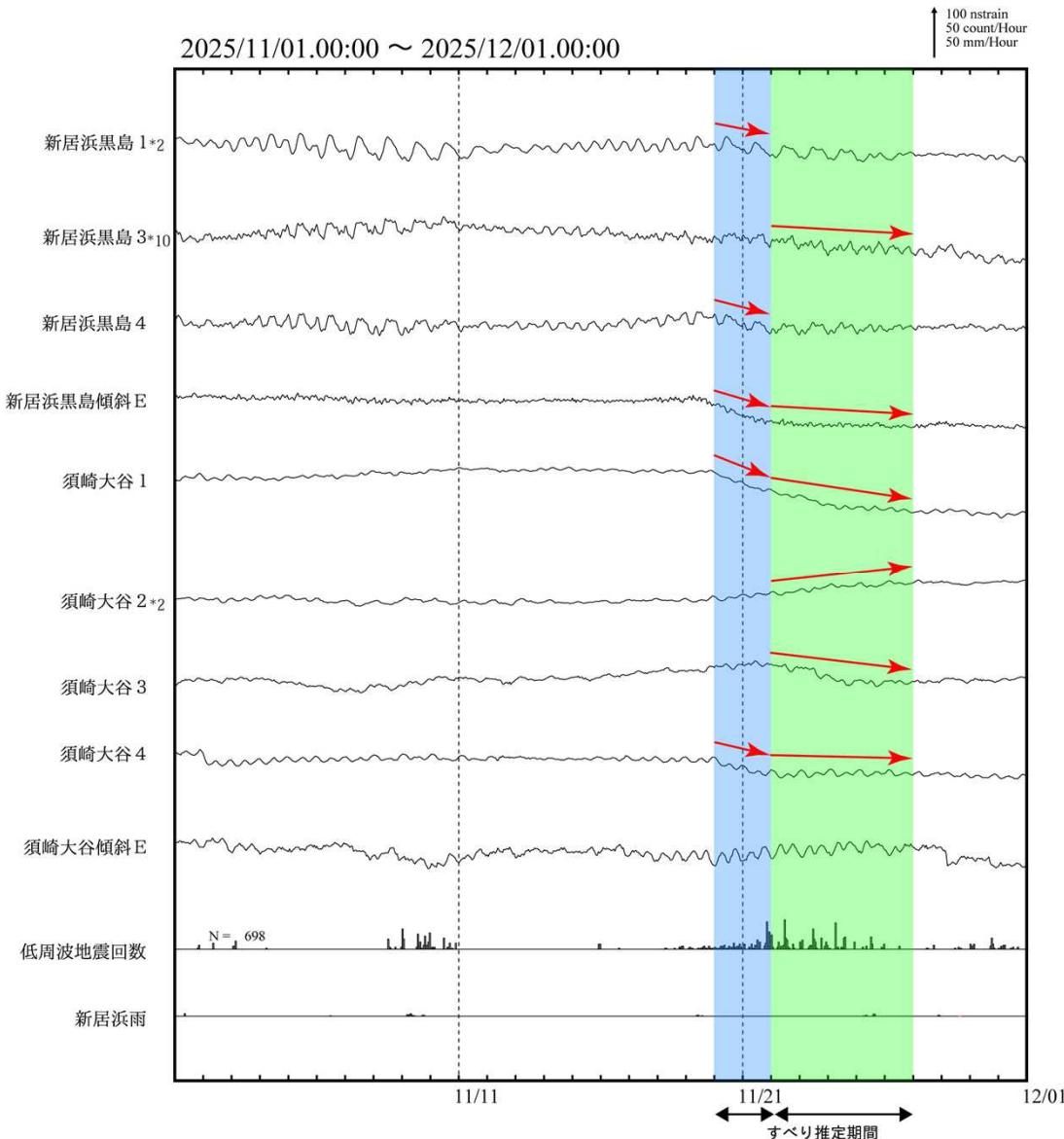
2025年11月1日～12月2日



※2025年2月12日から、深部低周波地震(微動)の検知手法の改善により、
それ以前と比較して検知能力が変わっている。

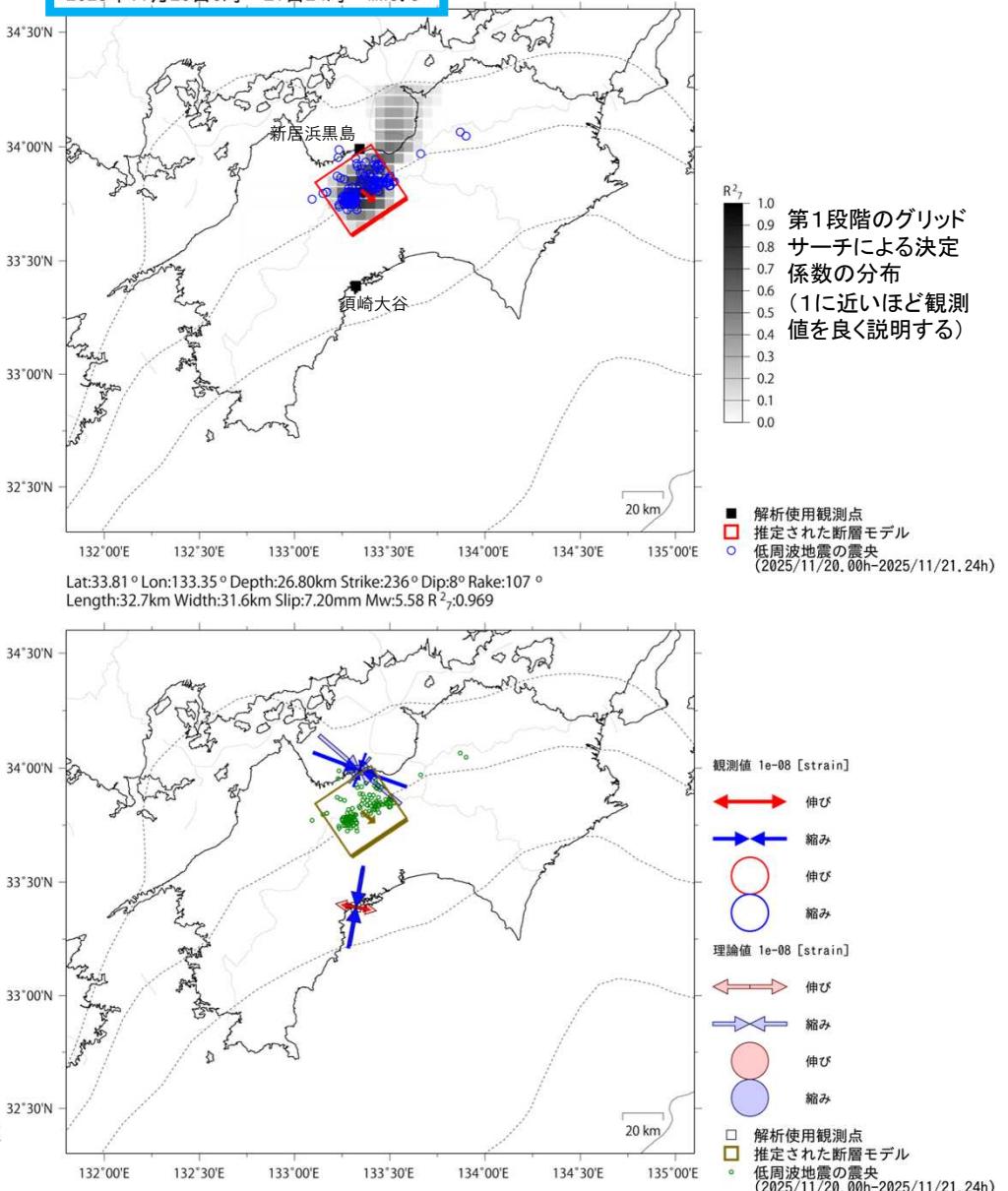
四国中部で観測した短期的ゆっくりすべり(11月20日～26日)

愛媛県から高知県で観測されたひずみ・傾斜変化



新居浜黒島及び須崎大谷は産業技術総合研究所のひずみ・傾斜計である。
解析に使用したチャネルについては背景色を塗り、そのうち有意な変化が見られたチャネルに赤矢印を描画している。

2025年11月20日0時～21日24時 Mw 5.6

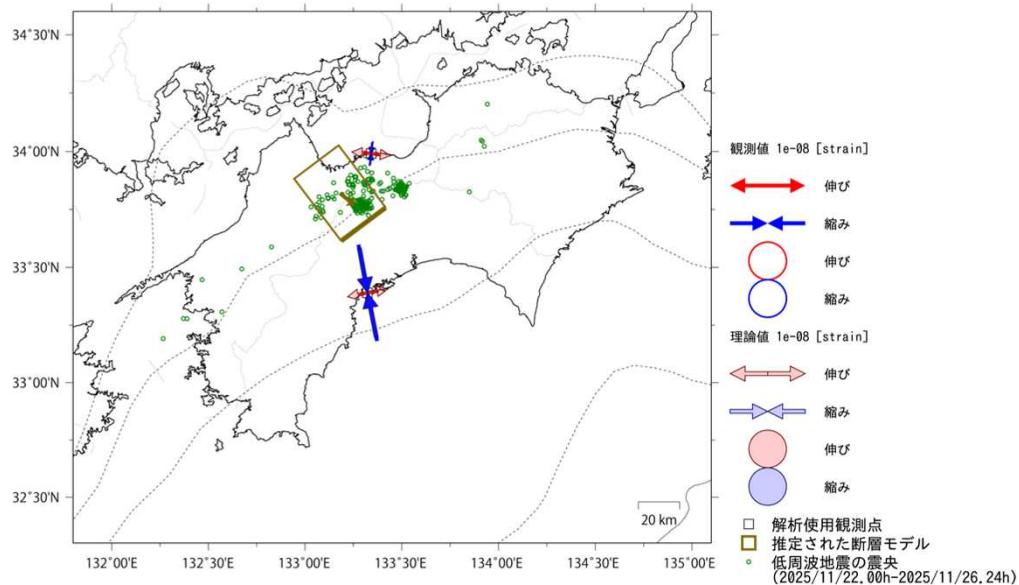
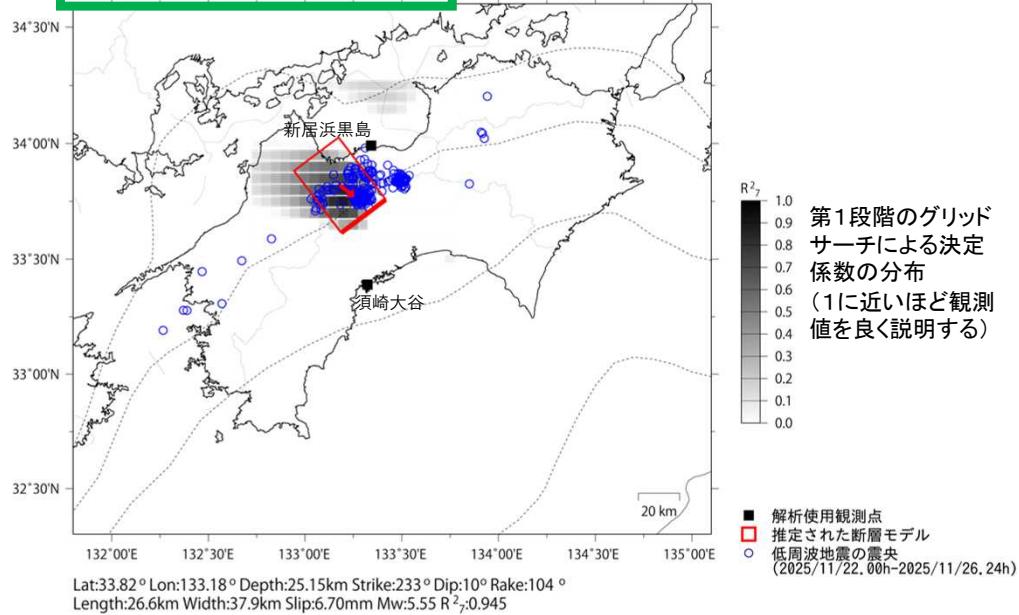


左図に示す観測点での変化量をもとにすべり推定を行ったところ、図の場所にゆっくりすべりを示す断層モデルが求まった。

断層モデルの推定は、産総研の解析方法(板場ほか, 2012)を参考に以下の2段階で行う。
・断層サイズを20km × 20kmに固定し、位置を0.05度単位でグリッドサーチにより推定する。
・その位置を中心にして、他の断層パラメータの最適解を求める。

四国中部で観測した短期的ゆっくりすべり(11月20日～26日)

2025年11月22日0時～26日24時 Mw5.6



前頁に示す観測点での変化量をもとにすべり推定を行ったところ、図の場所にゆっくりすべりを示す断層モデルが求まった。

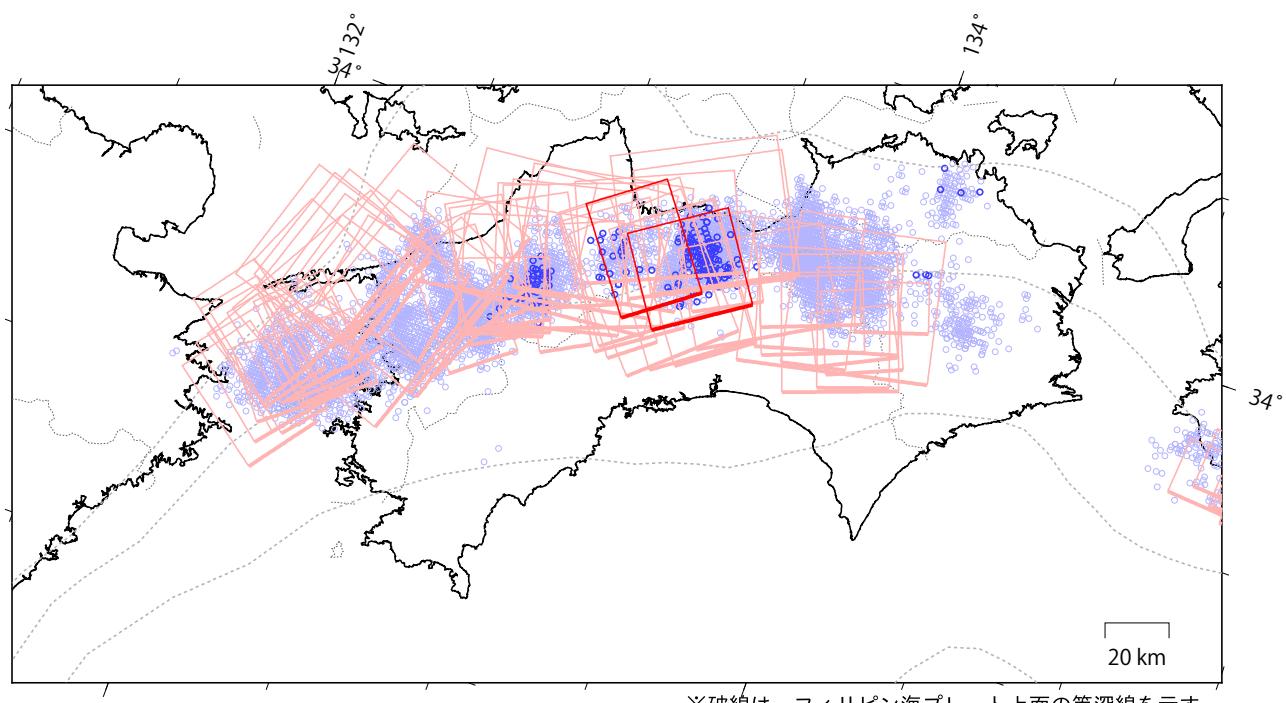
断層モデルの推定は、産総研の解析方法(板場ほか, 2012)を参考に以下の2段階で行う。

- ・断層サイズを $20\text{km} \times 20\text{km}$ に固定し、位置を0.05度単位でグリッドサーチにより推定する。
- ・その位置を中心にして、他の断層パラメータの最適解を求める。

四国 短期的ゆっくりすべりの活動状況

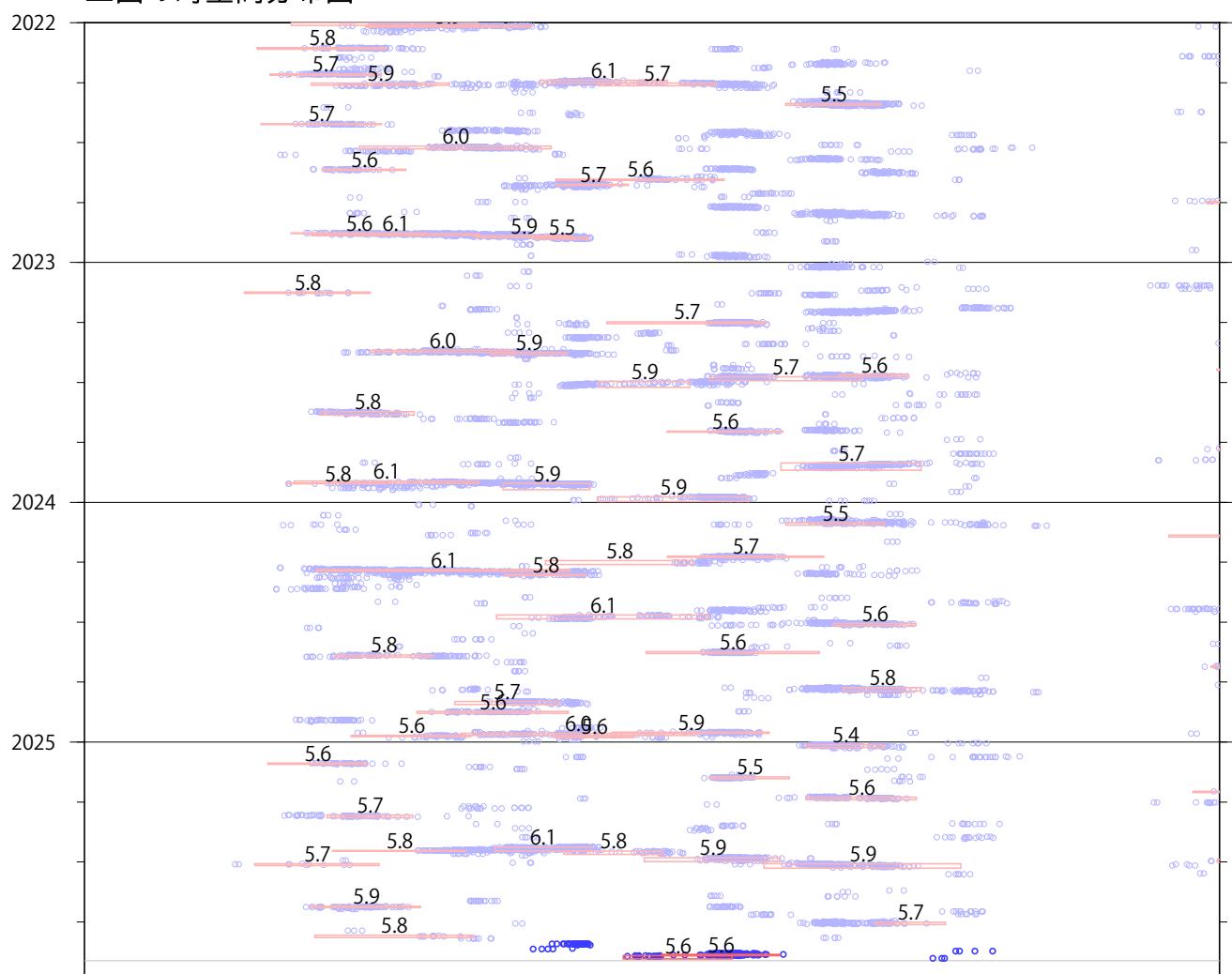
2022年1月1日～2025年11月30日

(2025年11月1日以降を濃く表示)



※破線は、フィリピン海プレート上面の等深線を示す。
※赤矩形は、気象庁による短期的ゆっくりすべりの断層モデル（参考解を含む）を示す。

上図の時空間分布図



※短期的ゆっくりすべりの解析には、産業技術総合研究所のデータを用いている。

※赤矩形の上に表示されている数字は解析されたMwを示す。

※青丸はエンベロープ相関法（防災科学技術研究所、東京大学地震研究所との共同研究による成果）で得られた低周波微動の震央を示す。

※時空間分布図中の灰色線は最新データ日を示す。

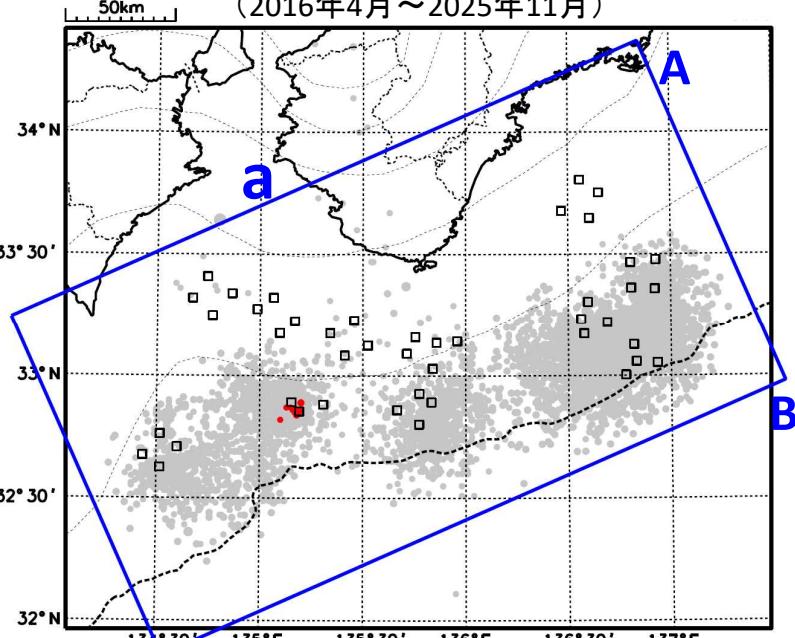
気象庁作成

三重県南東沖から四国沖における浅部低周波地震(微動)活動

(震源の色)灰色:2016年4月～2025年10月、赤色:2025年11月

震央分布図

(2016年4月～2025年11月)

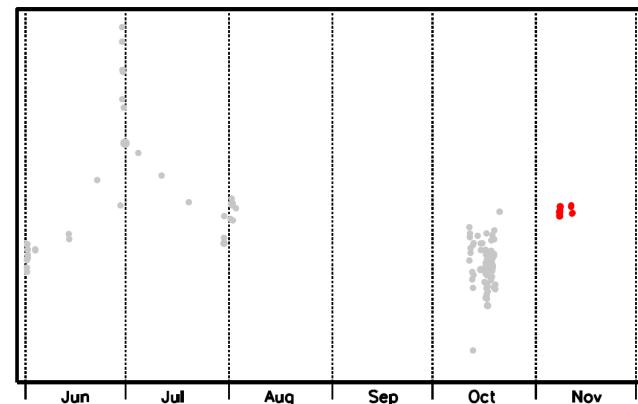


□はDONET1、2の観測点のうち、
解析に使用しているものを示す。

領域a内の時空間分布図(A-B投影)

(2025年6月～2025年11月)

A



B

領域a内の時空間分布図(B-C投影)
(2016年4月～2025年11月)

B

B

領域a内の時空間分布図(B-C投影)
(2025年6月～2025年11月)

C

C

Tamaribuchi et al.(2022)の手法(※)を用いて解析した。

灰色のハッチは、DONET2未使用期間(2017年10月4日以前)を示す。

【※手法の概要】

- ・DONETで観測された地震波形(バンドパス帯域2-8Hz)を用いて、ハイブリッド法による解析を行い、浅部低周波地震(微動)を検出した。
- ・検出された地震(微動)に対し、クラスタリング処理(条件:震央距離20km以内かつ12時間以内に4個以上)を施した。

【利用上の留意事項】

- ・この資料は、上記の手法により自動検出された地震(微動)を表示しています。
- ・検出された地震(微動)には、浅部低周波地震(微動)活動以外のものが表示されることがあります。
- ・個々の震源の位置ではなく、震源の分布具合に着目して地震活動の把握にご利用ください。

気象庁作成

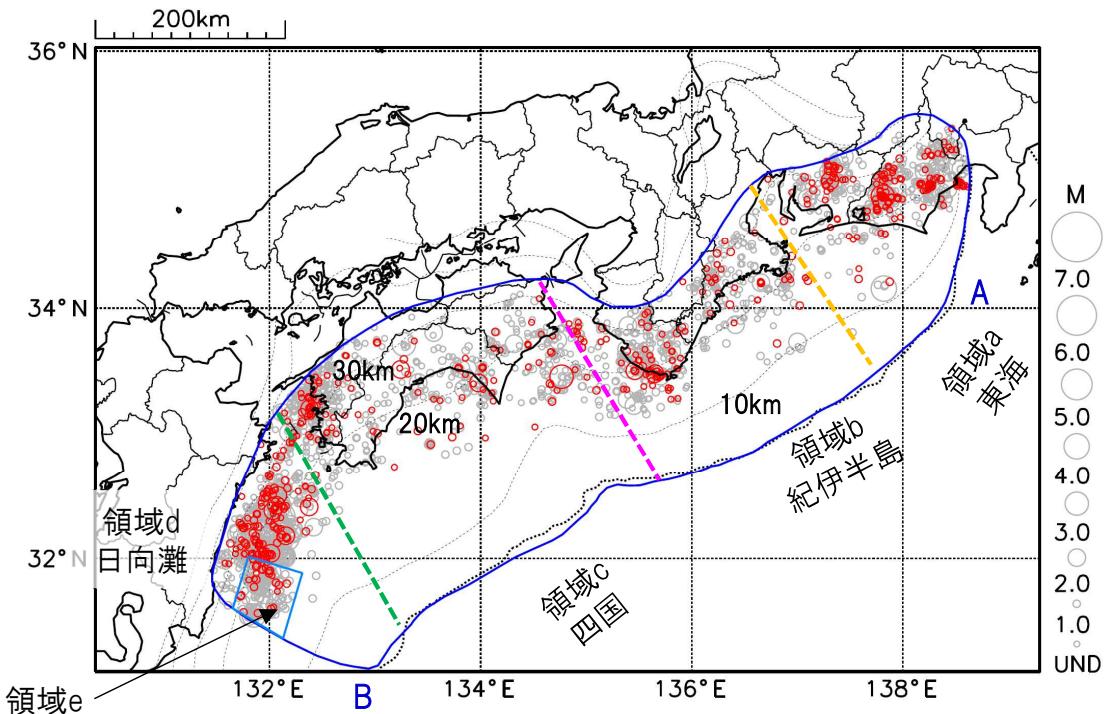
プレート境界とその周辺の地震活動

フィリピン海プレート上面の深さから±8km未満の地震を表示している。

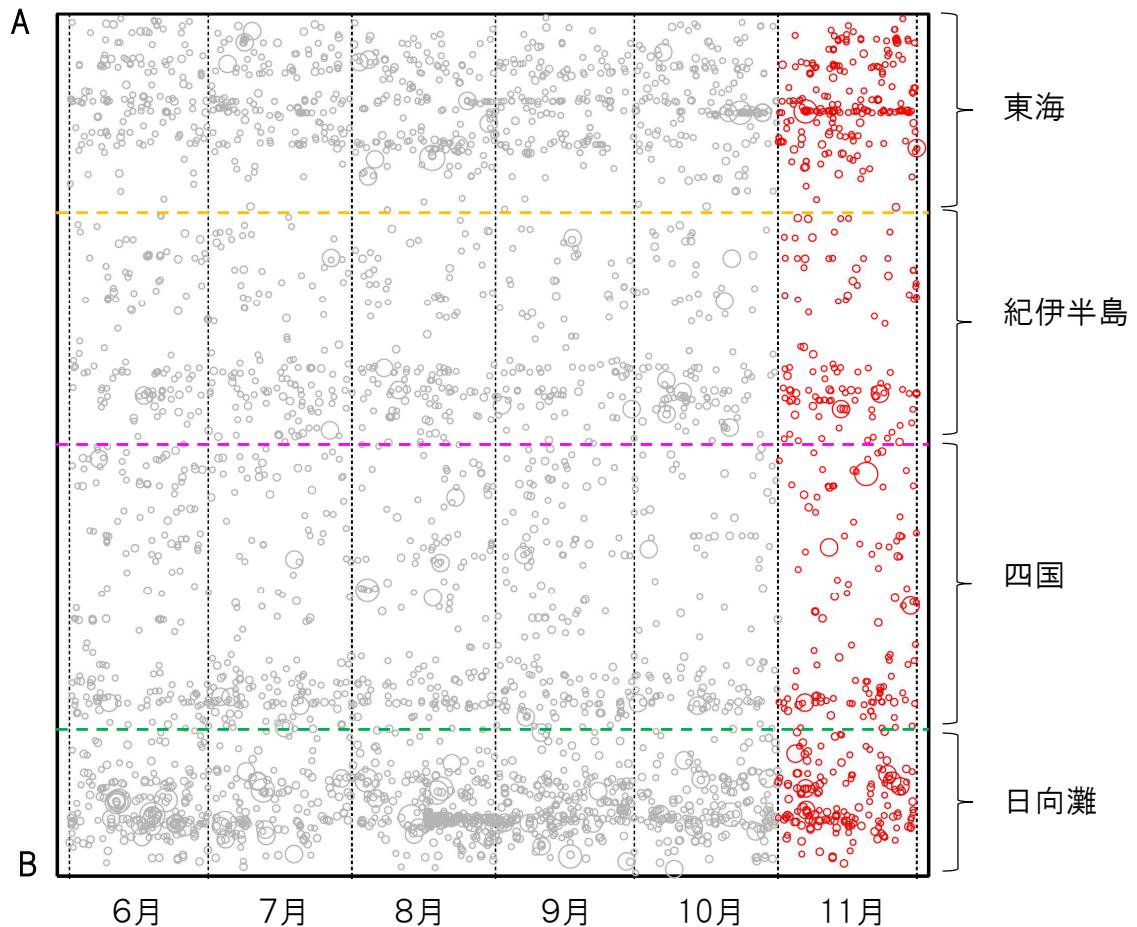
日向灘の領域e内のみ、深さ20km～35kmの地震を追加している。

震央分布図

(2025年6月1日～2025年11月30日、M全て、2025年11月の地震を赤く表示)



南海トラフ巨大地震の想定震源域内の時空間分布図(A-B投影)



・フィリピン海プレート上面の深さは、Baba et al.(2002)、Hirose et al.(2008)、Nakajima and Hasegawa(2007)による。震央分布図中の点線は10kmごとの等深線を示す。

・今期間の地震のうち、M3.2以上の地震で想定南海トラフ地震の発震機構解と類似の型の地震に吹き出しを付している。吹き出しの右下の数値は、フィリピン海プレート上面の深さからの差(+は浅い、-は深い)を示す。

・発震機構解の横に「S」の表記があるものは、精度がやや劣るものである。

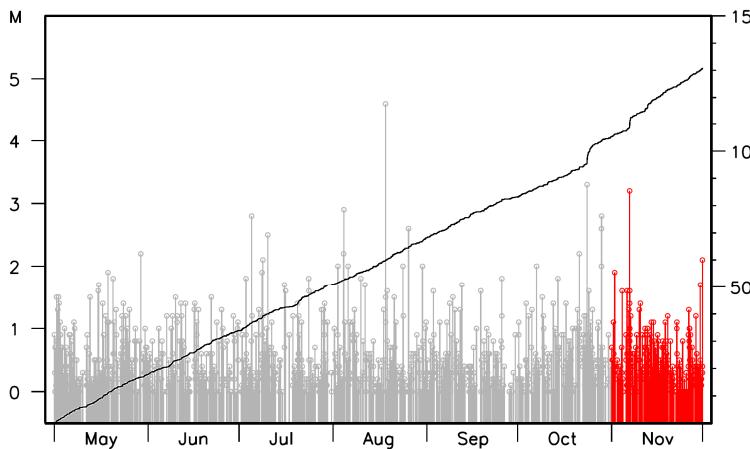
気象庁作成

プレート境界とその周辺の地震活動

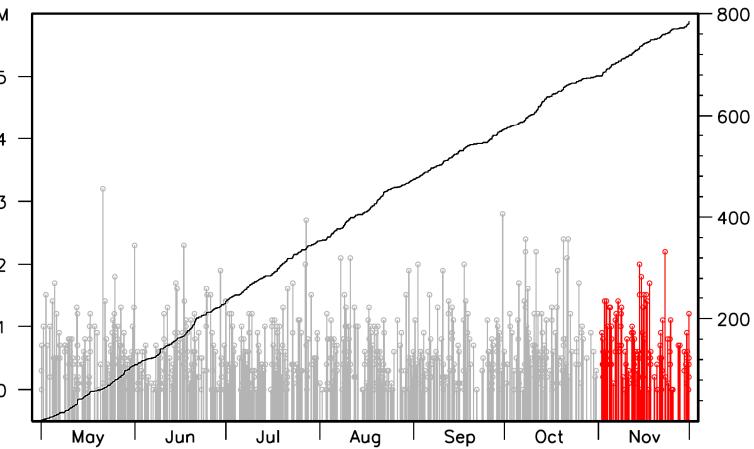
フィリピン海プレート上面の深さから±8km未満の地震を表示している。

震央分布図の各領域内のMT図・回数積算図
(2025年6月1日～2025年11月30日、M全て、2025年11月の地震を赤く表示)

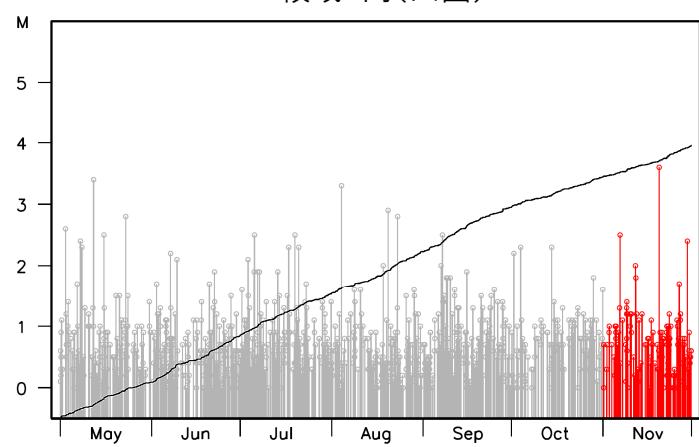
領域a内(東海)



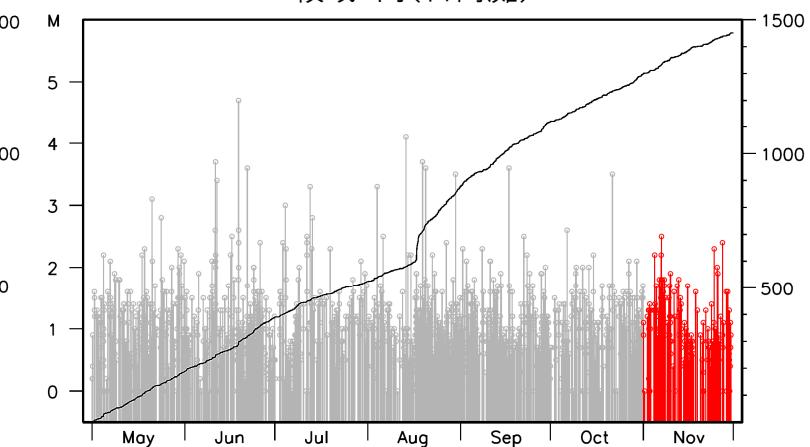
領域b内(紀伊半島)



領域c内(四国)



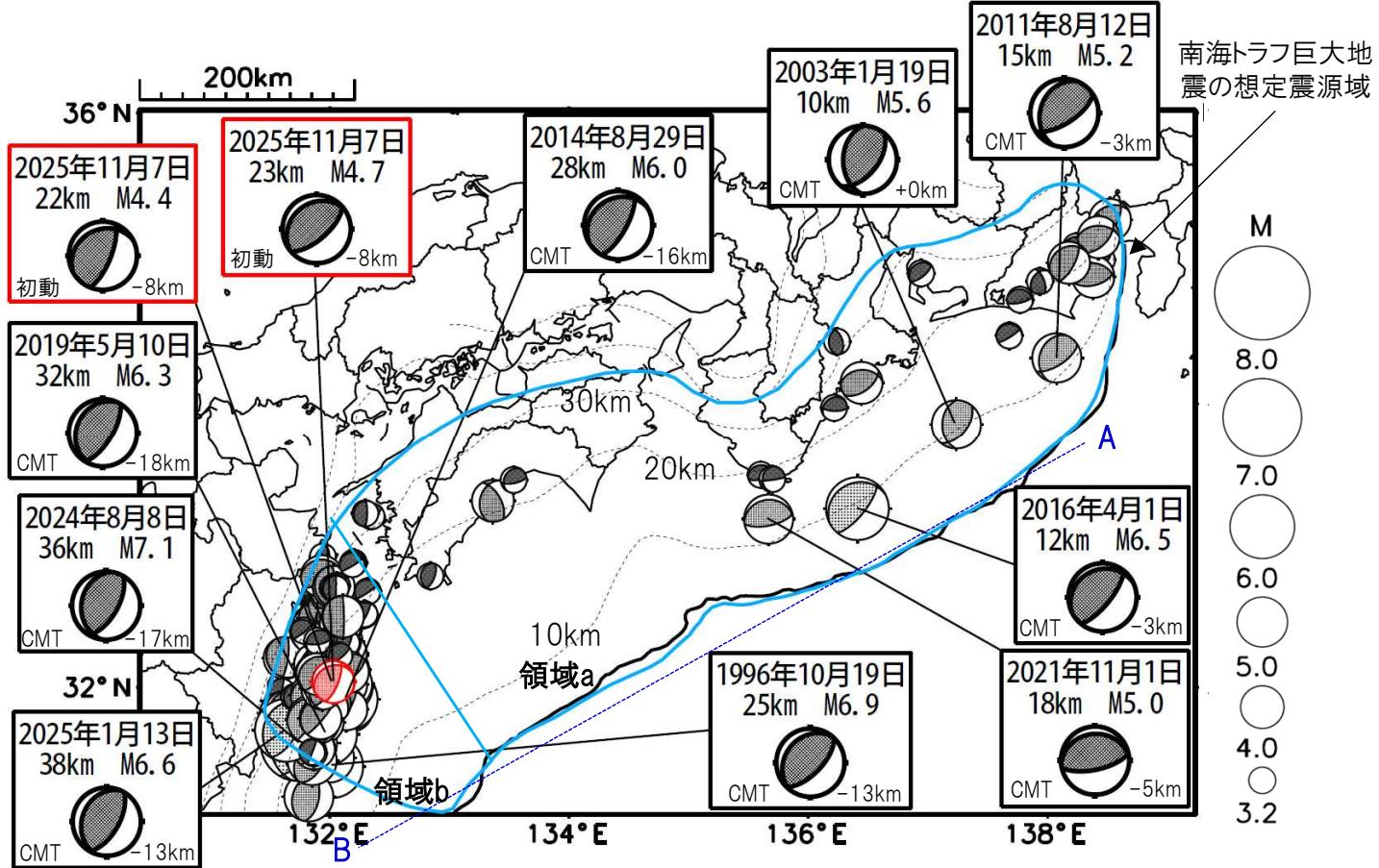
領域d内(日向灘)



※M全ての地震を表示していることから、検知能力未満の地震も表示しているため、回数積算図は参考として表記している。

想定南海トラフ地震の発震機構解と類似の型の地震

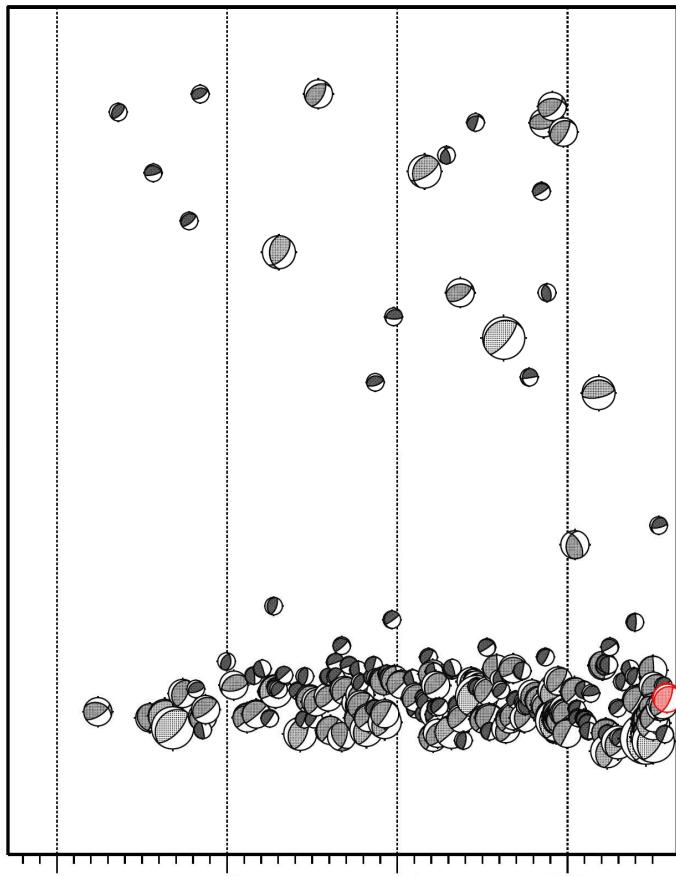
震央分布図(1987年9月1日～2025年11月30日、M \geq 3.2、2025年11月の地震を赤く表示)



- ・フィリピン海プレート上面の深さは、Baba et al.(2002)、Hirose et al.(2008)、Nakajima and Hasegawa(2007)による。震央分布図中の点線は10kmごとの等深線を示す。
- ・今期間に発生した地震(赤)、日向灘のM6.0以上、その他の地域のM5.0以上の地震に吹き出しを付けている。
- ・発震機構解の横に「S」の表記があるものは、精度がやや劣るものである。
- ・吹き出しの右下の数値は、フィリピン海プレート上面の深さからの差を示す。+は浅い、-は深いことを示す。
- ・吹き出しに「CMT」と表記した地震は、発震機構解と深さはCMT解による。Mは気象庁マグニチュードを表記している。
- ・発震機構解の解析基準は、解析当時の観測網等に応じて変遷しているため一定ではない。

震央分布図内の時空間分布図

A



B

プレート境界型の地震と類似の型の発震機構解を持つ地震は以下の条件で抽出した。

【抽出条件】

- ・M3.2以上の地震
- ・領域a内(南海トラフの想定最大規模の想定震源域内)で発生した地震
- ・発震機構解が以下の条件を全て満たしたものを抽出した。

P軸の傾斜角が45度以下

P軸の方位角が65度以上180度以下(※)

T軸の傾斜角が45度以上

N軸の傾斜角が30度以下

※以外の条件は、東海地震と類似の型を抽出する条件と同様

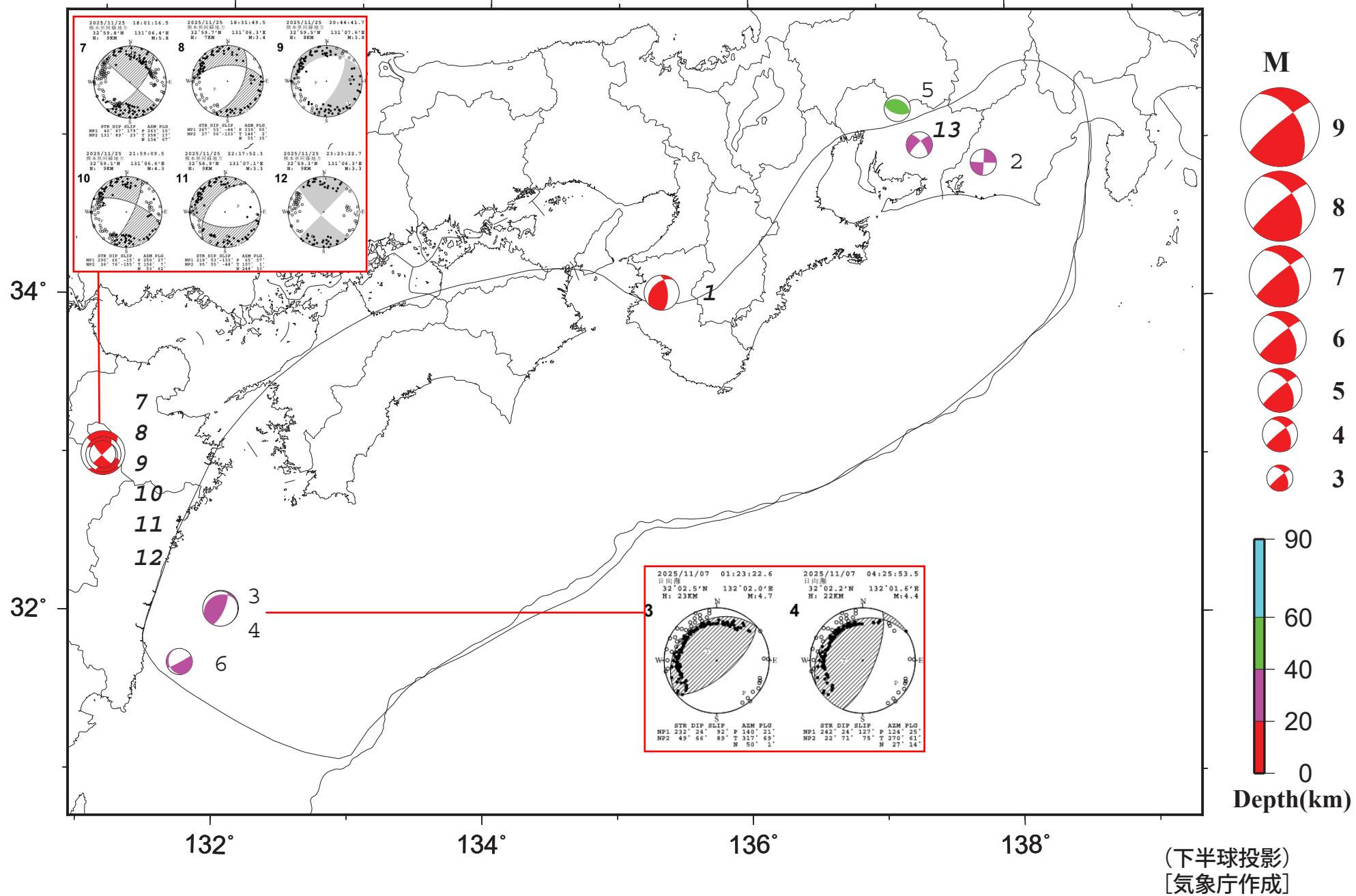
- ・発震機構解は、CMT解と初動解の両方で検索をした。

・同一の地震で、CMT解と初動解の両方がある場合はCMT解を選択している。

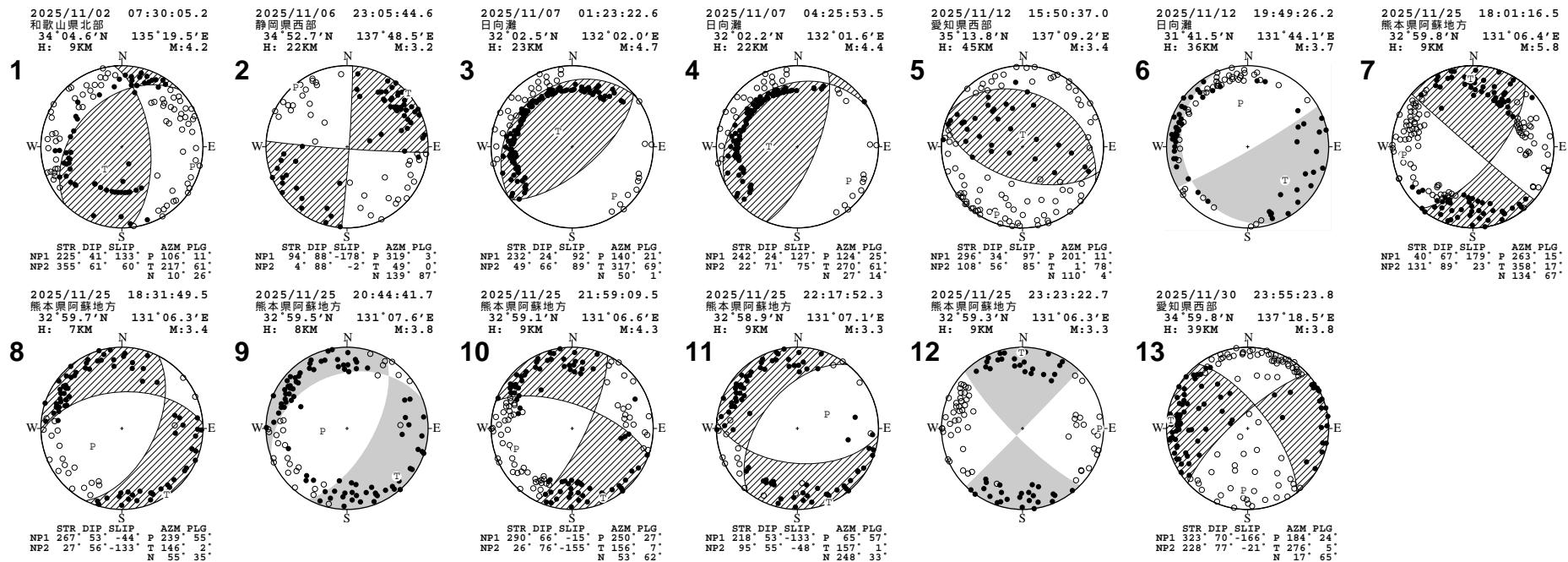
・東海地方から四国地方(領域a)は、フィリピン海プレート上面の深さから±10km未満の地震のみ抽出した。日向灘(領域b)は、+10km～-20km未満の震源を抽出した。CMT解はセントロイドの深さを使用した。

南海トラフ沿いとその周辺の初動発震機構解

Period:2025/11/01 00:00--2025/11/30 24:00



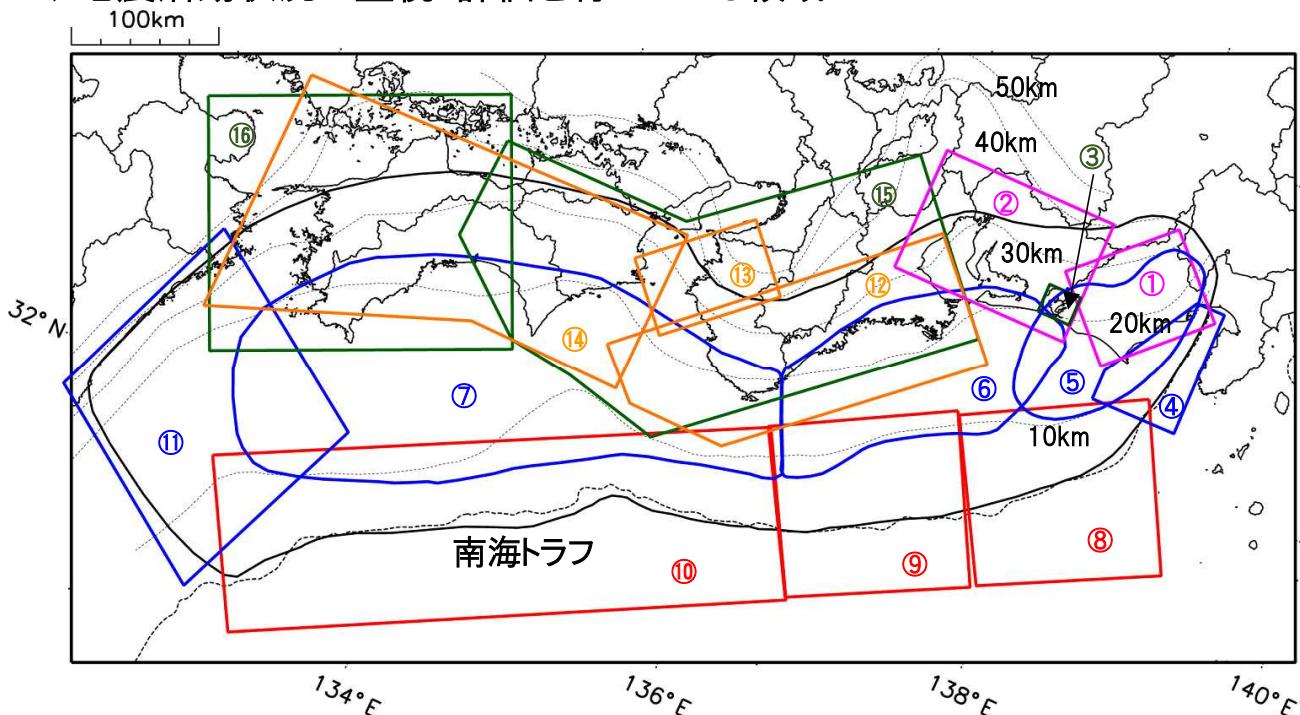
南海トラフ沿いとその周辺の初動発震機構解 (2)



(下半球投影)
[気象庁作成]

南海トラフ巨大地震の想定震源域とその周辺の地震活動状況

◆地震活動状況の監視・評価を行っている領域



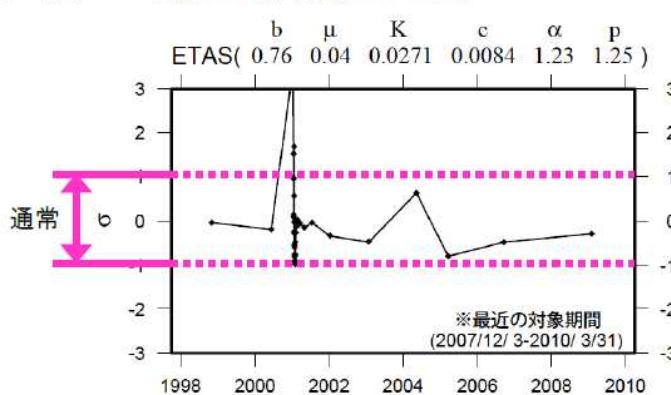
* 活動の監視・評価を行っている領域に番号を付している。

* Baba et al.(2002)、Hirose et al.(2008)、Nakajima and Hasegawa(2007)によるプレート境界の等深線を破線で示す。

* 黒色実線は、南海トラフ巨大地震の想定震源域を示す。

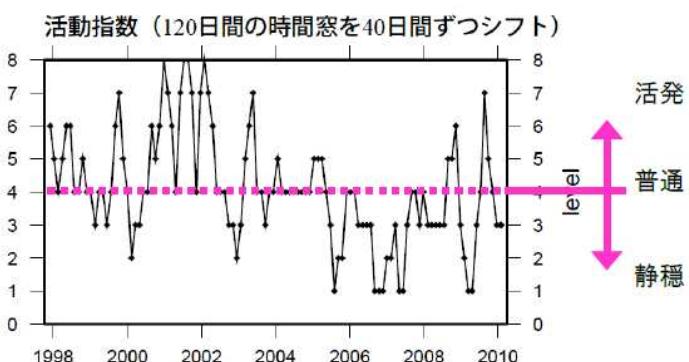
◆監視・評価に使用している指標等について

ETAS(σ 値) …理論上の地震活動からのずれ

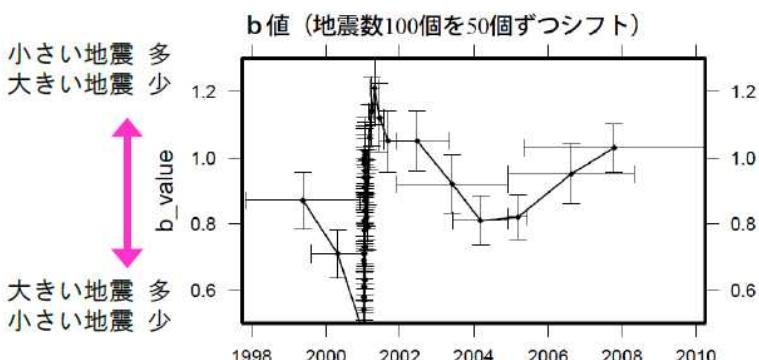


地震活動指数

…基準期間の活動と比較し、活発か静穏かを示す指標



b値 …地震の規模 (M) の相対分布



地震回数の指数化

指標	確率 (%)	地震数
8	1	多い
7	4	やや多い
6	10	
5	15	
4	40	ほぼ平常
3	15	
2	10	
1	4	やや少ない
0	1	少ない

南海トラフ巨大地震の想定震源域とその周辺の地震活動指数

2025年11月30日

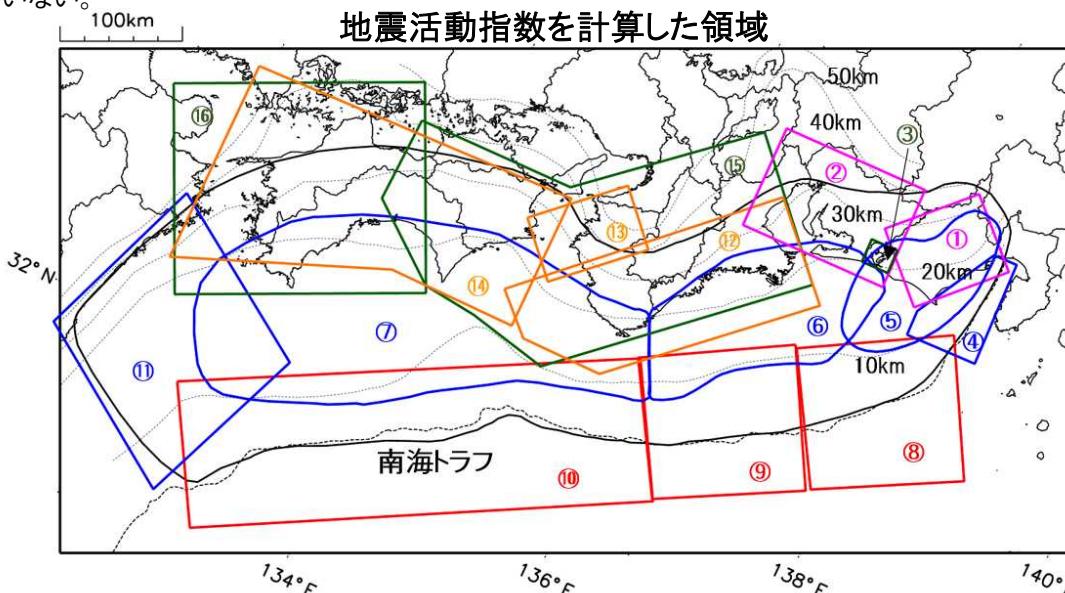
領域	①静岡県 中西部		②愛知県		③浜名湖 周辺	④駿河 湾	⑤東海	⑥東南 海	⑦ 南海
	地	プ	地	プ	プ	全	全	全	全
地震活動指数	2	3	8	8	4	6	2	6	7
平均回数	16.5	18.1	26.9	13.8	13.1	13.2	17.9	19.7	21.7
Mしきい値	1.1		1.1		1.1	1.4	1.5	2.0	2.0
クラスタ 除去	距離	3km		3km		3km	10km	10km	10km
	日数	7日		7日		7日	10日	10日	10日
対象期間	60日	90日	60日	30日	360日	180日	90日	360日	90日
深さ	0~ 30km	0~ 60km	0~ 30km	0~ 60km	0~ 60km	0~ 60km	0~ 60km	0~ 100km	0~ 100km

領域	南海トラフ沿い		⑪日向 灘	⑫紀伊 半島	⑬和歌 山	⑭四国	⑮紀伊半 島	⑯四国
	⑧東側	⑩西側						
	全	全						
地震活動指数	5	4	6	3	3	4	3	4
平均回数	13.2	14.4	21.4	22.5	41.0	31.3	27.8	28.6
Mしきい値	2.5	2.5	2.0	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5
クラスタ 除去	距離	10km	10km	10km	3km	3km	3km	3km
	日数	10日	10日	10日	7日	7日	7日	7日
対象期間	720日		360日	60日	120日	60日	90日	30日
深さ	0~ 100km	0~ 100km	0~ 100km	0~ 20km	0~ 20km	0~ 20km	20~ 100km	20~ 100km

*基準期間は、全領域1997年10月1日～2025年11月30日

*領域欄の「地」は地殻内、「プ」はフィリピン海プレート内で発生した地震であることを示す。ただし、震源の深さから便宜的に分類しただけであり、厳密に分離できていない場合もある。「全」は浅い地震から深い地震まで全ての深さの地震を含む。

*⑨の領域(三重県南東沖)は、2004年9月5日以降の地震活動の影響で、地震活動指数を正確に計算できないため、掲載していない。



地震活動指数と地震数		
地震回数の指指数化		
指數	確率 (%)	地震数
8	1	多い
7	4	やや多い
6	10	中程度
5	15	やや少ない
4	40	ほぼ平常
3	15	少なめ
2	10	やや少ない
1	4	少ない
0	1	非常に少ない

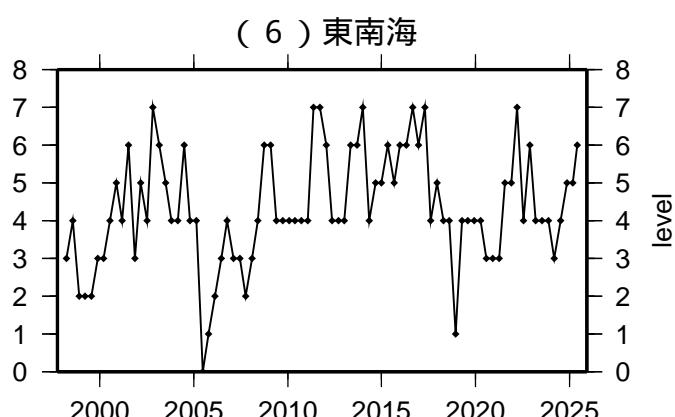
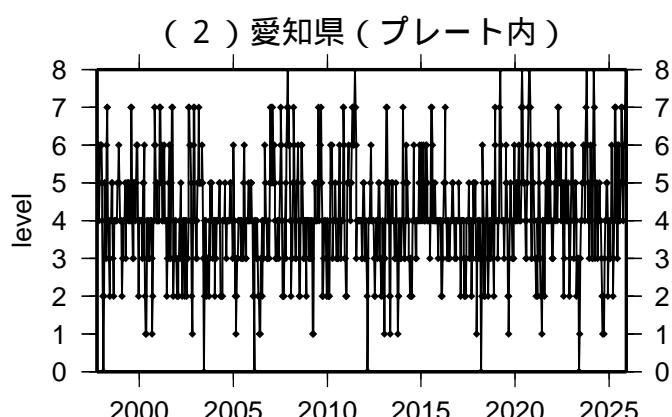
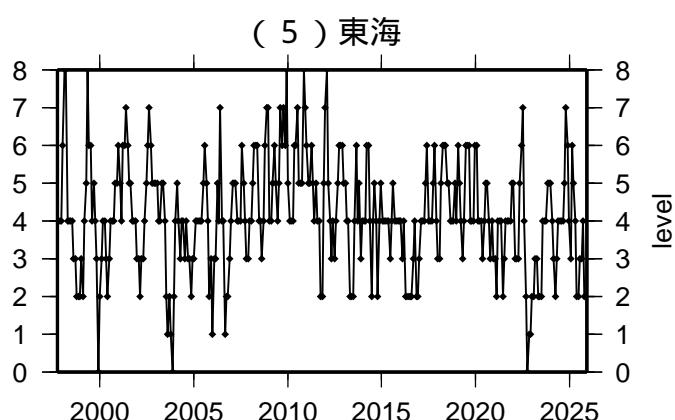
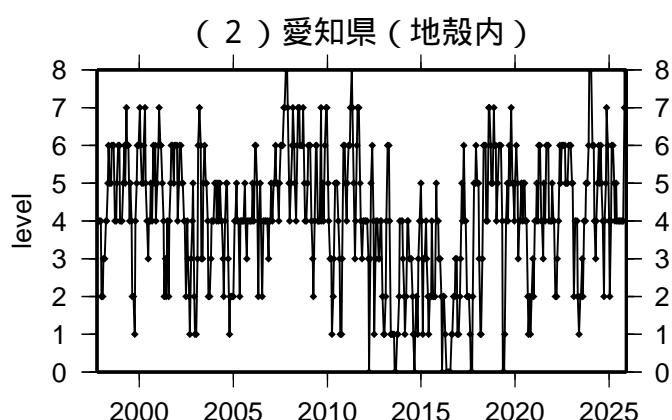
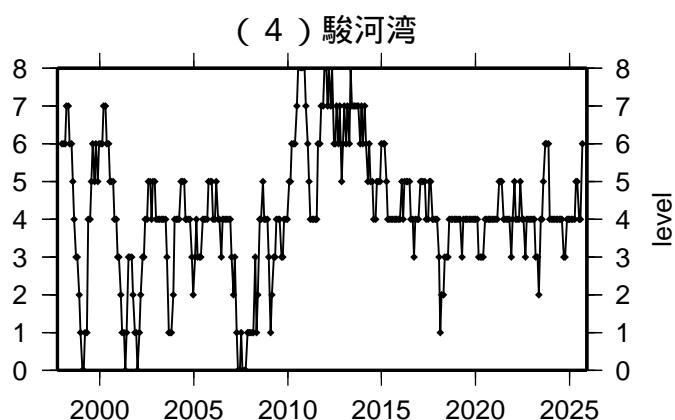
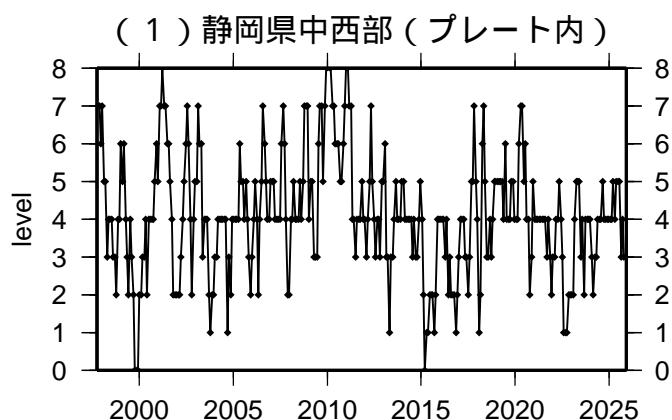
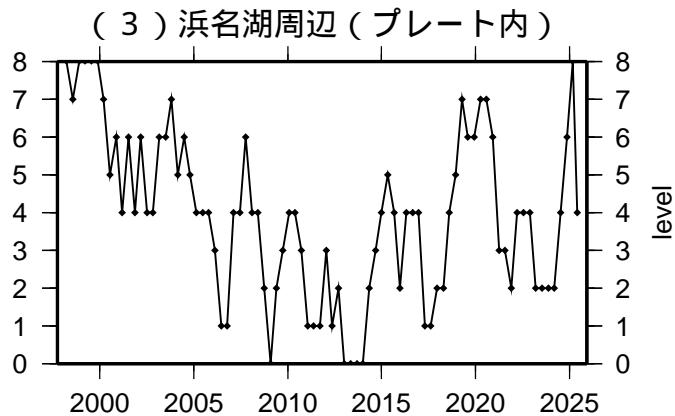
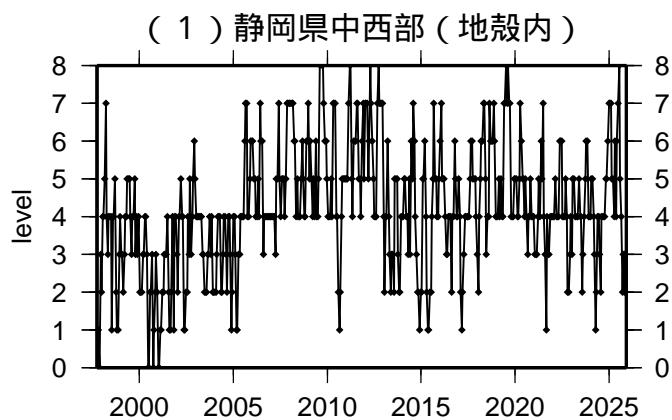
* 黒色実線は、南海トラフ巨大地震の想定震源域を示す。

* Baba et al.(2002)、Hirose et al.(2008)、Nakajima and Hasegawa(2007)によるプレート境界の等深線を破線で示す。

気象庁作成

地震活動指數一覧

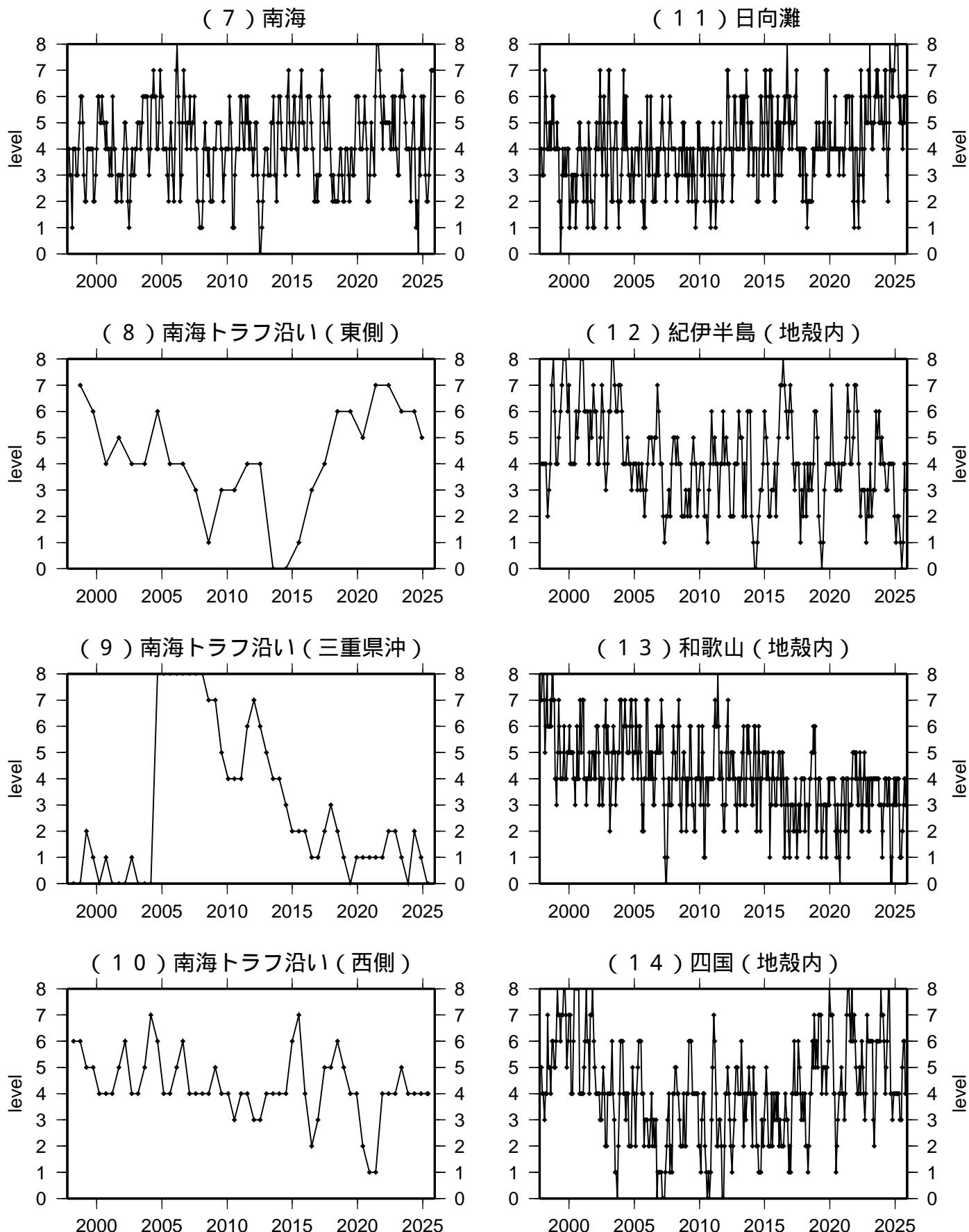
2025年11月30日



活動指數	0	1	2	3	4	5	6	7	8
確率 (%)	1	4	10	15	40	15	10	4	1
地震数	少	平常	多						

地震活動指數一覧

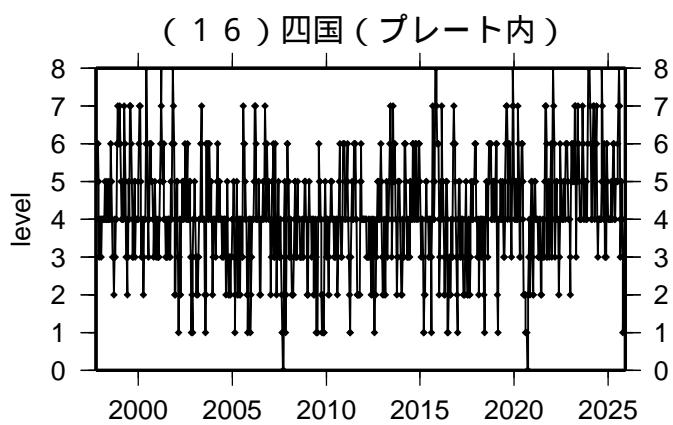
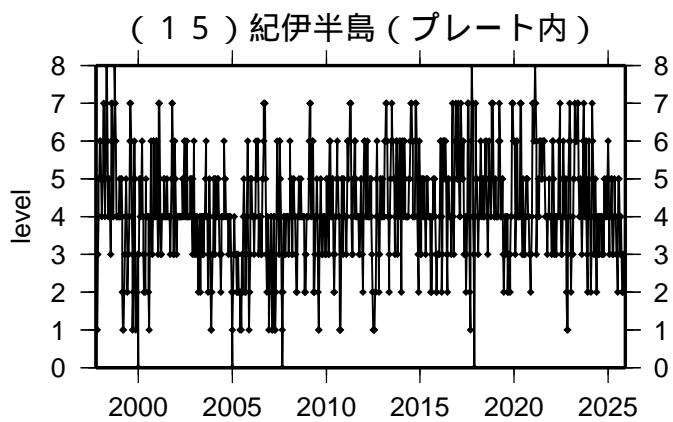
2025年11月30日



活動指數	0	1	2	3	4	5	6	7	8
確率(%)	1	4	10	15	40	15	10	4	1
地震数	少	←	平常	→	多				

地震活動指數一覧

2025年11月30日



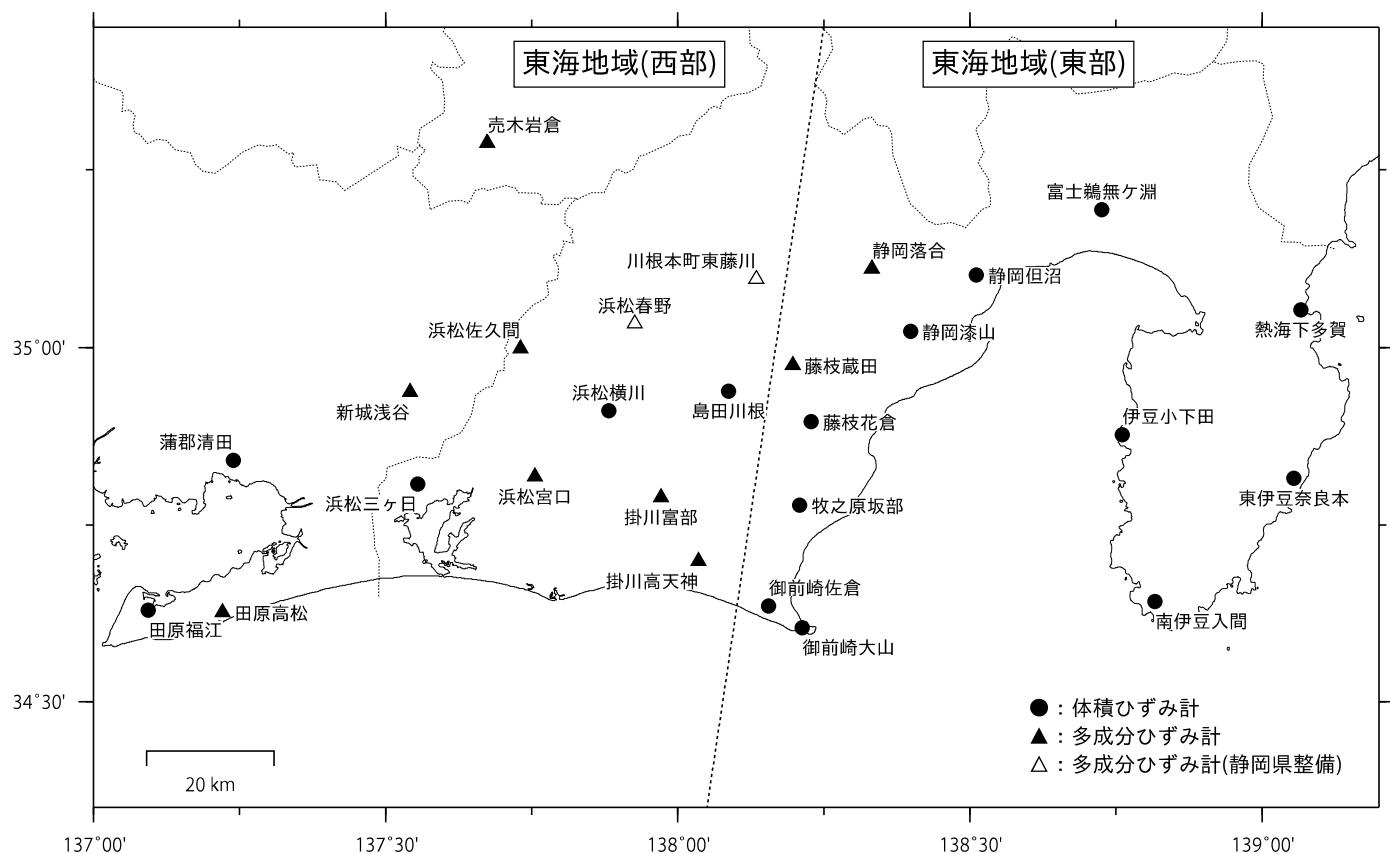
活動指數	0	1	2	3	4	5	6	7	8
確率 (%)	1	4	10	15	40	15	10	4	1
地震数	少	←	平常	→	多				

ひずみ計による観測結果（2025年6月1日～2025年11月30日）

短期的ゆっくりすべりに起因すると見られる次の地殻変動がひずみ計で観測された。

SSE1 : 2025年7月4日から6日にかけて観測された。 (第96回評価検討会資料参照)
 SSE2 : 2025年7月7日から10日にかけて観測された。 (第96回評価検討会資料参照)
 SSE3 : 2025年7月12日から15日にかけて観測された。 (第96回評価検討会資料参照)
 SSE4 : 2025年7月15日から17日にかけて観測された。 (第96回評価検討会資料参照)
 SSE5 : 2025年9月1日から3日にかけて観測された。 (第98回評価検討会資料参照)
 SSE6 : 2025年9月5日から7日にかけて観測された。 (第98回評価検討会資料参照)
 SSE7 : 2025年11月4日から7日にかけて観測された。 (第100回評価検討会資料参照)

ひずみ計の配置図



※観測点名の記号Vは体積ひずみを、Sは多成分ひずみ計で観測した線ひずみより計算した面積ひずみを示す。

※観測点名の下の「D/day (/M)」は、一日あたりのトレンド変化量をDとして補正していること

及び縮尺を1/M倍にして表示していることを示す。

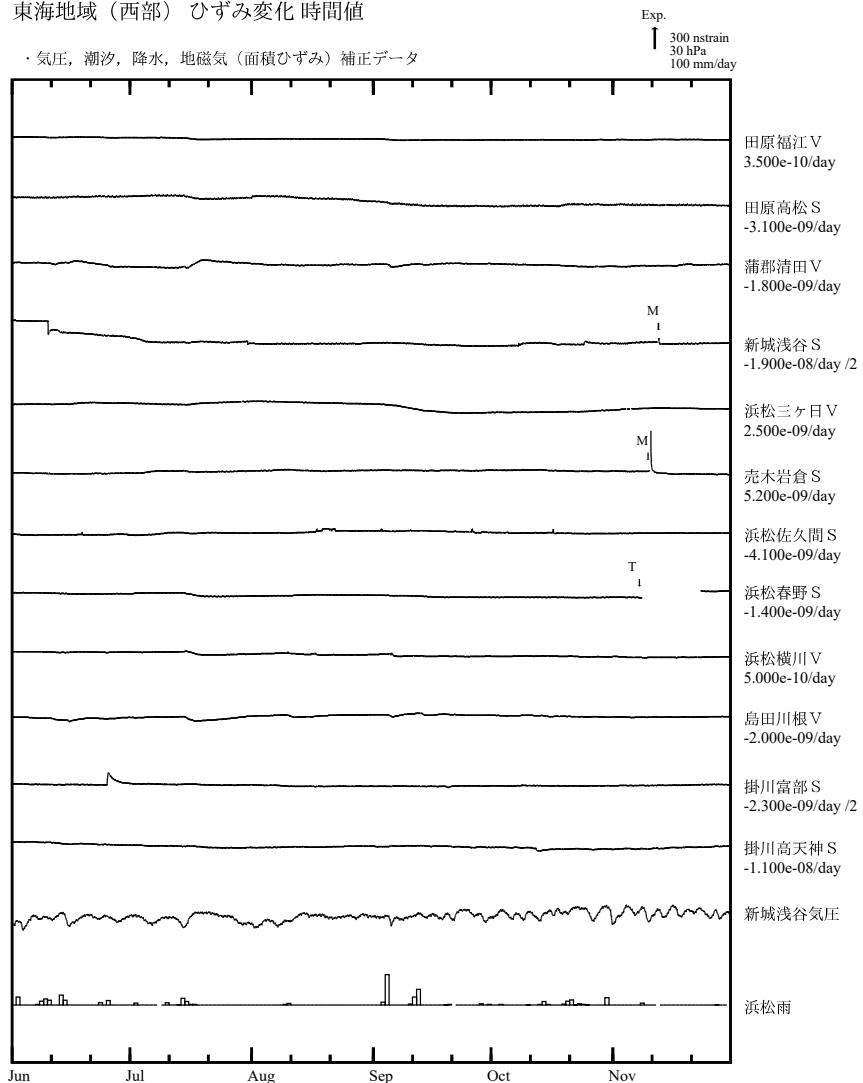
※観測点名、観測成分名右側の縦棒は、平常時における24時間階差の99.9%タイル値を示す。

※多成分ひずみ計成分名の()内は測定方位、[]内は面積ひずみ計算に用いた成分を示す。

※多成分ひずみ計の最大剪断ひずみ、面積ひずみ及び主軸方向は、広域のひずみに換算して算出している。

東海地域（西部）ひずみ変化 時間値

・気圧、潮汐、降水、地磁気（面積ひずみ）補正データ



・特記事項なし。

C : 地震に伴うステップ状の変化

L : 局所的な変化

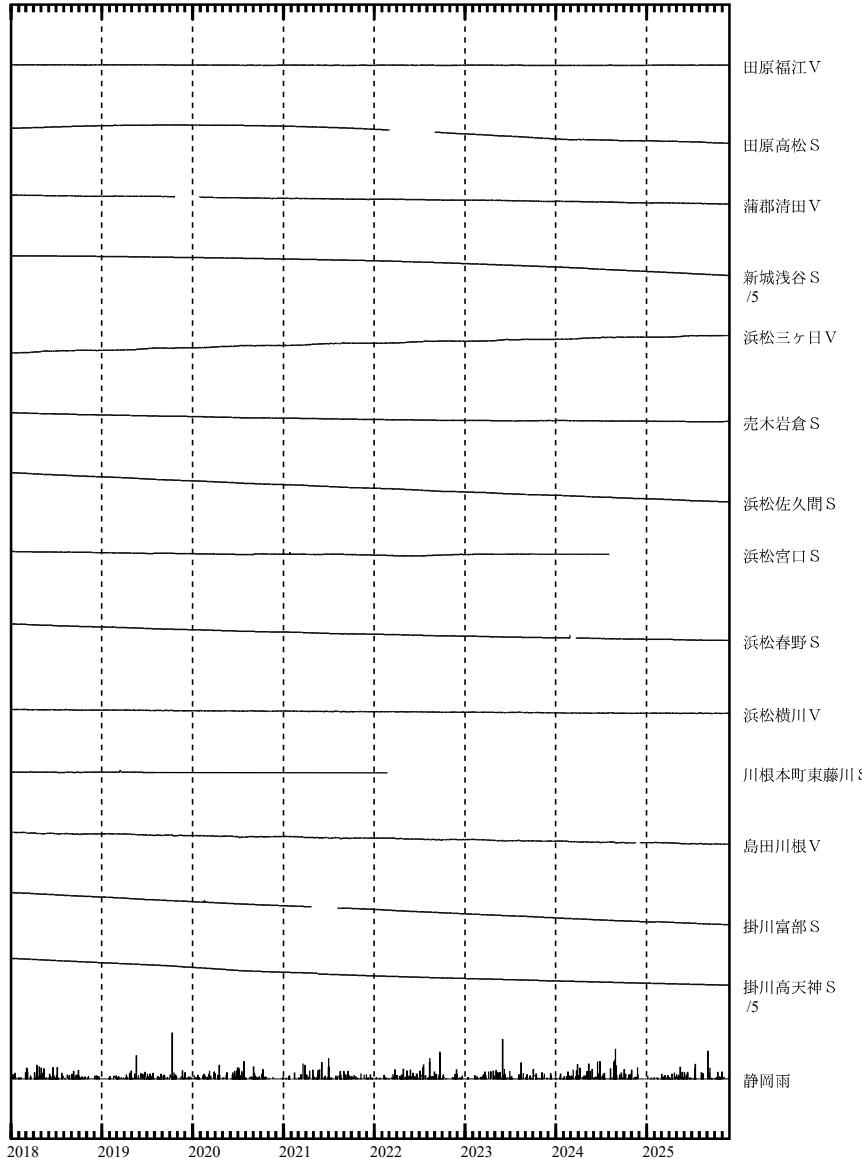
S : 例年見られる変化

M : 調整

T : 障害

東海地域（西部）ひずみ変化 日値

Exp. 10000 nstrain
200 mm

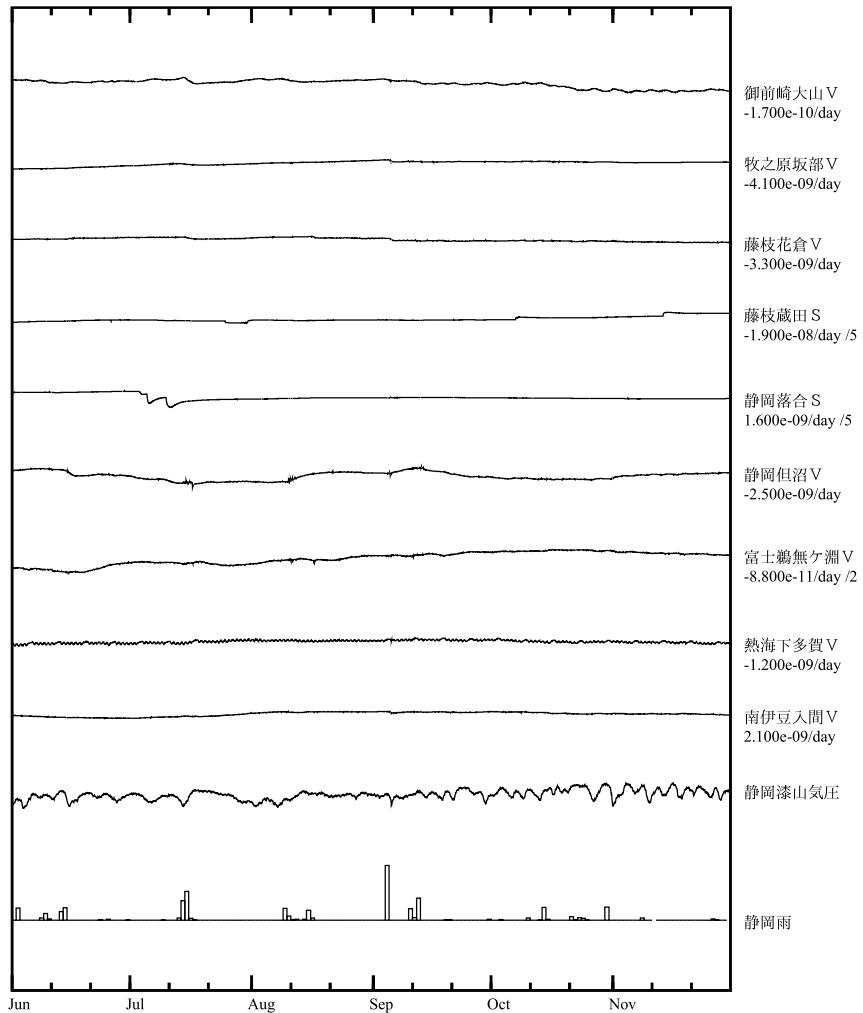


※面積ひずみは、地震に伴うステップ状の変化を除去して計算している。

東海地域（東部）ひずみ変化 時間値

・気圧、潮汐、降水、地磁気（面積ひずみ）補正データ

Exp.
300 nstrain
30 hPa
100 mm/day

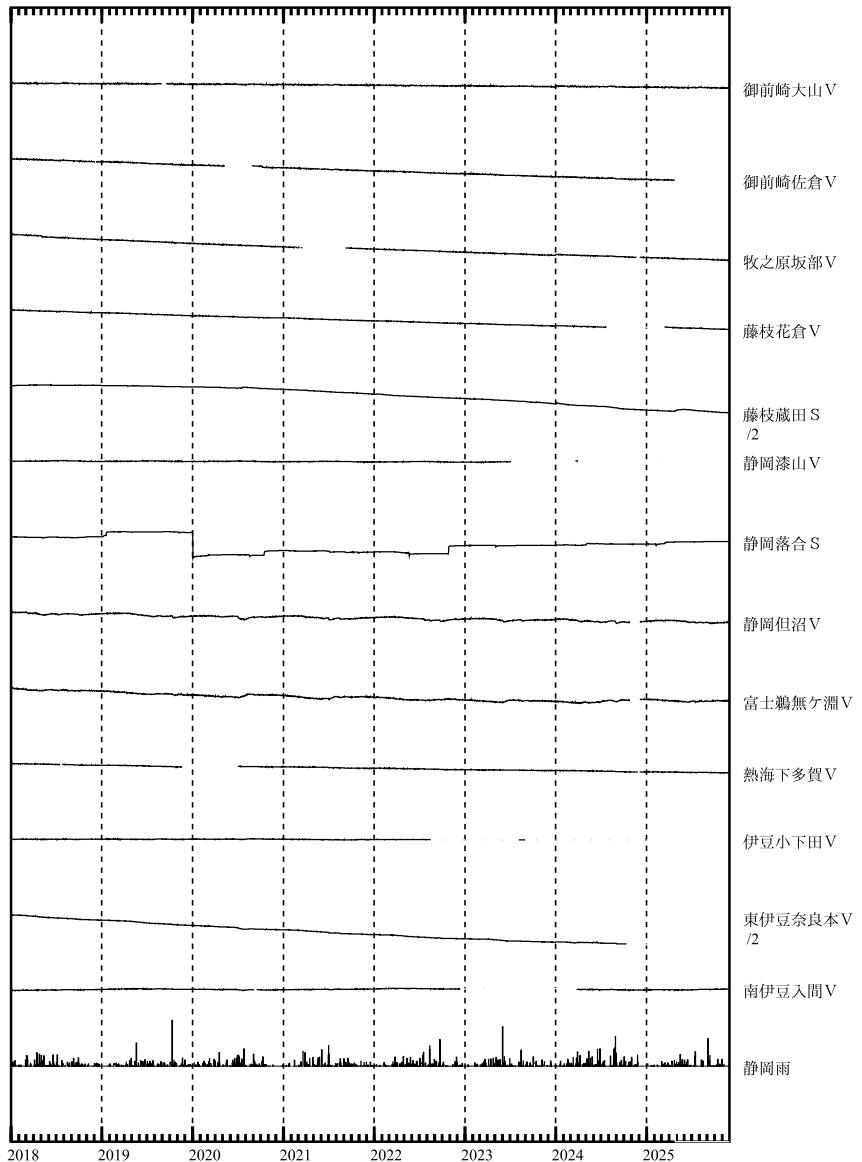


・特記事項なし。

C : 地震に伴うステップ状の変化
L : 局所的な変化
S : 例年見られる変化
M : 調整
T : 障害

東海地域（東部）ひずみ変化 日値

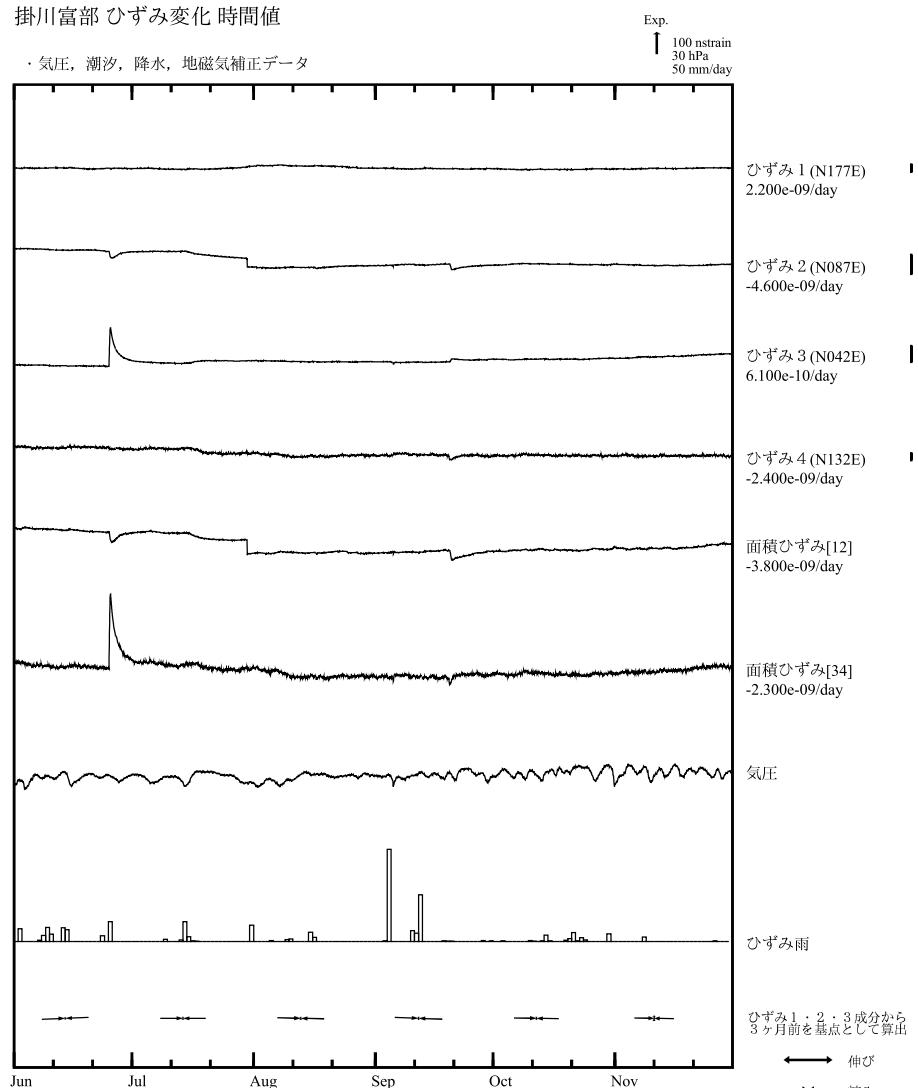
Exp.
10000 nstrain
200 mm



※面積ひずみは、地震に伴うステップ状の変化を除去して計算している。

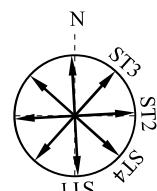
掛川富部ひずみ変化時間値

・気圧、潮汐、降水、地磁気補正データ



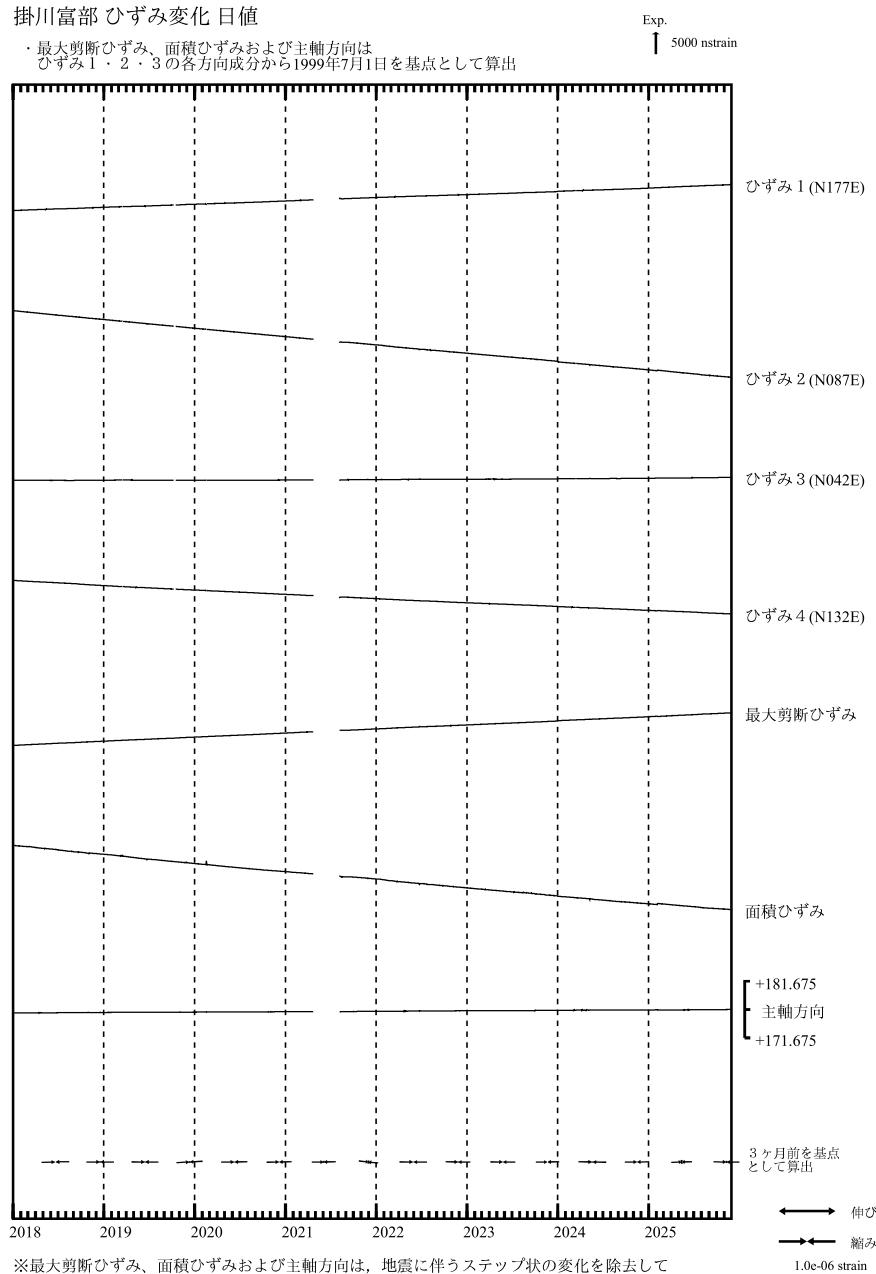
・特記事項なし。

C : 地震に伴うステップ状の変化
L : 局所的な変化
S : 例年見られる変化
M : 調整
T : 障害

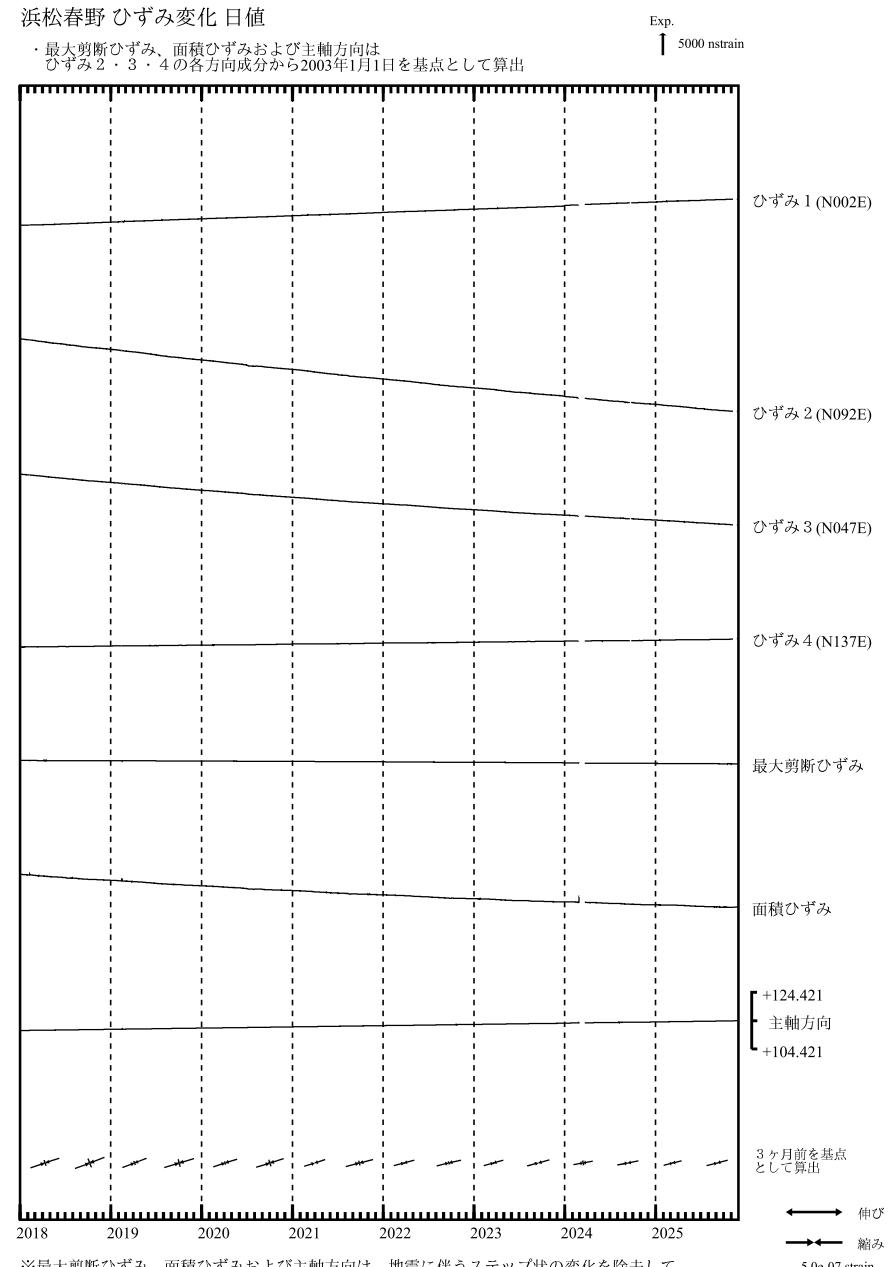
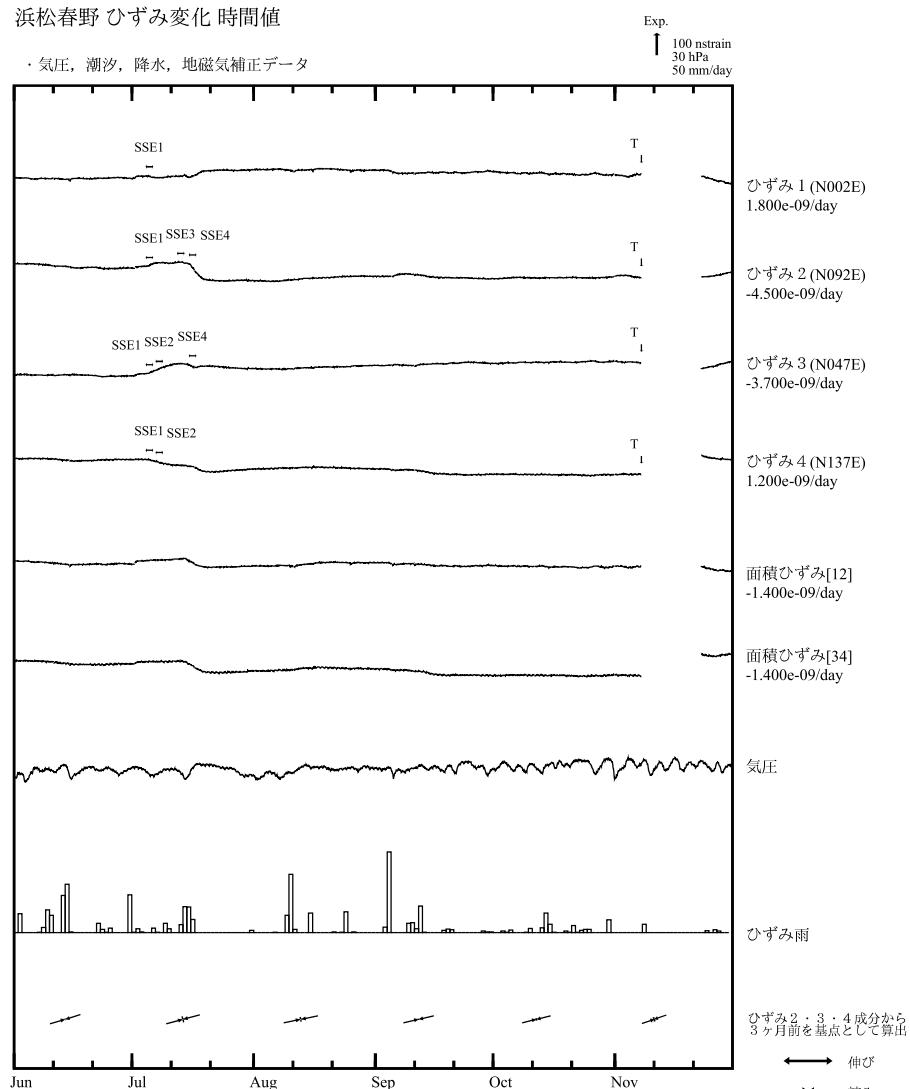


掛川富部ひずみ変化日値

・最大剪断ひずみ、面積ひずみおよび主軸方向は
ひずみ 1・2・3 の各方向成分から1999年7月1日を基点として算出



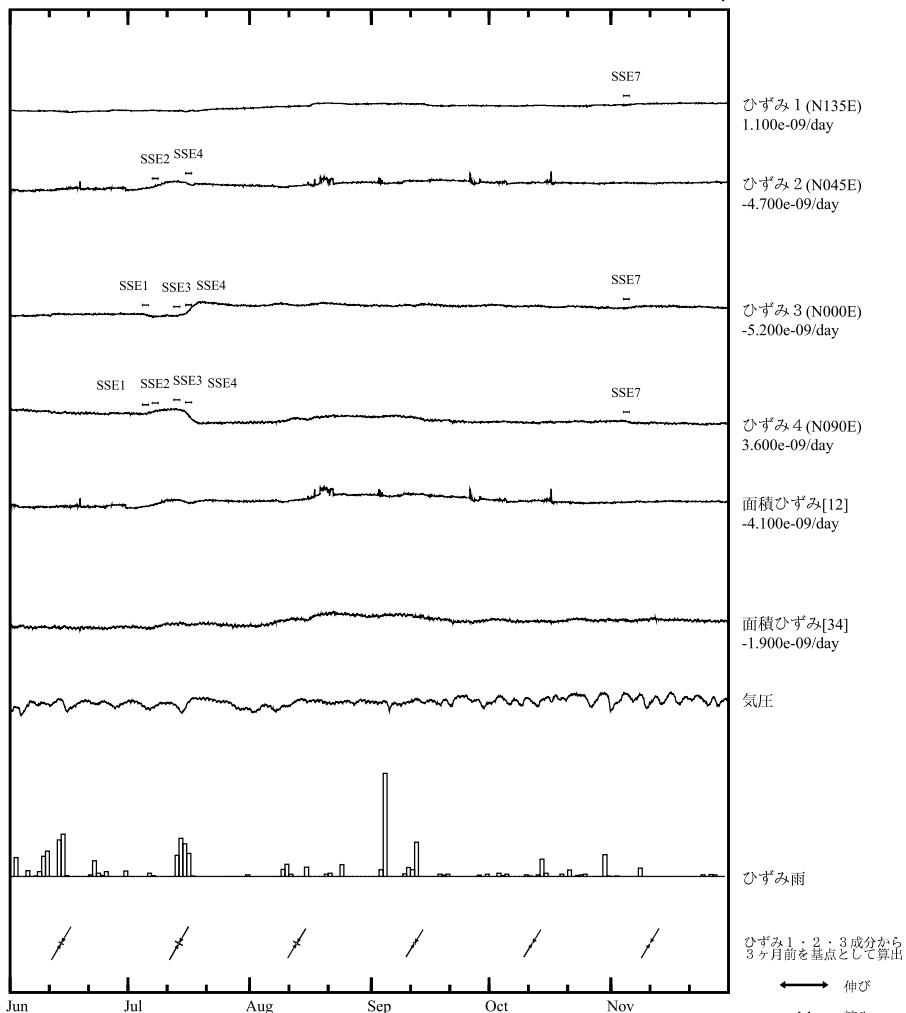
気象庁作成



※最大剪断ひずみ、面積ひずみおよび主軸方向は、地震に伴うステップ状の変化を除去して計算している。

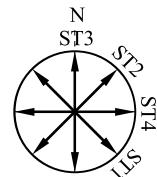
浜松佐久間 ひずみ変化 時間値

・気圧、潮汐、降水、地磁気補正データ



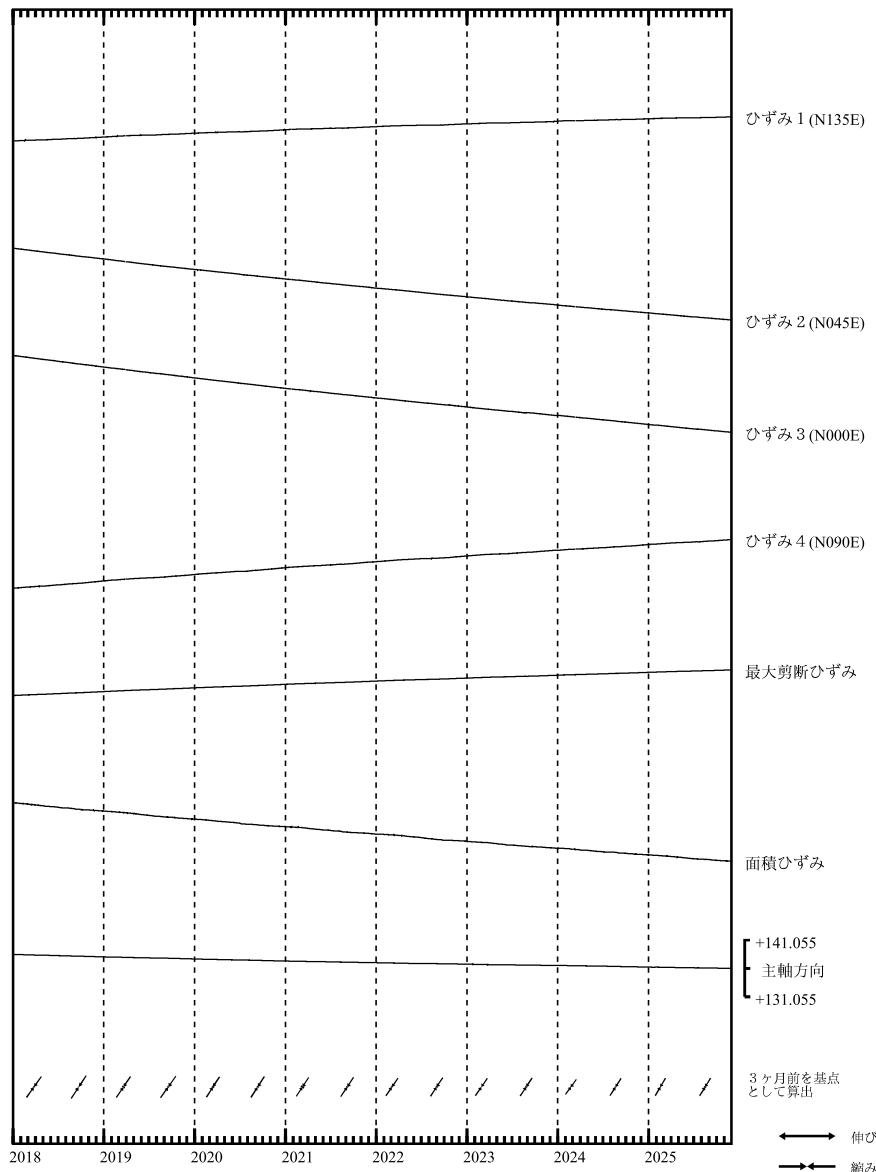
SSE1 : 短期的ゆっくりすべり 2025.07.04-07.06
SSE2 : 短期的ゆっくりすべり 2025.07.07-07.10
SSE3 : 短期的ゆっくりすべり 2025.07.12-07.15
SSE4 : 短期的ゆっくりすべり 2025.07.15-07.17
SSE7 : 短期的ゆっくりすべり 2025.11.04-11.07

C : 地震に伴うステップ状の変化
L : 局所的な変化
S : 例年見られる変化
M : 調整
T : 障害



浜松佐久間 ひずみ変化 日値

・最大剪断ひずみ、面積ひずみおよび主軸方向は
ひずみ 1・2・3 の各方向成分から2000年1月1日を基点として算出

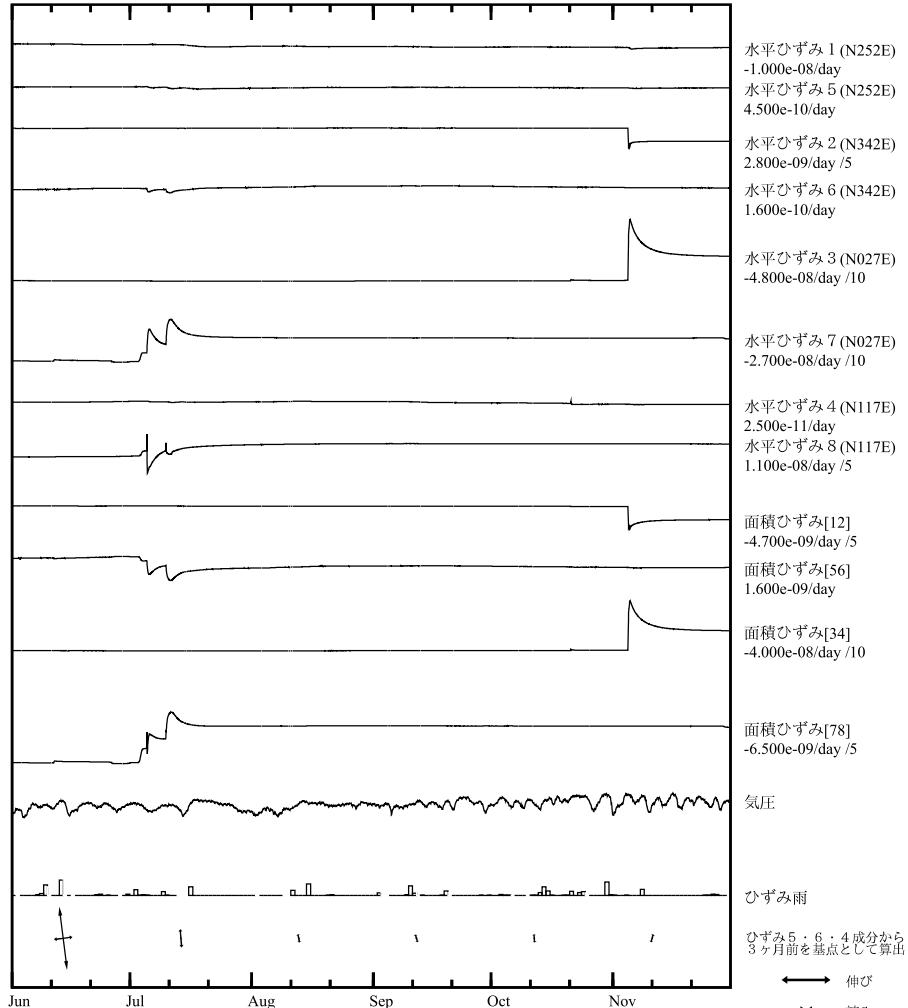


※最大剪断ひずみ、面積ひずみおよび主軸方向は、地震に伴うステップ状の変化を除去して
計算している。

気象庁作成

静岡落合 ひずみ変化 時間値

・気圧、潮汐、降水、地磁気補正データ



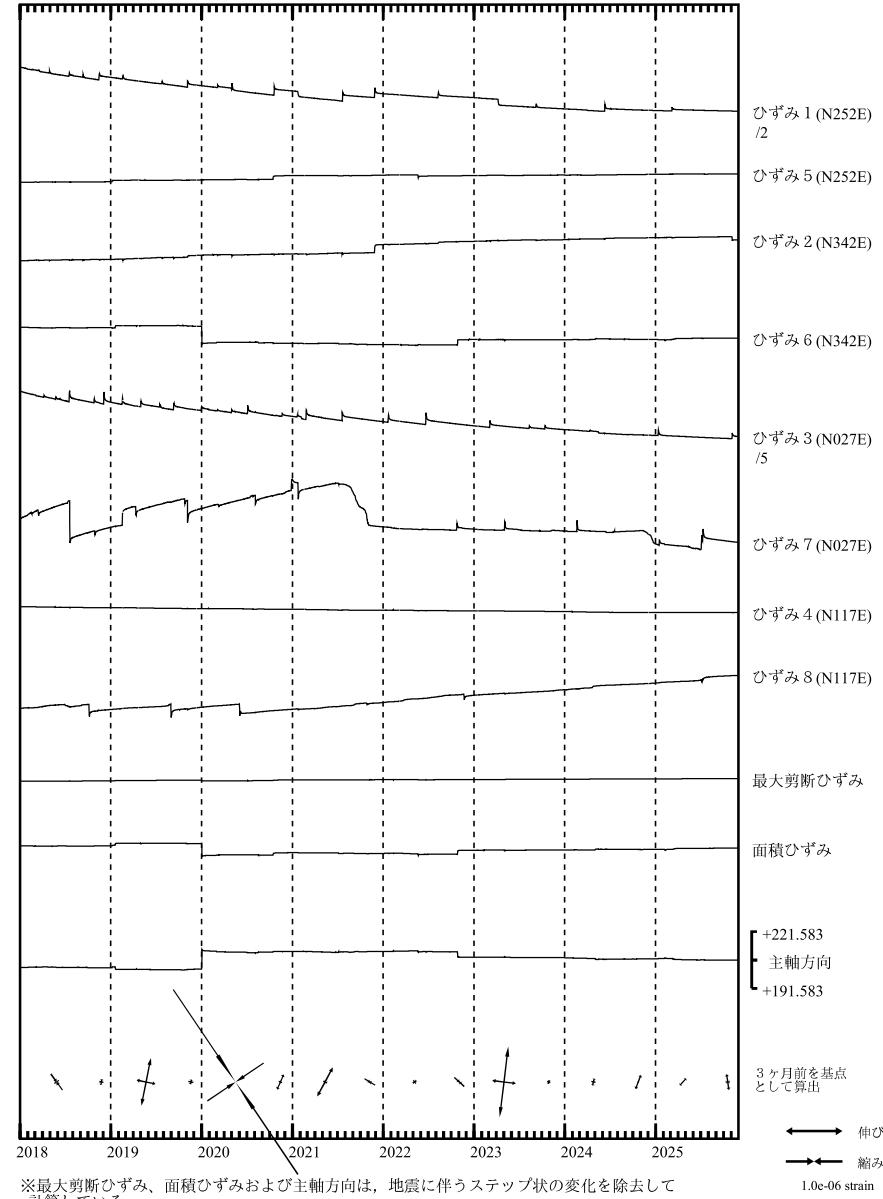
・特記事項なし。

C : 地震に伴うステップ状の変化
L : 局所的な変化
S : 例年見られる変化
M : 調整
T : 障害



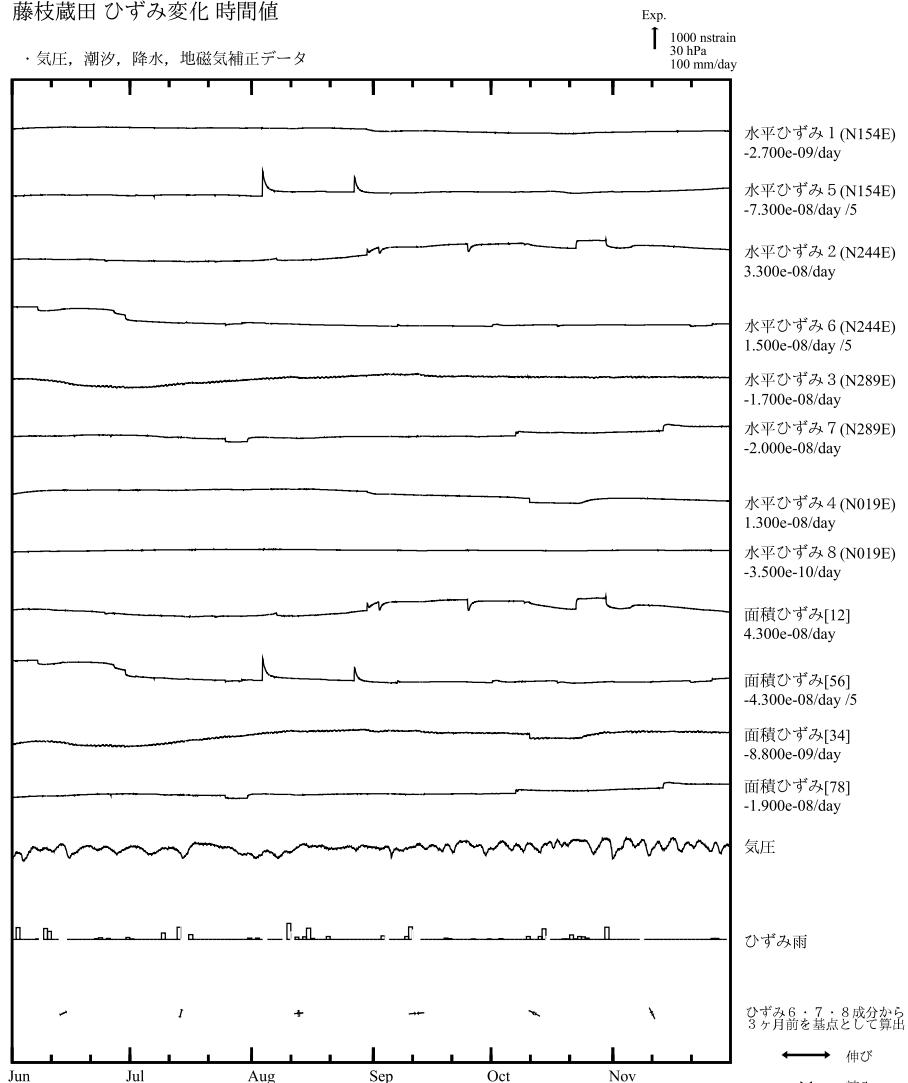
静岡落合 ひずみ変化 日値

・最大剪断ひずみ、面積ひずみおよび主軸方向は
ひずみ 5・6・4 の各方向成分から2012年1月1日を基点として算出



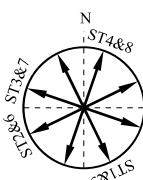
藤枝蔵田ひずみ変化時間値

・気圧、潮汐、降水、地磁気補正データ



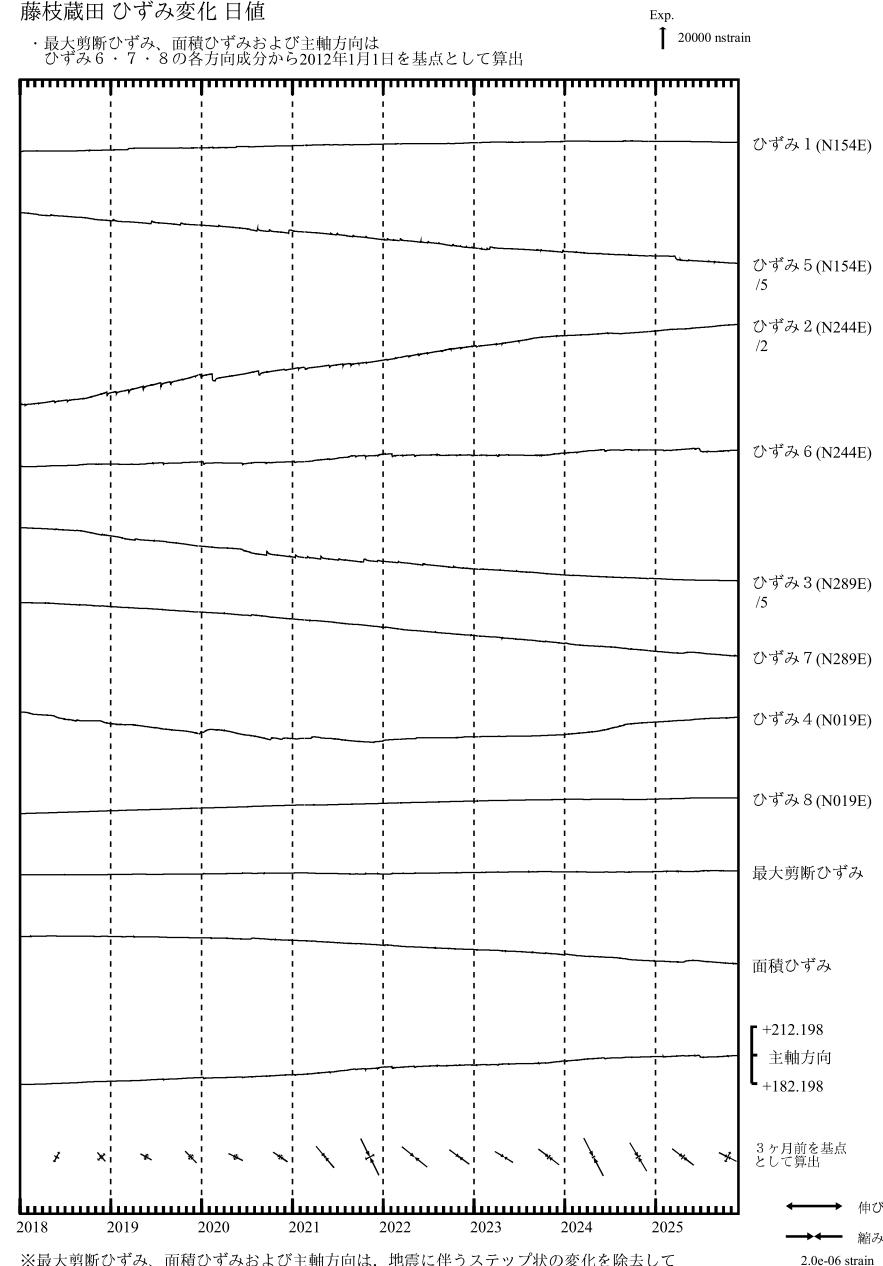
・特記事項なし。

C : 地震に伴うステップ状の変化
L : 局所的な変化
S : 例年見られる変化
M : 調整
T : 障害



藤枝蔵田ひずみ変化日値

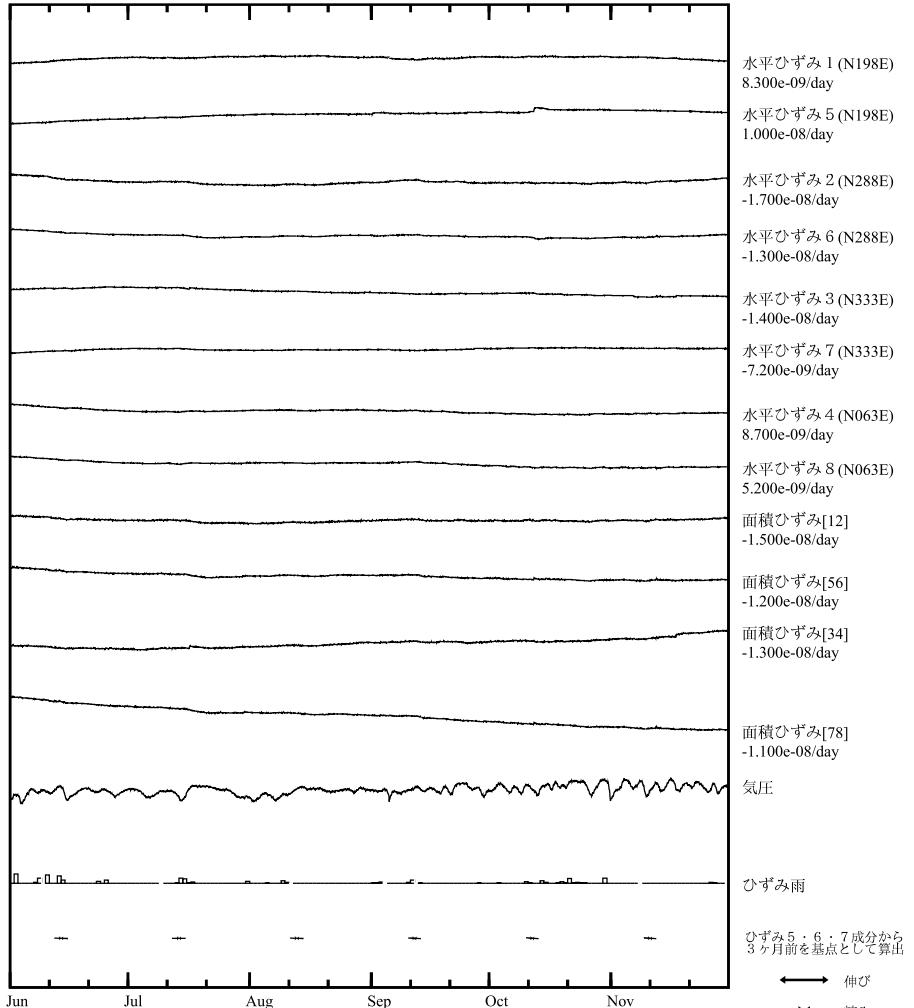
・最大剪断ひずみ、面積ひずみおよび主軸方向は
ひずみ 6・7・8の各方向成分から2012年1月1日を基点として算出



気象庁作成

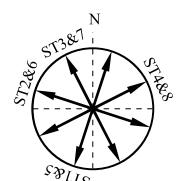
掛川高天神 ひずみ変化 時間値

・気圧、潮汐、降水、地磁気補正データ



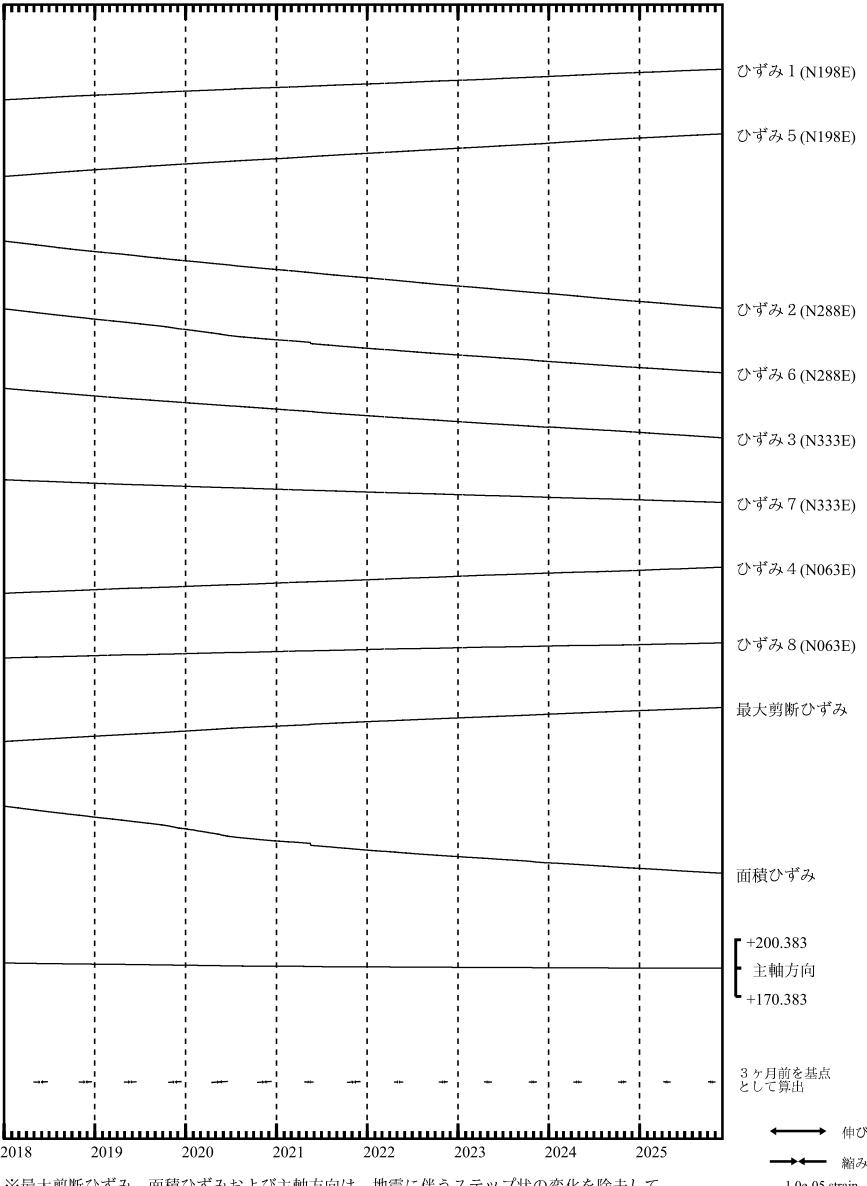
・特記事項なし。

C : 地震に伴うステップ状の変化
L : 局所的な変化
S : 例年見られる変化
M : 調整
T : 障害



掛川高天神 ひずみ変化 日値

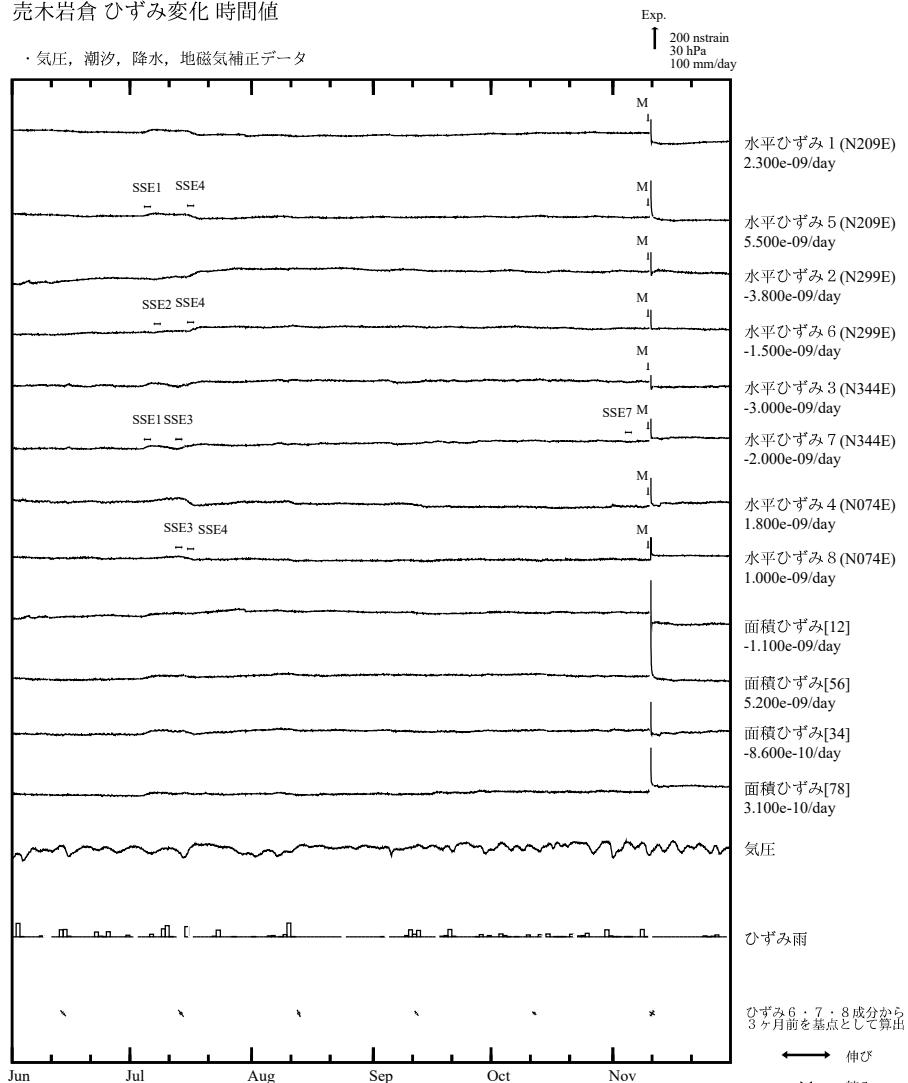
・最大剪断ひずみ、面積ひずみおよび主軸方向は
ひずみ 5・6・7 の各方向成分から2012年1月1日を基点として算出



気象庁作成

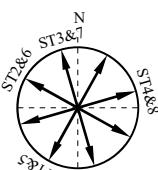
壳木岩倉 ひずみ変化 時間値

・気圧、潮汐、降水、地磁気補正データ



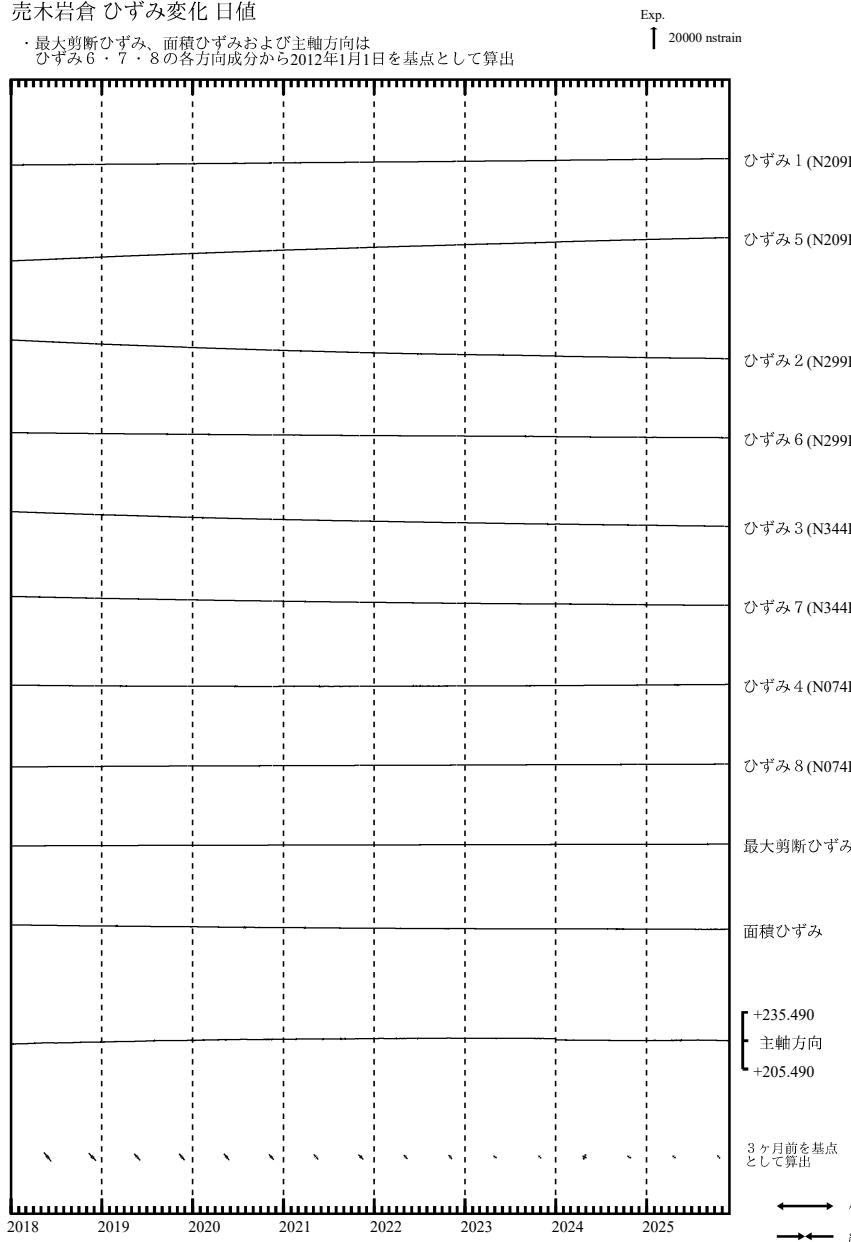
SSE1	短期的ゆっくりすべり	2025.07.04-07.06
SSE2	短期的ゆっくりすべり	2025.07.07-07.10
SSE3	短期的ゆっくりすべり	2025.07.12-07.15
SSE4	短期的ゆっくりすべり	2025.07.15-07.17
SSE5	短期的ゆっくりすべり	2025.11.04-11.07

C : 地震に伴うステップ状の変化
 L : 局所的な変化
 S : 例年見られる変化
 M : 調整
 T : 障害



壳木岩倉 ひずみ変化 日值

- ・最大剪断ひずみ、面積ひずみおよび主軸方向はひずみ6・7・8の各方向成分から2012年1月1日を基点として算出

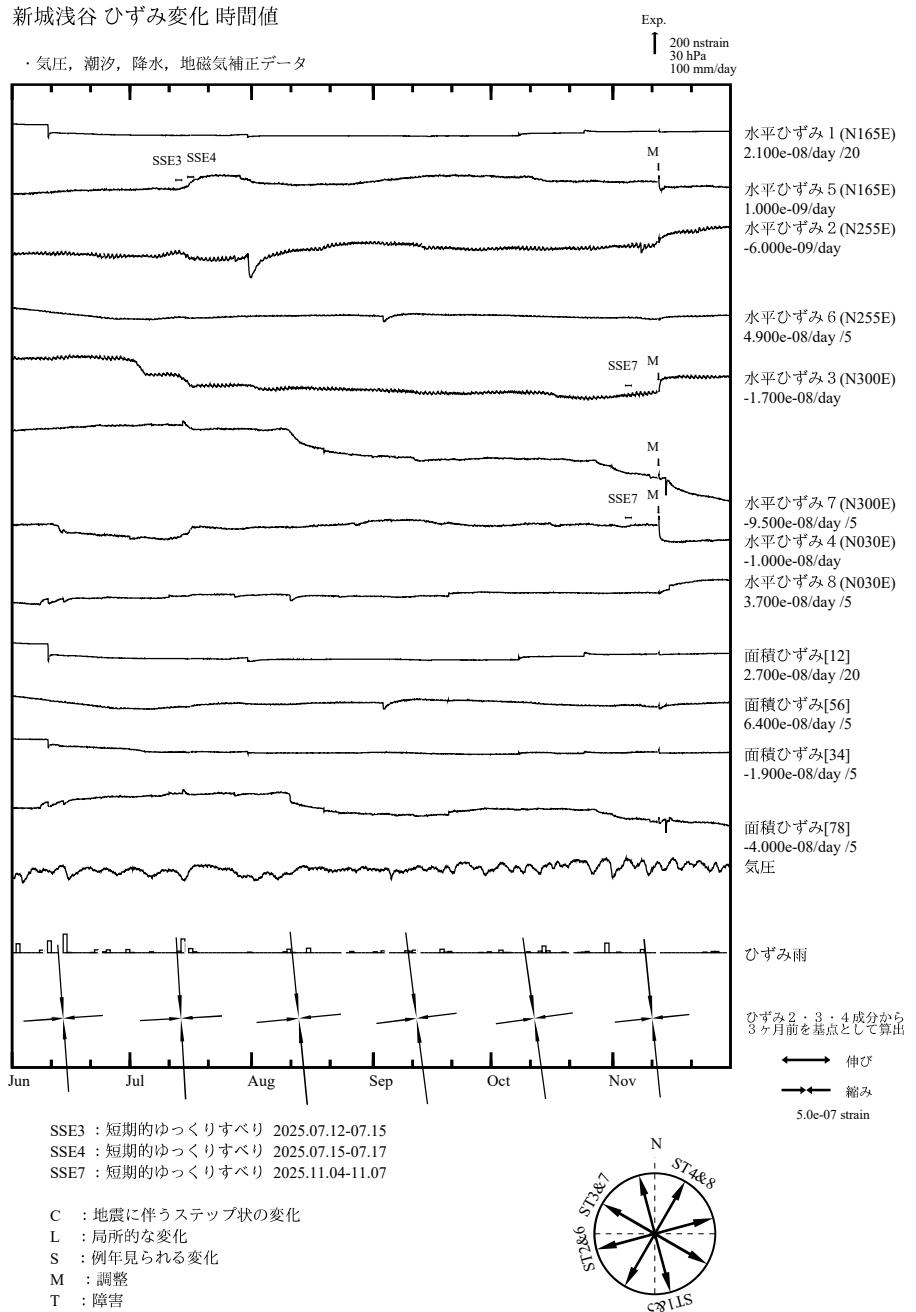


※最大剪断ひずみ、面積ひずみおよび主軸方向は、地震に伴うステップ状の変化を除去して計算している。

气象厅作成

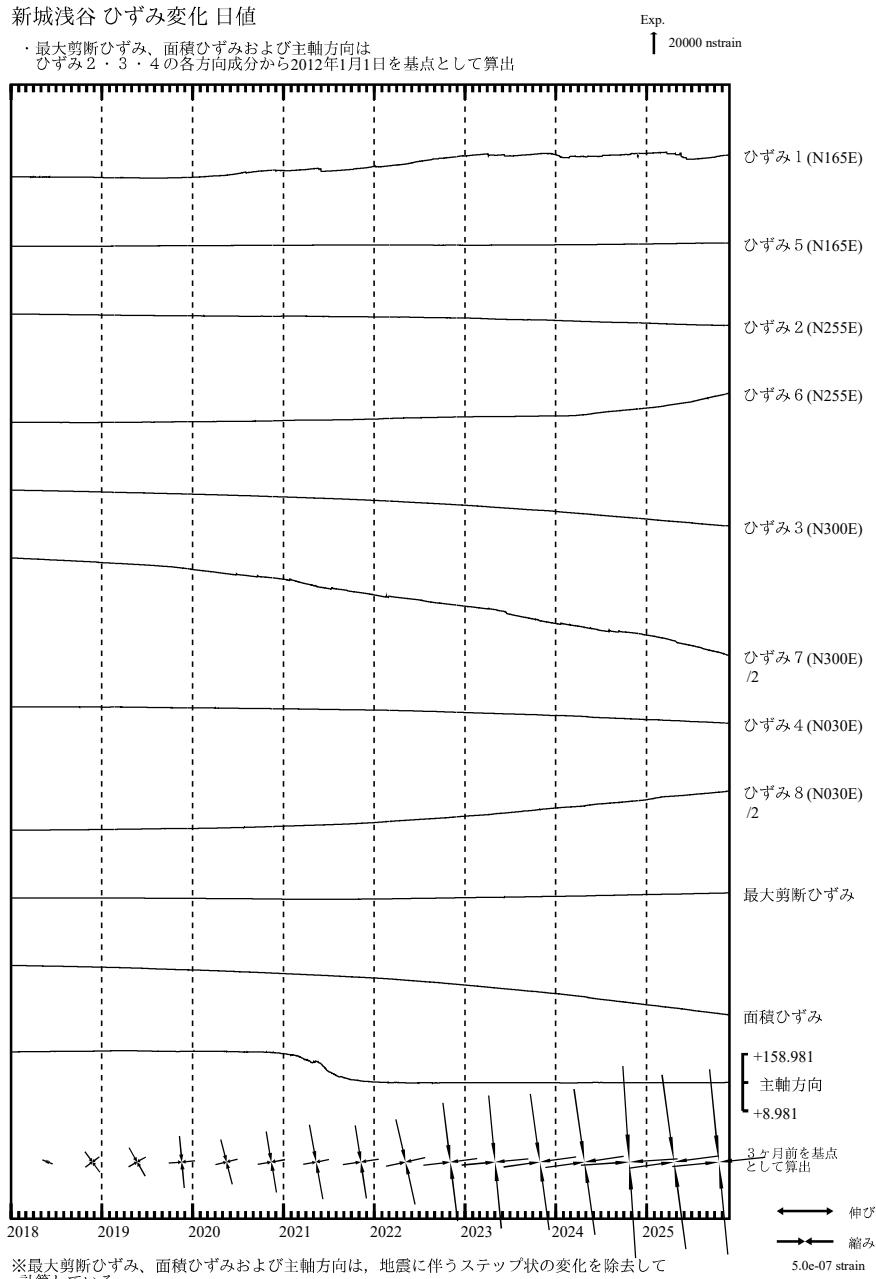
新城浅谷 ひずみ変化 時間値

・気圧、潮汐、降水、地磁気補正データ



新城浅谷 ひずみ変化 日値

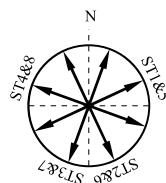
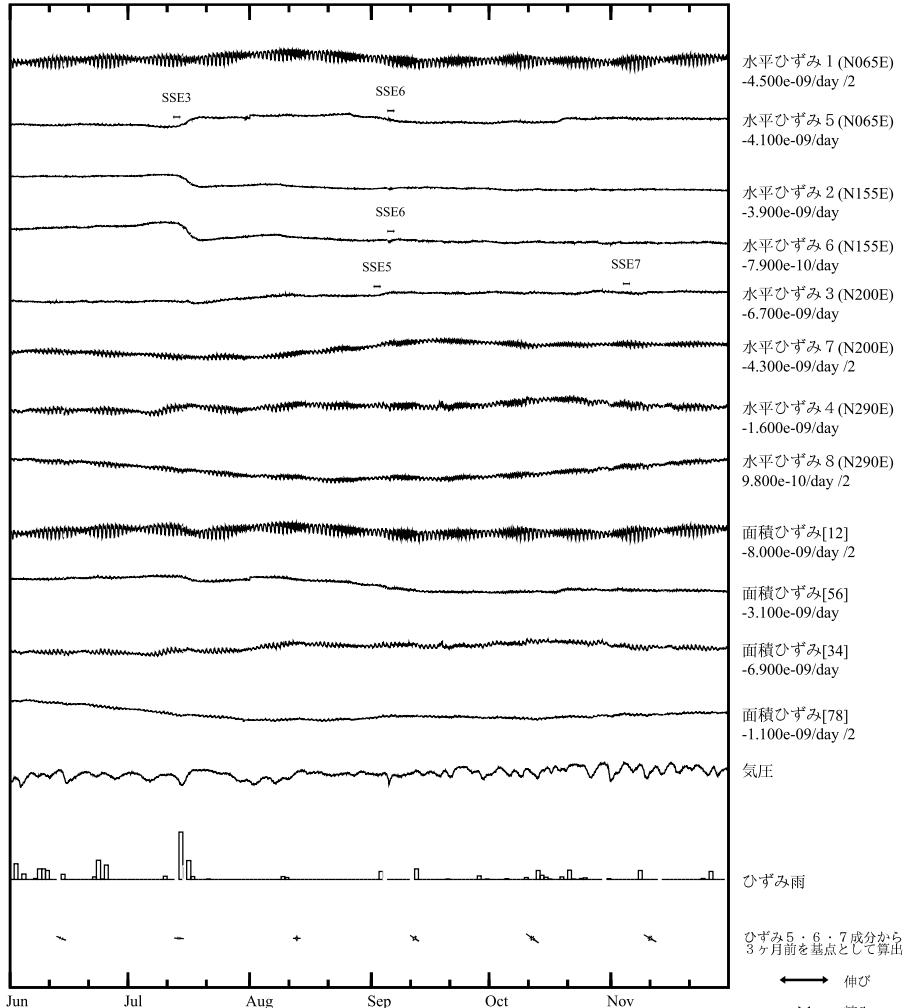
・最大剪断ひずみ、面積ひずみおよび主軸方向は
ひずみ 2・3・4 の各方向成分から2012年1月1日を基点として算出



気象庁作成

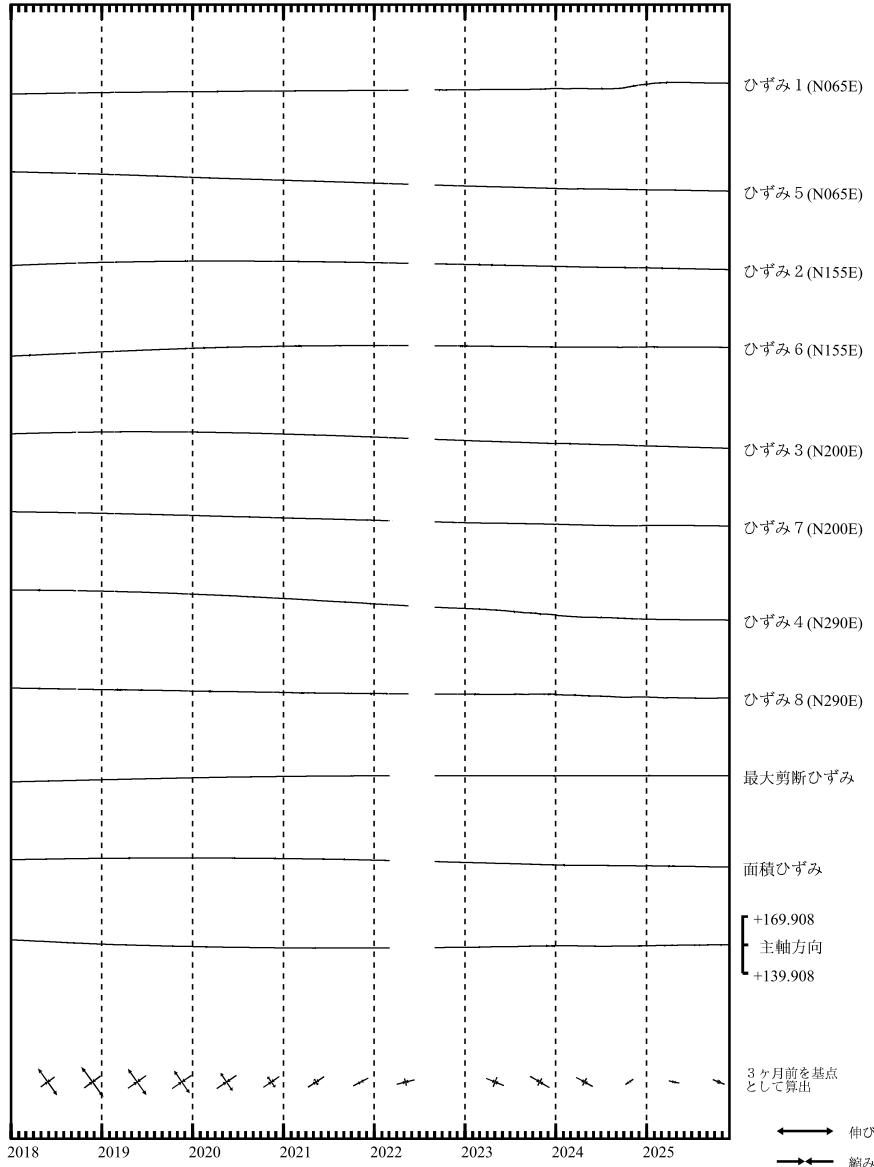
田原高松 ひずみ変化 時間値

・気圧、潮汐、降水、地磁気補正データ



田原高松 ひずみ変化 日値

・最大剪断ひずみ、面積ひずみおよび主軸方向は
ひずみ 5・6・7 の各方向成分から2012年1月1日を基点として算出



南海トラフ沿いの長期的スロースリップの客観検知

客観検知手法 (Kobayashi, 2017¹⁾) は、国土地理院GEONETのGNSS座標値F5解を用いて、長期的スロースリップに伴う変位を南海トラフに沿った経度・緯度別に以下の手順により検出したものである。

- (1)観測点の成分ごとに直線トレンド、アンテナ交換などに伴うオフセットと主な地震に伴うオフセット、年周・半年周成分を除去する。
- (2)長期的SSEの影響がほぼ見られない中国地方（九州沿いは九州北西部）の観測点の共通ノイズを全点から引き去り、領域全体を固定する。

(3)各観測点の水平成分からフィリピン海プレート沈み込みと逆方向 (S55E) の成分を計算し、南海トラフ沿いのプレート等深線25kmに沿って設定した経度または緯度0.1度間隔の地点を中心（九州は南東端）とする50×100kmの矩形範囲内の各観測点の成分の平均値を求める。

- (4)主な地震の余効変動を除去する。
- (5)地点ごとの時系列と1年の傾斜期間を持つランプ関数との相互相関と、対象期間前後の2年間変化量を求める。

なお処理の仕様上、最新期間については、今後データ追加に伴い解析結果が変わる可能性がある。図に示された高相関の時空間分布は、変動源の位置自体ではなく変化が見られた範囲を意味している。

また、プレート境界上に置いた矩形断層でのすべりによる理論変位と比較することにより、以下の手順で長期的スロースリップの規模を推定した（小林、2021²⁾）。

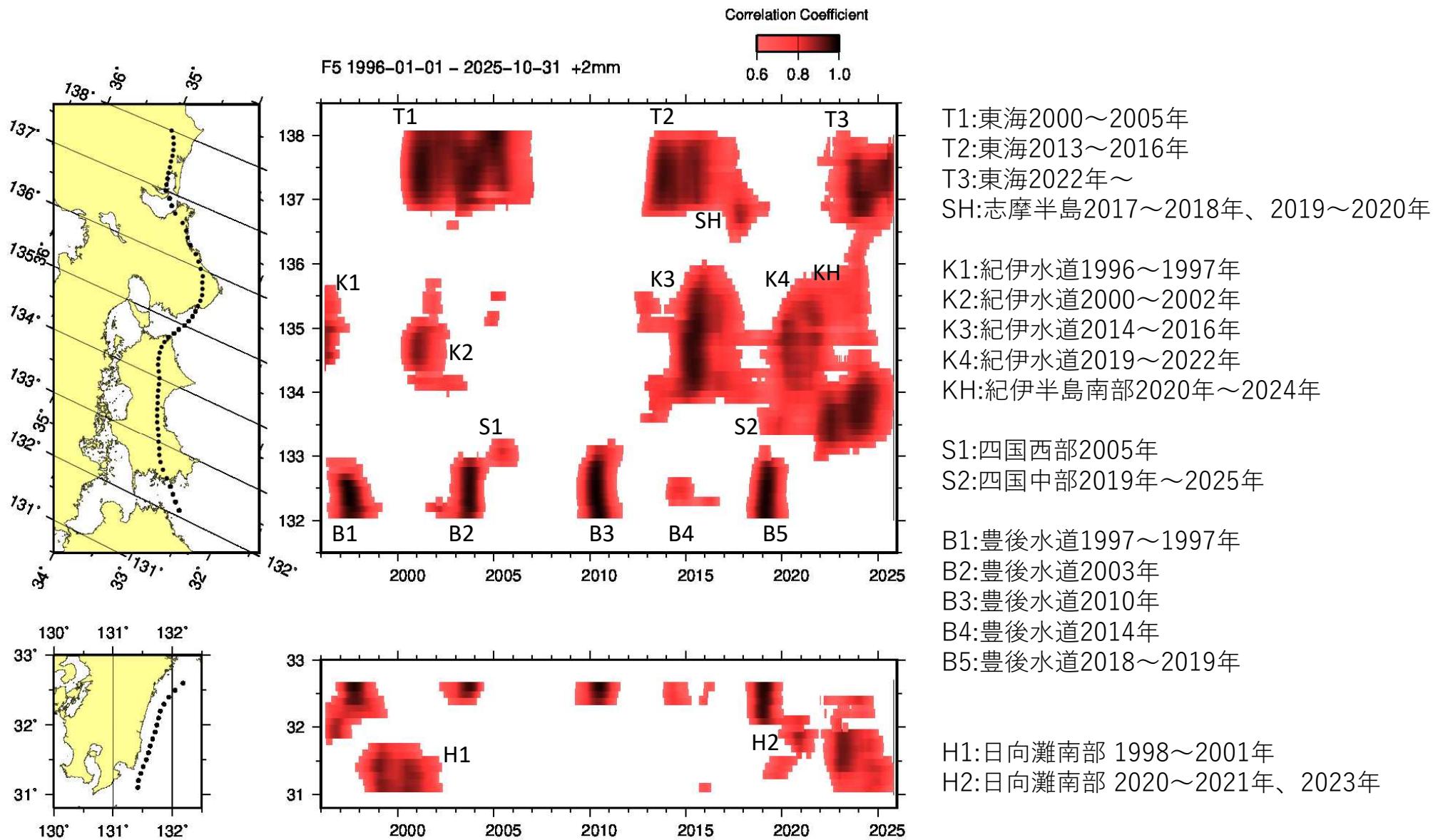
- (6) 南海トラフ沿いのプレート等深線25kmに沿って設定した経度または緯度0.1度間隔の地点を中心とする30×30kmの矩形断層上に100mmのすべりを与える、理論変位をOkada (1992)により計算する。

(7) 計算地点を中心（九州は南東端）とする地表上の50×100 kmの矩形範囲内の観測点における、(6)の理論変位の沈み込み方向と逆方向に投影した成分の理論平均変位を求める。

- (8) 手順(5)で求めた2年間の観測変位量と、手順(7)で求めた一定のすべり量を与えた場合の理論変位値とを比較する。このとき、2年間の観測変位量が大きい/小さい場合でも、単純化のためすべりの範囲は(6)で設定した矩形断層上にあると仮定する。矩形断層上のすべり量と地表変位量とは比例関係にあるため、2年間の観測変位量から2年間あたりのすべり量を求めることができ、対応するMwを算出する。

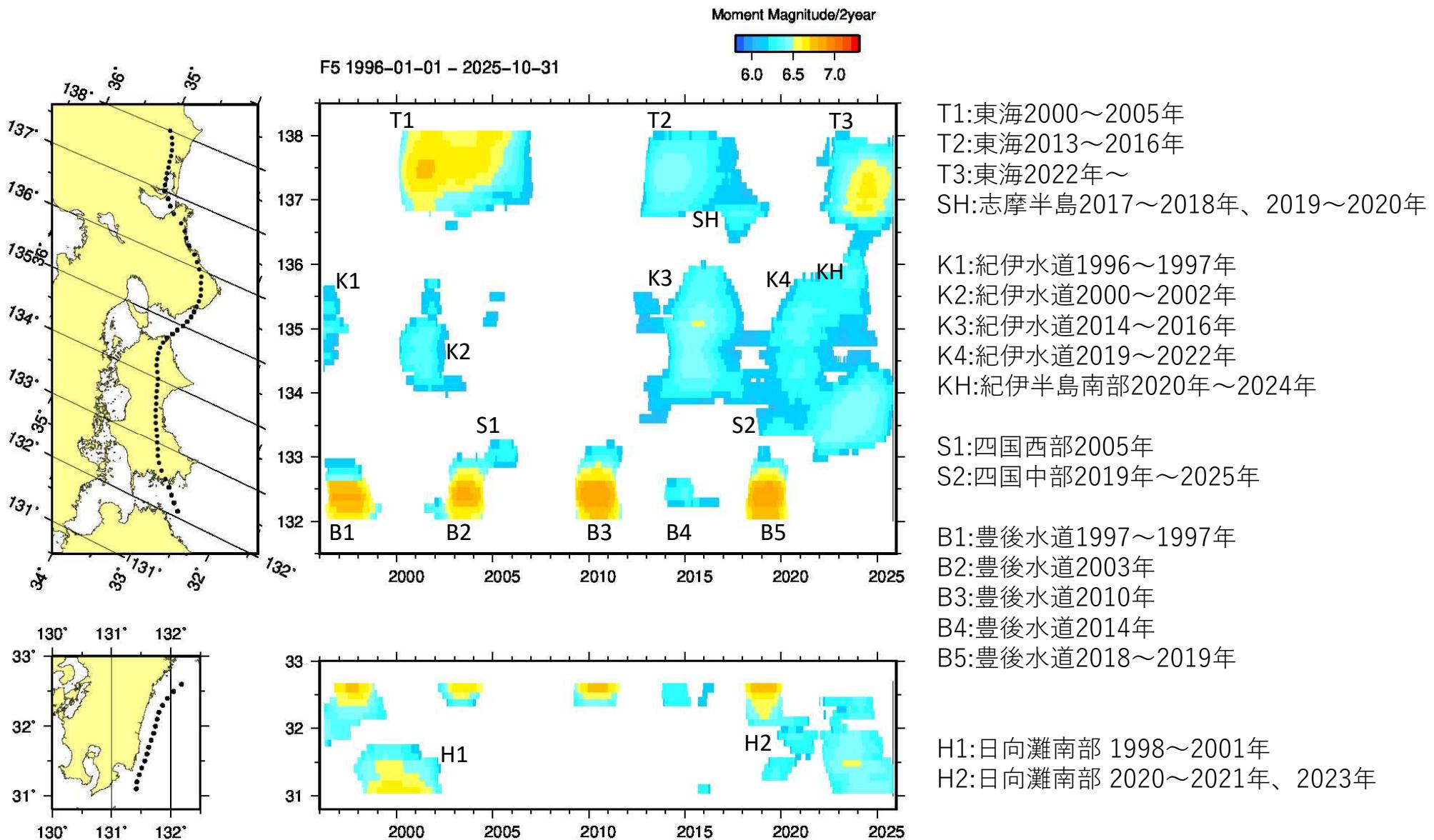
1) Kobayashi, A., 2017, Objective detection of long-term slow slip events along the Nankai Trough using GNSS data (1996–2016), *Earth Planets Space*, 69:171, doi:10.1186/s40623-017-0755-7.

2) 小林昭夫, 2021, GNSSによる長期的スロースリップ客観検出手法の応用—短期的スロースリップの検出と長期的スロースリップの規模推定—, 気象研究所研究報告, 69, 1-14.



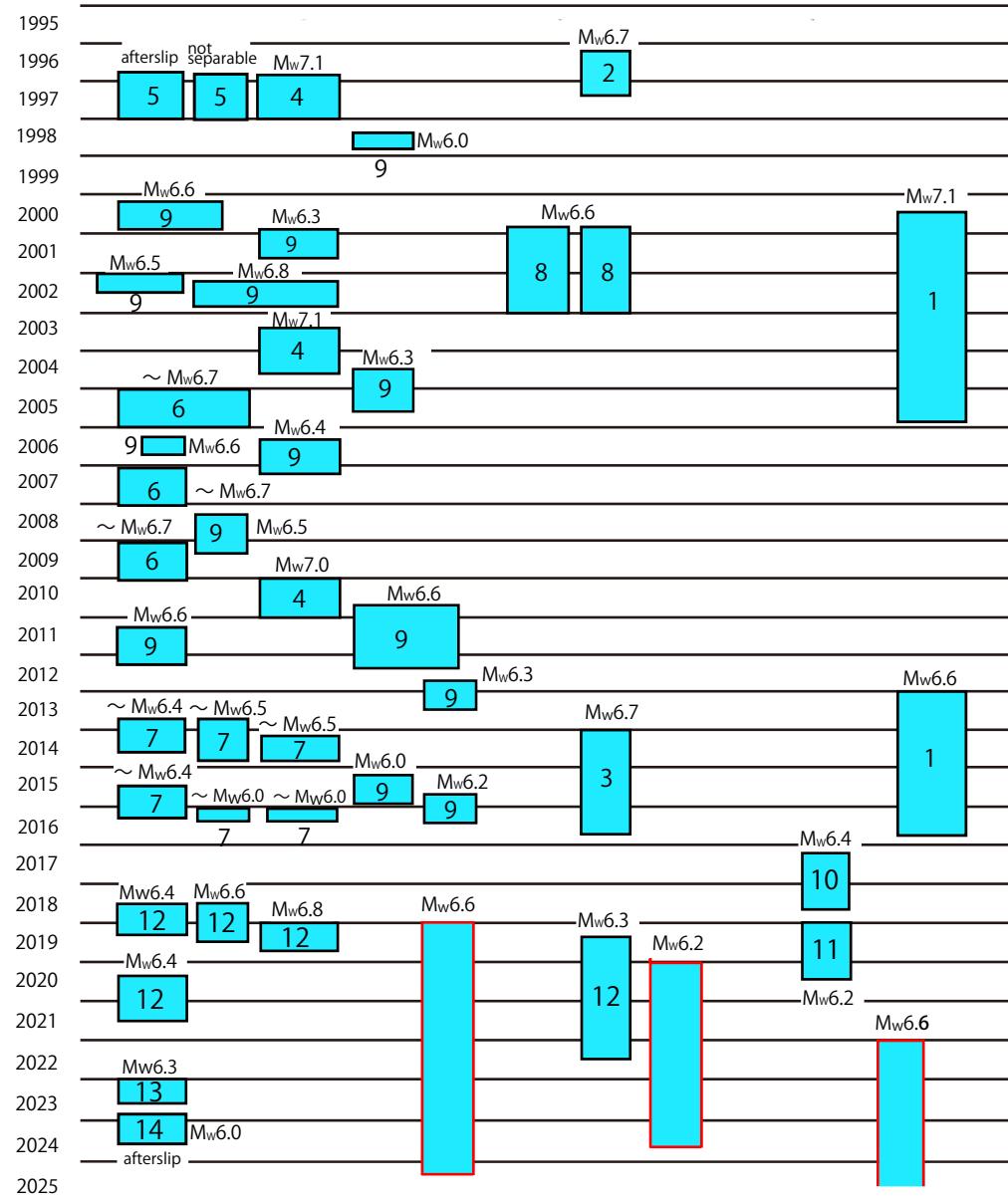
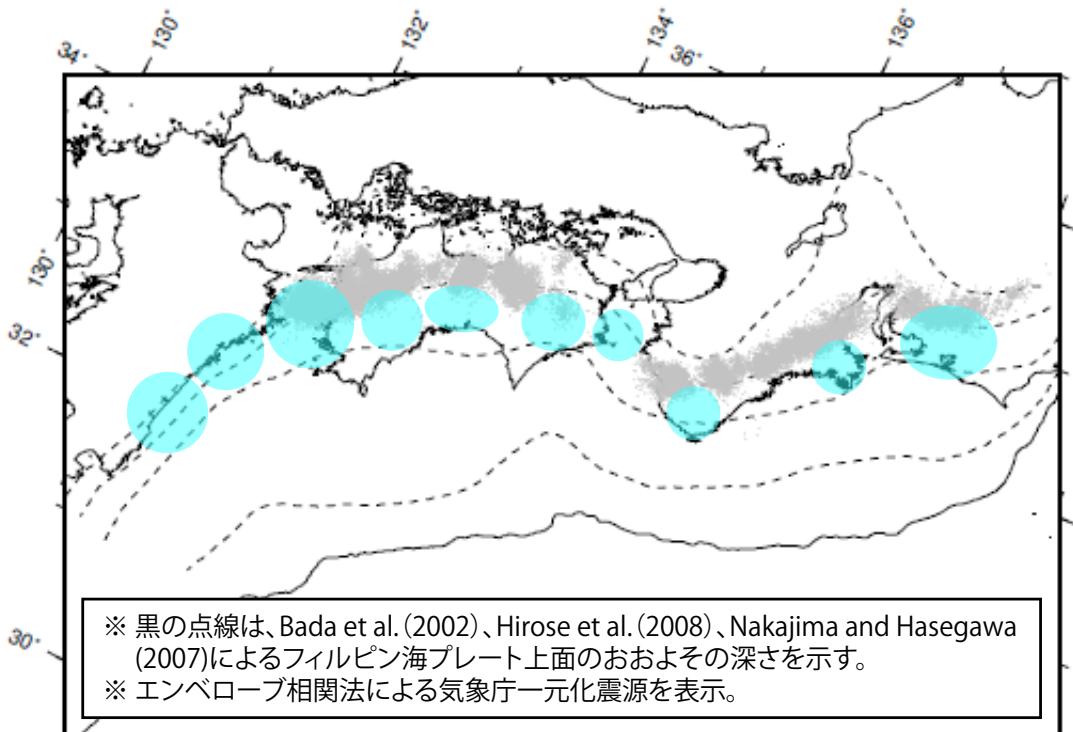
第1図 長期的スロースリップ客観検知図（1996年～2025年11月）

スロースリップに伴う非定常変位の範囲（場所、時間）を赤～黒で示す。色が濃いほどスロースリップの発生可能性が高い。右端の縦線は最新データ日を示す。なお、これは変位が検出された範囲で、変動源自体の範囲ではない。



第2図 長期的スロースリップの規模分布（1996年～2025年11月）
2年間あたりの変化量から推定したモーメントマグニチュード。

長期的ゆっくりすべりの全体概要



- Ozawa et al. (2016)
- Kobayashi (2014)
- GSI (2016)
- Ozawa et al. (2013)
- Ozawa et al. (2001)
- Yarai & Ozawa (2013)
- Ozawa (2017)
- Kobayashi (2017)
- Takagi et al. (2019)
- Kobayashi & Tsuyuki (2019)
- GSI (2021)
- Ozawa et al. (2024)
- GSI (2023)
- Ozawa et al. (2025)

□ 評価検討会資料

※ 本資料は、評価検討会における評価結果やOzawa et al.(2024)等をもとに、長期的ゆっくりすべりの発生場所と時期を模式的に示した図である。
それぞれのゆっくりすべりの詳細については、各文献等を参照願います。

気象庁
国土地理院